

始



324-81



法華上人全集

大正
12.4.20
内文

第六版序

明治三十九年七月始めて法然上人全集を頒布して已來捧讀者雲の如く四方に興り特に忝くも天覽台覽の榮を賜ふた。上人の遺法の益々遐代に普及するのを見て時機相應の宣言の彌々眞なることを覺える。第五版が盡きてしまつて早や幾年にもなる、明年は淨土開宗七百五十年の紀念の年であるから、更に遺教を恢宏すべく、今それを翻刻することにしたのである。明治四十四年改版の際九卷傳上下十八卷を加へてほゞ完璧を期したが、近年山城醍醐三寶院で法然上人傳記と題する一冊の古寫本が発見されて、それが淨土隨聞記、三昧發得記等の原本と見らるべきものであるから、今回追加として之を本文の後に採録した。これで上人の遺教は全く盡くされた

序
であらうと思ふのである。

大正十二年三月二十五日

編者謹記

二

法然上人御眞影

右京權大夫藤原隆信筆

國寶
京都知恩院藏



志然上人瞻真像

古京辨大夫藤原朝臣筆

圖寶

京曆辰恩刻蘇

法然上人御眞筆

國寶 京都廬山寺藏

慈然上人瞻真筆

國寶

京滸瀛山寺藏

送擇本願念佛集

南無阿彌陀佛

往生之業
念佛為先

道綽禪師立聖道淨土二門而捨聖道心歸淨土之文
安樂集上之問曰一切衆生皆有佛性遠劫以來應
值何人佛何因至今仍自輪迴生死不出火宅否曰
依大乘聖教良由不得二種勝法以排生死是以
不出火宅何者有二一謂聖道二謂淨土淨土其

法然上人全集目次

前附

- 一 法然上人御真影藤原隆信筆 京都知恩院藏
- 二 法然上人御真筆選擇集卷頭 京都廬山寺藏
- 序……………一—三五

本文

第壹輯 教旨

- 一 選擇本願念佛集……………一
 - 二 淨土宗略要文……………五六
 - 三 往生大要抄……………六三
 - 四 淨土宗略抄……………八六
 - 五 淨土初學鈔……………一〇六
- 目次

第貳輯 釋義

六	三部經釋	一一八
七	無量壽經釋	一三三
八	觀無量壽經釋	一六四
九	阿彌陀經釋	一九四
一〇	往生要集大綱	二一二
一一	往生要集略料簡	二一四
一二	往生要集詮要	二二〇

第參輯 法語

一三	念佛往生義	二二七
一四	念佛大意	二三二
一五	三心義	二四三
一六	登山狀	二四七
一七	逆修說法	二六七

第四輯 問答

一八	要義問答	三一六
一九	念佛往生要義抄	三三六
二〇	十二箇條問答	三四四
二一	十二問答	三五四
二二	東大寺十問答	三六二
二三	諸問答	三六七
二四	叡空上人との問答	三七三
二五	顯真法印との問答	三七三
二六	靜嚴法印との問答	三七五
二七	明遍僧都との問答	三七五
二八	諸弟子との問答	三七七
二九	一百四十五箇條問答	三八〇

第五輯 制誠

三〇 七箇條起請文……………四〇二

三一 送山門起請文……………四〇六

三二 一念義停止起請文……………四〇七

三三 念佛行者訓條……………四一四

三四 一枚起請文……………四二二

三五 二箇條疑問勸付附聖光房二箇條疑問……………四二四

三六 没後遺誠文……………四二六

第六輯 消息

三七 答九條殿下問書……………四三〇

三八 九條殿下の北政所へ進ずる御返事……………四三二

三九 御消息……………四三三

四〇 鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事……………四四六

四一 答兵部卿平基親書附基親奉上人書……………四五二

四二 遣鎮西聖光房書……………四五七

四三 黒田の聖人へつかはす御文……………四五七

四四 答空阿彌陀佛書……………四五九

四五 越中國光明房へつかはす御返事……………四六一

四六 正如房へつかはす御文……………四六三

四七 熊谷入道へつかはす御返事……………四七一

四八 大胡太郎實秀へつかはす御返事……………四七五

四九 大胡太郎實秀が妻室のもとへつかはす御返事……………四八七

五〇 津戸三郎へつかはす御返事……………四九四

五一 法性寺信實の伯母なる女房に遣はす御返事……………五〇〇

五二 或人のもとへつかはす御消息……………五一一

五三 或人の許に遣はす御文……………五二四

五四 或人の許に遣はす御返事……………五二七

第七輯 説話

五五 常に仰られける御詞……………五二八

五六	諸人勸化の御詞	五三五
五七	修學御物語	五四九
五八	立宗につき釋難の御詞	五五八
五九	大原問答御物語並に説法の御詞	五六〇
六〇	宗義解説の御詞	五六三
六一	聖光房に示されける御詞	五六七
六二	聖覺法印に示されける御詞	五七三
六三	勢觀房に示されける御詞	五七七
六四	隆寛律師に示されける御詞	五八〇
六五	禪勝房に示されける御詞	五八二
六六	信寂房に示されける御詞	五八六
六七	聖護院宮無品親王に仰せられける御詞	五八七
六八	平重衡に示す御詞	五八八
六九	熊谷次郎直實に示す御詞	五八九

七〇	宇都宮彌三郎頼綱に示す御詞	五九〇
七一	甘糟太郎忠綱に示す御詞	五九〇
七二	大和入道親盛に示す御詞	五九一
七三	高階保遠入道西忍に示す御詞	五九一
七四	元強盜の張本なりし教阿に示す御詞	五九二
七五	尼女房達に示す御詞	五九六
七六	室の泊の遊女に示す御詞	五九八
七七	母儀に登山の許を乞ふ御詞	五九八
七八	皇圓阿闍梨に閑居を求むる御詞	五九九
七九	東大寺大勸進職を辭する御詞	六〇〇
八〇	皇圓阿闍梨の事につき悲歎の御詞	六〇一
八一	御流罪の時門弟等に示されける御詞	六〇二
八二	御遺跡の事につき法蓮房に示されける御詞	六〇五
八三	御臨終の時門弟等に示されける御詞	六〇六

第八輯 雜纂

八四 淨土三部經如法經次第……………六〇九

八五 三昧發得記……………六一二

八六 夢感聖相記……………六一四

八七 類聚淨土五祖傳……………六一五

八八 善導十德……………六三四

八九 贊……………六三六

九〇 和歌……………六三七

附錄

第壹 傳記

一 上人傳(十六門記)……………六四一

二 法然上人傳記(九卷傳)……………六五九

三 法然上人行狀畫圖(勅修御傳)……………八〇四

四 臨終祥瑞記……………一〇五〇

第貳 眞偽未詳

一 金剛寶戒訓授章……………一〇五三

二 金剛寶戒釋義章……………一〇六五

三 金剛寶戒祕決章……………一〇七七

四 淨土布薩式……………一〇八五

五 大原談義聞書鈔……………一一一三

六 法然聖人御說法事……………一一二五

七 臨終行儀……………一一六六

八 往生要集略料簡……………一一六九

九 彌陀本願義疏……………一一七二

一〇 決定往生祕密義……………一一九九

一一 本願相應集……………一二〇一

一二 西方發心集……………一二〇八

一三 一向專修之七箇條問答……………一三三
 一四 念佛得失義……………一三三
 一五 念佛緣起……………一三九
 一六 法然上人御法語……………一四三
 一七 諸書に出たる法語……………一四五
 一八 興御書……………一七七
 一九 母儀に遣はさるゝ御返事 附母儀よりの御文……………一七八
 二〇 平重衡へ遣はさるゝ御返事 附重衡より上
人へ奉る文……………一八四
 二一 熊谷入道方へ狀の御返事……………一八九
 二二 御兩親の位牌の下に題せる御辭……………一九〇
 二三 和歌……………一九一

追加(本文雜纂の終り)

法然上人傳記……………一—二七

序

昨秋以來法然上人全集を纂修するに當りて、努めて大師上人の著作及説話等を蒐集網羅せんと欲し、料を諸方に搜索して其の眞偽を考へ異同を校して、漸く之を壽梓するとを得たり。本文の中輯を分つと八項を立つると都て九十あり。附録を二種に分つ、第一は則上人の紀傳にして四篇あり。第二は則眞偽未詳の書を列ねたるものにして、二十三篇を收む。

案ずるに上人の著作なるものは、長西錄に記する所によれば八部あり。即無量壽經釋一卷、觀無量壽經釋一卷、阿彌陀經釋一卷、阿彌陀經懺法一卷、往生要集料簡一卷、淨土初學鈔一卷、選擇念佛集一卷、淨土五祖傳一卷これなり。此錄は上人の弟子覺明房長西の撰述せる所にして、時代尤も初に在るが故に乃信憑するに足るべし。但し其の中に於て餘の七部は收めて本集に在り。ひとり阿彌陀經懺法のみは之を求索すれども未だ獲ると能はず。語燈錄にも之を編せず。景耀の眞宗教典志に此書未だ檢せずといへり。或は既に亡逸せるか甚だ惜むべきなり。

上人の入滅を距る六十二年にして、即文永十一年十二月、望西樓了惠漢語燈錄十卷

並に拾遺一卷を集録し、翌十二年正月又和語燈錄五卷並に拾遺二卷を纂輯して以て上人一代の言教を結集せり。此の兩錄十八卷の中には漢和二語にわかちて、上人の著作は勿論書牘、説話の類に至るまで殆ど網羅して餘ます所なし。當時若し此の纂輯なかりせば、大半の遺文は恐くは散佚して、末代の明燈空しく其の傳を失ひしならん。望西樓の功尤も偉なるものありと謂はざるを得ず。

漢語燈錄に收むる所は總て十七章あり。所謂大經釋第一、觀經釋第二、小經釋第三、如法書寫法則第四、如法念佛法則第五、選擇集第六、世に別行するが故に唯標往生要集のみを掲げて文を載せず大綱第七、同略料簡第八、同詮要第九、逆修說法第十、淨土五祖傳第十一、善導十德第十二、略要文第十三、初學鈔第十四、諸遺誠文第十五、これに三通あり、没後遺誠文、七箇條起請文、送山門起請文なり。遣北越書第十六、諸方答書第十七、これに二通あり、一は答兵部卿基親書、二は答空阿彌陀佛書是なり。漢語拾遺錄には三章五文あり、即三昧發得記第一、夢感聖相記を附す。淨土隨聞記第二、これに臨終祥瑞記を附す。答博陸問書第三、即答九條殿下問書是なり。然るに此の中に於て如法念佛法則は唯標目ありて其の文なし。如何にして此の一章を脱せるか。若くは如法書寫法則と殊なる所なかりしに由るか。今之を獲るべからざるが故に、闕て本集の中に收むると能はず。又淨土隨聞記

は勢觀房源智の記する所にして、乃上人の著作にあらざるが故に之を省く。但だ其の内、上人の法語にかゝるものは皆これを本集に採録せり。

又和語燈錄には、すべて二十四章あり。三部經釋第一、御誓言書第二、即一枚起請文、往生大要抄第三、念佛往生要義抄第四、即念佛往生要義問答三心義第五、七箇條の起請文第六、即念佛行者訓條念佛大意第七、淨土宗略抄第八、九條殿下の北政所へ進ずる御返事第九、鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事第十、要義問答第十一、大胡太郎實秀へつかはす御返事第十二、同妻室のもとへつかはす御返事第十三、熊谷入道へつかはす御返事第十四、津戸三郎入道へつかはす御返事第十五、黒田の聖人へつかはす御文第十六、越中の國光明房へつかはす御返事第十七、正如房へつかはす御文第十八、禪勝房に示す御詞第十九、十二問答第二十、十二箇條問答第二十一、一百四十五箇條問答第二十二、上人と明遍との問答第二十三、諸人傳説の詞第二十四、附御歌是なり。又和語拾遺錄に八章あり、即登山狀第一、示或人詞第二、津戸三郎へつかはす御返事第三、是に三通あり、示或女房法語第四、念佛往生義第五、東大寺十問答第六、御消息第七、往生淨土用心第八、是なり。第七の御消息に四通あり、一は唯御消息と題す、二はある人のもとへつかはす御消息、三は熊谷の入道へつかはす御返事、四はある時の御返事なり。此の中、便宜

に隨て其の標目を改めたるものありと雖も、而かも悉く類聚して之を本集に収録し一も遺すところあるなし。

蓋し和語燈錄並に拾遺合七卷は、其の後跋に記する如く元亨元年七月に初めて開版せり。即文永十二年におくる、四十六年なり。當時了惠すてに七十九歳の老齡に達し、開版の舉を見て深く感歎の詞を述べ、後寛永二十年再び之を上梓す、即隻字の本是なり、今現に世に在り。次て正徳元年十二月、義山改めて此書を印刻す。其の原本は武州金澤稱名寺文庫に藏したるものなり。原本の奥書にいはいはく、

和字語燈錄全部七卷、了慧上人撰集刊行也。予以建武五年仲春與去冬自所校正漢字燈錄草本、同藏武州金澤稱名寺文庫者也。下總州鐮木光明寺良求

これに依りて見るに、光明寺良求は建武五年二月、望西樓了惠の撰集刊行せし和字の語燈錄七卷を取て、之を金澤文庫に藏したることを知るなり。然るに了惠の刊行せし所といふは、即元亨開版の本を指すこと明かなれば、正徳本は全く元亨の古本を再梓したるものにして、尤も依憑するに足るものと謂ふべし。之を寛永本に比較するに稍差違あり。乃年久うして魚魯の誤を生じたることを知るなり。今本集は専ら正徳本によりて之を載録せり。庶幾くは長夜の明燈たるを得んか。

又漢語燈錄十卷並に拾遺一卷は、光明寺良求、建武四年十二月を以て亦之を寫して金澤文庫に藏す。其の記に云く、

建武四年七月、得了慧上人所集語燈錄艸本十八卷。從其初冬至臘月廿五日、與同門老宿四五輩治定之畢、更寫一本藏武州金澤稱名寺文庫者也。下總州鐮木光明寺良求

これ原本の奥に書するものなり。上の和語燈錄の奥書には了慧上人の撰集刊行する所云云といひ、今この記には艸本十八卷和漢兩錄の艸本を合してなり云云といふを以て見れば、當時和字の本は刊行せられたりと雖も、漢字の本は未だ鏤刻せられざりしとを知るべし。然れども既に了慧の艸本を得て之を治定したりといへば、此の金澤藏本の漢語燈錄も亦極めて貴重なるものと謂はざるを得ず。後寛永の初に及て白譽至心、豆州藥王山寺に於て適、金澤文庫の藏本を得、因て義山をして對校訂正して以て之を世に出さしめき。是れ即漢語燈錄印行の初なり。至心の記に云く、

開祖大師一代法語有和者有漢者、多是門人之所記也。望西樓師嘗集之大成、名曰語燈錄。其和者已刊行矣。其漢者則未也。予曾把各二三本讀之。魚魯倒置、遺字闕脫、往々有之。又背馳大師尋常法語而矛盾宗義者、間亦有之。予怏々措卷、默々思付、疑雲未披

陰晦度日。既而自搜枯腸。記得往事。豆州藥王山寺有武州金澤藏本。昔時遊歷之次所親見也。於是遣弟子某往彼請之。良願不違。不日齎來。予欣然披卷展覽。一過。曾所疑者。果然掃迹。而從來陰晦一時歸晴矣。不亦快乎。想是背宗之徒。欲遂邪僻之情。僞誣安頓。無根之語。於茲以爲濫托之所據者必也。因使義山法師就彼善本對校訂正。去瑕玼。還全璧焉。校成藏之當山書室。庶幾綿代不墜地矣。予日已西矣。先欲玉其於成。其以屬刻。則亦有日也乎。寶永二乙酉三月十有一日。知恩院四十二世白譽至心記。

之に依て見るに寶永以前すでに漢語燈錄の傳寫數本ありしといへども、謄寫訛脫多く、加之他門の徒擅に文字を改竄して自立の義に雷同せしめたるを以て、薰菴良に辨じ難きものあり。至心乃之を慨し遠く金澤藏本を索め得て、新に之を割闕に附し、以て從來所傳の紕繆を匡正したることを知るなり。然るに眞宗教典志に依るに漢語燈錄に新古二本あり、古本は寫傳して京都小川西福寺に在り如何存否傳持の由序は往生要集釋卷尾に記する如し。新本は寶永二年白譽至心、其の徒義山をして之を校刻せしむ。刪補縱橫殆ど舊制を失す。古本及諸舊籍に載する諸文を以て之を對檢するに、損益する所知るべきなり云云。蓋し教典志の作者は疑を金澤藏本に懷き之を以て虛構にして、至心及義山が古本を刪補改易せし口實に過ぎずとなして、罵

詈の言を加へたるものなりと雖も、これ甚だ非なり。何となれば此等は事實問題にして、宗論の問題となすべからざればなり。若し藥王山寺に藏せりといへる古本が、果して金澤藏本にあらずとせんか。何ぞ其の事實を指摘して之が辯駁を試みざる。己の宗義に合せるものは皆取りて之を眞とし、合せざるものは捨て、之を贋とするが如きは、宗見を先として事實の存否を判斷せんとする者なり。危險豈に之より甚きものあるべけんや。且夫れ其の所謂西福寺古本なる者果して幾許の價值を有すべきや。傳持の由序は彼れが安永七年六月に梓行せし往生要集釋卷尾に記すといふを以て、之を索めたるも獲ると能はず。但南條文雄氏の藏書に就きて適々寫本漢語燈錄一卷神興氏を得、之を披見するに中に往生要集釋、同略料簡、同料簡及同證要の四篇を收む。之を寶永本に比較するに篇目章段同からざるのみならず、其の内の略料簡及料簡の二篇は闕て是れ無し。因て今轉寫して之を眞僞未詳の中に採録せり。想ふに此の寫本は西福寺本の謄寫にして、景耀の所謂往生要集釋は即これならん。而して彼れは此の本の少しく寶永本に異なる所あるを奇とし、之を梓行して世人をして至心等の言ふ所に疑を懷かしめんと努めたるものならん。然れども教典志に記する所によりて察するに、其の西福寺本と寶永本とは、略料簡及料簡の二

篇を有すると否とを以て大差となすものにして、其の以外は唯字句の少異あるに過ぎざるが如し。若し然らば景耀の所謂古本なるものは、至心の記に言ふ所の魚魯倒置の古寫本ならん。且夫れ略料簡及料簡の二篇に就きて試に熟讀するに、唯少異あるのみにして大旨全く相同じ。是の故に本集の中には唯略料簡一篇を収録して、料簡は之をかゝげず。況や略料簡といへども其の文旨は悉く寶永本中の往生要集釋義の内に之を含有せるに於てをや。たとひ又西福寺本は果して一顧の價値あるものとするも、之に依りて金澤本を貶抑せんとするは、乃宗見の骨張に出づるが爲にして、固陋も亦甚しと謂はざるべからざるなり。

又世に西方指南抄と題する書六卷あり、上人の法語及消息等を滿載す。各卷の奥書に康元元年各卷月日愚禿親鸞八十四歳にして之を寫すとあり。此の書若し眞ならば了惠に先だつ凡そ二十年にして、親鸞は大師上人の遺文を輯録せるものと謂はざるを得ず。然るに其序に記する所に依るに、此書は寛文の初、京都五條に於て始めて鏤刻せしものにして、實に四百餘年間隠没して會て世に出てざりし所なり。是れ既に怪となすに足るべし。次で天和三年勢州高田齊賢、同地堅松院に於て親鸞眞筆の寫を得、因て前刻を再治し之を世に行ふといふといへども、所謂親鸞の眞筆甚だ

疑ふべし。法輪集、二十四輩記等には甲州萬福寺にその眞蹟を藏すと記せり。由來古徳の眞蹟と稱するもの、到る處是れ多し。若し眉に唾して之を讀まざんば、恐くは人の笑を招かん。眞宗の學者率ね此の書を信ぜず。唯法要義概、先啓目錄等之を眞傳の部に編するのみ。由之今其の内容を見るに、初に法然聖人御說法事上下二篇は、即漢語燈錄の逆修說法と大同少異にして、字句互に詳略あり。逆修說法の末尾に了惠自ら記して云く、此錄二本あり一は眞字即漢一は假字即和なり、未だ何れか正なるを知らず。今且く眞字の本に就て之を集むと思ふに、此の抄の御說法事は即和語なり、或は是れ了惠の所謂假字の本か。是非知るべからず。故に今收めて之を附録第二に置く。次に建久九年記は即三昧發得記なり、御夢想記は夢感聖相記なり。たゞ漢和其の字を異にするが故に、用語稍同からざるのみ。次に法語十八條あり、その中語燈錄、勅修御傳等に出さるるものは、之を一括して眞偽未詳の中に編す。次に法然聖人臨終行儀は了惠の臨終祥瑞記、及勅修御傳の諸人感夢の記載等に相似て、而して文は頗る廣し。但上人の所述にあらざるが故に之を載せず。次は七箇條起請文、次の葬家追善事は没後遺誠文の一節。次の源空上人私日記は略して上人一代の行徳を記す。然れども本傳にあらざるが故に固より之を録せず。次に三機分別は語燈錄等に是

れなし、故に收めて附録第二に在り。次は鎌倉二位の禪尼に答ふる書。次の四箇條問答は語燈錄、勅修御傳等にも之をかゝげず、故に今取て眞僞未詳の中に載す。次は大胡實秀の妻に答ふる書。次は同實秀に答ふる書。次は正如房に遣はす書。次は越中の國光明房に遣はす書。次は平基親に答ふる書なり。但し後の二文は字句稍語燈錄に同からず。恐くは親鸞の末徒之を改竄したるものならん。次は十二問答。但し最後の一條を闕くが故に唯十一箇問答あり。次は淨土宗大意。次は四種往生事。此の二章は語燈錄並に勅修御傳等に是れ無きを以て、寫して之を眞僞未詳録に編す。次は黒田の聖人に遣はす書。次は念佛大意。次は九條の北政所に答ふる書。次は熊谷入道に遣はす書。次は要義問答。次は津戸三郎に答ふる書なり。凡そ二十五章。大抵語燈錄等に^即出だす所と相同じ。眞宗教典志に云く、或は疑ふ此抄宗祖親の手に出づるに非ずと、今謂く編者の眞僞敢て之を論ぜず、所編の法語は實に是れ吉水の遺文、錄せざるべからずと。是れ亦一種の所見なり。惟ふに此の書は中世眞宗の教徒、名を親鸞に藉りて以て上人の遺文を輯録し、間、亦私語を加へて以て自家所立の張本となせるものならん。然れども沙中自ら金あり、遊化彌、弘くして何の處に遺音を留むべきや、固より測るべからず。故に今悉く採收して之を本集の後に附するものなり。

凡そ此の集の本文に録する所は、主として漢和兩語燈錄に依りて之を類聚せるものなり。上人の遺文は了惠の手によりて實に今日に傳ふるを得たるものと謂はざるべからず。其の傳持の由來は略して上に述ぶる所の如し。但中に於て選擇集は上人入滅の年既に之を鏤刻して世に別行したるが故に、漢語燈錄にも唯其の標目のみ掲げて本文を録せず。因て今少しく此の書に、就て記すべし。選擇集は建久九年春、藤原兼實公の命によりて撰進する所なり。然るに當時誹謗の者をして徒に紛諍を生ぜしめんとを懼れたるが故に、滅後の流通を期して現前の披露を許さずといへども、建永二年上人遠流の科に處せられて、久しく洛下の往還を得ざりしを以て、門弟等轉た落寔の感に堪へず、遂に建曆元年選擇集上梓の擧を企て、先づ平基親をして序を製せしむ。其辭に云く、決疑鈔凡例に云く平氏序文諸本同からず文に増減本所載する所による。

夫以專稱南護之教門者。直至西刹之要路也。不但釋迦金口之宣。亦爲彌陀素意之願。二日三日執持名號之證。諸佛舒舌。十聲一聲必得往生之義。衆生銘肝。爰吾大師空和尚。有一軸文集之書。號選擇本願念佛集。誠是渡苦海之通津。亦爲照長夜之靈光。人無三學橫截。四流弘願。密意斯彰。佛以一行普濟。萬機大悲。本懷方暢。隨犯隨懺之行。誰非

我分易修易往之法。須仰他力。不入此門。安到彼岸。我等何幸。遇斯靈典。萬劫一聞。寧惜身命。雖然祕密壇行人可闍之。定慧優備。凝即身之觀也。大小乘學者難操之。戒開精進。愛隨心之法也。惟於願生念佛之衆生者。道俗貴賤。誰不歸者。喜哉。天祐神護。濁世之法。潤。否命早通。時哉。君感臣悅。淨土之宗教。嘉運大啓。因茲雖知埋壁之誠。還貽彫版之印。於戲。立元聖祖五千言。令尹早著上下之典。選擇本願十六章。門徒將得摺寫之益。思德之志。古今惟同者歟。于時辛未之歲。建子之月。聊勸意樹。遂傳來葉云爾。

辛未の歲は建曆元年にして、建子の月は即十一月なり。而して此序は其の下句に成れりといへば、上人恩免を蒙りて歸洛せられたる後、平氏之を悦て乃執筆したるものならん。良榮の決疑鈔見聞に云く、此序並に奥書の意を案ずるに大師御在生の時、御弟子等修飾刊行の願を大師に呈し、又基親をして其の願末を序せしむ、時に建曆元年辛未十一月なり、明年壬申正月廿五日大師入滅す、門弟戀慕の思に住し、且報恩の爲め、且流布の爲に、同年九月八日刻彫の功終ると。又商量鈔に云く、建曆第二壬申源空上人遷化の年、越後法橋なる者、白川法蓮房信空に謁して互に相議して云く、聖人の在世、壁に埋むの誠ありと雖も、没後の今は此の選擇集を以て上人の在世と仰くべきなり。冀くは彫版の印を開て書寫の勞を助け、普く四海に施さんと。即建曆二

年九月八日板本を出だし、始めて基親の序を載すと。之に依るに開版は没後方めて之を企たるが如きも、基親の序は其の前年に在れば、良榮の言ふが如く、上人在世の日、門弟等既にその願を發せるものならん。

案ずるに選擇集の本に多種あり。決疑鈔に記する所に依るに、選擇集の本に廣略あり。略は則高覽の本藤原兼實公に贈れるものなり。有る遺弟云く廣本は執筆の人、初心の者の爲に後に名目を加ふ、自ら少異あり。高覽の本には如かず云々。而して記主良忠の稟承せし所は即其の高覽の本なりと。又商量鈔に云く、此集廣略兩本あり。有云く略本は今師の撰述、廣本は眞觀房加筆。又有云く廣本は今師最初の艸書、略本は添削の正本なりと。又元祿開版の選擇集義山奥書記に依るに、此集四本あり。第一は稿本、始章に三經の説時を論ずる者是也。第二は刪本、初め殿下に呈し、及聖光に授くる者即高本是なり。第三は正本、末後修飾刊行し、平氏序を作る者是なり。第四は廣本、門人その文を増證する者是なり。初後の二本は世に行はれず、傳刻する所は第二第三のみ。而かも第三は修飾刊行皆祖意に出るが故に、是を正本となす云々。正本とは即建曆開版の本を指すなり。蓋し高覽本と建曆本とは字句少しく差違あり、三輩章の初の無量壽經下云の六字、高覽本に是れ無きが如き、其の例なり。決疑鈔三輩章釋の下に、若し餘篇

に準せば無量壽經下云といふべし、無きは略なり。故に建曆二年開版の摺本には此の言ありと。蓋し建曆本は上にいふが如く大師の滅後久からずして刊行せられたりと雖も、後十五年を経て忽ち絶板の厄に遭へり。即是れ山門の惡徒、大谷の墳墓を破却せし年にして、念佛の障難この時を以て尤も甚しとなすなり。和事始に、元久三年山門奏請して選擇集の板を焼却せんとすといふは信ずるに足らず。元久恐くは嘉祿の誤ならん。それより十二年を経て、延應元年再び此集を上梓す。所謂高覽本印行の初にして、延應本と稱する者即是なり。此の本の奥書にいはいはく。

延應第一之曆、活洗第六之天、校根源正本、直展轉錯謬、即寫印字、用令流布矣。

根源の正本と校し展轉錯謬を直すといふは、所謂稿本並に高覽本と對校して、諸人傳寫の錯謬を匡すといふの意ならん。惟ふに當時建曆の印板既に焚燒せられたりと雖も、其の本猶無きにあらず。然るに今之を棄て、而かも彼の高覽本を印行したる所以は、恐くは義山の曰ふが如く、建曆本を疑ふて、以て門人の手に出づと爲し、に由れるならん。又摧邪輪の註に有人の説を擧げて、此の書即建曆本更に上人の製作にあらず、是れ門弟の撰する所なり云云。又有人の説をあげて、上人深智ありと雖も文章に善からず、仍て自製の書記なし云云とあり。摧邪輪は梅尾高辨の著はす所

にして、其卷尾に建曆二年十一月二十三日草之了と記するを以て見れば、早き時代より建曆本を批議して、以て門人の所撰と疑ひし者あるを知るべし。然れども前にもいふが如く平氏の序は建曆元年に在り。若し然らば建曆本は假令門弟等之を修飾刊行すといへども、而かも良榮が言ふ如く、必ずや生前大師の首肯を得て、之を滅後に印行せしものならずばならず。是の故に尙建曆本を以て正本となすに足るべし。建長以降延應本を刊行する者相紹ぎ、其の本獨り世に流行せり。義山之を慨し、白譽至心に謀りて、元祿九年正月を以て再び建曆本を上梓し、爾後今日に及て専ら其の本を用ゆ。今本集に收むる所は即此の元祿開版の本に據るなり。

又選擇集の古寫本にして現に世に傳はれるものに兩種あり。一は京都廬山寺に藏し、一は大和當麻往生院に藏す。華頂山徹定の撰せる祖蹟跋文に云く。

宗祖大師眞蹟選擇集有二本。一在大和當麻往生院。一在京都寺街廬山寺。其廬山寺

本。蓋艸本而艸行相半。書體不一。文所呈月輪兼實公本今尙在九條殿砂今茲甲申二月

月。余獲觀往生院本。楷字兼行。筆法秀潤。眞美本也。卷尾有元久元年十一月廿八日書

寫了。願以此功德往生一佛土而已。廿有五字。又有元久元年十二月廿七日源空十二

字。其下書花押。蓋附訓點時款識歟。傳云此卷我華頂山舊藏也。文和中誓阿普觀上人

退隱時徒收該院云。今熟閱卷中字體。撰擇作櫻櫻。南作南。解微作辭微。菩薩作菩薩。醍醐作醍醐。雖作雜。壽作壽。光作光。尊作尊。局作局。攝作攝。願作願。溺作溺。血脈作血脈。對作對。唐作唐。寂作寂。後作後。等作等。戒作戒。稟作稟。僕作僕。類。咸可以證古文字之態。裁也。又至假字ノ作。シ作之。テ作チ。ホ作マ。キ作ヘ。マ作丁。メ作メ。血脈慚愧歸毀厭之類。是古假字古音跡也。然而世之體于古字者。或抱疑不能審定。新古之區別。亦可笑耳。嗚呼。如此卷。真字內無比鴻寶。可想見大師開宗之大勳也矣。所行于世。延應板。寬永板。咸據于此本。惜乎書體較異。大失古色焉。院主德定和尚。徵余跋。因書鄙見。以附卷尾。

明治十七年三月上浣

大教正華頂山順徹定和南

是れ往生院本及廬山寺本を以て並に皆大師の眞蹟と爲せるものなりと雖も、近代の鑑定に依れば、往生院本は恐くは門弟の筆寫にして、廬山寺本は本書製作の當時に於ける艸本ならんといへり。今親しく廬山寺本を拜するに、其の書體一ならず之を決疑鈔直牒及持阿の決疑鈔見聞に、選擇本願より念佛爲先の註に至るまでは上人の御自筆なり。第一篇より第三本願章の能令瓦礫變成金に至るまでは安樂房の執筆なり。問曰一切菩薩雖立其願より十二付屬章に至るまでは眞觀房の執筆なり。第十三章より第十六章の私云一如經法應知に至るまでは他筆なり。名字を失す。辭

以善導以下は又眞觀房の筆なりと云ふに對し見るに、全く符合する所あるが如し。若し然らば廬山寺本は建久九年の元初の稿本にして、其の中、選擇本願念佛集南無阿彌陀佛往生之業念佛爲先の廿一字は、正しく大師の眞蹟に係り、實に海内無比の鴻寶と謂はざるを得ず。既に七百十餘の星霜を經、幾多の災變禍難を免れて以て之を今日に傳へ得たるは、大師上人の冥佑の然らしむる所にして、吾等末徒の最も深く尊重すべきものたり。明治四十二年四月國寶に編入せらる。本書の卷頭に掲ぐる所は、其の第一葉を複寫せるものなり。

往生院本は、所謂延應板寬永板の原本と稱せられ、亦固より貴重すべきものなり。其の卷尾に元久元年十一月廿八日書寫了の文字あれば、以て傳持の久しきを見るに足るべし。因て想ふ、拾遺古德傳に、選擇集の撰述を元久元年となせるものは、此の往生院本の奥書の年月を過まりて、以て撰述の年となせるものなることを、又九條殿砂村文庫に在りといへる所謂假字の本は、未だ拜見するに及ばざるが故に、之を詳にする能はざれども、正源明義抄に、建久八年初冬、上人先づ假名書の文を製して、之を月輪殿に進ずるに、眞名に改めんことを請はれたるによりて、翌九年正月清書して一本を月輪殿に贈られたることを記せるに合せ勘ふるに、或は別に假字の原本

ありしやも知るべからざるなり。

上人の滅後に及て門弟等の中に、上人一代の行徳及勸化の法語説話等を記述せるもの甚だ多し。所謂二祖聖光の徹選擇集、授手印、淨土宗要集宗即西念佛三心要集、念佛名義集、念佛往生修行門、勢觀房源智の選擇要決、淨土隨聞記、聖覺の上人傳門即十六三祖良忠の決疑鈔、淨土宗要集宗即東決答授手印疑問鈔、傳通記、了惠の聖光上人傳、其の他、進行集、念佛問答集、筑紫物語集、二十八問答、白川消息、閑亭後世物語並に舜昌の法然上人行狀畫圖御勅修法然上人傳記即九等是なり。是等の著書は上人の眞髓を傳へたる直弟、若くは其の相承を稟けたる門流の師に成れるものにして、其の記する所は深く信憑するに足れり。因て遍ねく之を涉獵して、その中に出づる法語及説話等は悉く之を本集に収録せり。唯時月の切迫の爲に其餘の諸書を通覽すること能はず。遺漏定めて多からん。希くは他日の補正を待つのみ。中に就て進行集以下數部は作者の名を詳にせず、又多く其の書を獲ず。和語燈錄日講私記義山の講に、進行集は未だ得ず、後人の考を待つと。此書恐くは法蓮房信空の撰する所ならん。念佛問答集亦未だ獲る能はず。されど其内禪勝房との問答を記するより見れば、或は彼れの所集か、又日講私記に、物語集とは定て鎮西の物語集をいふならん。了曉の授手印

問書に、其師西譽嘗て筑紫物語集の事を云云せしを記するより見れば、西譽の當時尙此集在りしならんと云云。若し然らば此の集は鎮西聖光の撰か。或は其の門弟の集か。二十八問答亦何の書といふことを知らず。たゞ其の中俊乘房重源と上人との問答を載すれば、恐くは重源の筆録ならん。白川消息は亦信空の記する所。彼れは洛東白川の邊に住して、世に白川の法蓮房と稱せられたり。閑亭後世物語は現に世に傳ふ、和語燈錄に閑亭問答集といふものは是なり。此の書古より隆寛の作と傳ふれども、今之を閱するに、處々に隆寛の語を引載すれば、定て其の所述にあらず。恐くは門人の出だす所ならん。此の一書を除ける外の數部は、其の本を得べからざるが故に、今姑く和語燈錄に出だす所を轉載するに過ぎず。

上人の傳記として最も古きものは聖覺の上人傳なり。此書安貞元年極月の所撰にして、上人の滅後十五年を経たり。全篇十六門を立つ、故に世に號して十六門記と云ふ。延寶四年之を印行す。又收めて續羣書類從に在り。本集の附録第一に載する所是なり。但坊本標して黒谷源空上人傳といふも、古寫本には上人傳とあり。今之に従ふ。此書聊か疑ふべき勢觀房の淨土隨聞記の中に亦上人の行狀を録せりと雖も、此の書は法語を記載するを要となすが故に、一代の記事に及ばず。法然上人祕傳抄は隆

寛の所編といへど信ずるに足らず。又勅修御傳に弘長二年の比、法蓮房の弟子隆寛はの弟隆寛は敬西房關東下向の時、上人の傳を西明寺時頼に進じたることを記せり。良榮の決疑鈔見聞に、黒谷上人傳敬西作也とあり。敬西名は信瑞、世に信瑞の一卷傳と稱するもの是なり。然れども此書今逸せるか、之を獲ること能はず。漢語燈錄の中に臨終祥瑞記一篇あり、作者の名を詳にせず。唯限りて上人臨終の一段を叙するものなりと雖も、文字謹嚴にして事實正確、良に貴ぶべきが故に之を附録第一に編す。

徳治の初、叡山功德院舜昌、後伏見上皇の勅を蒙りて上人一代の芳躅を網羅し、本傳を編修す。名けて法然上人行狀畫圖と云ふ。又勅命によりて撰集せる所なるが故に、世に稱して勅修御傳と號す。四十八卷に別ち、二百三十七段を立つ。行狀の詳悉にして文章の優美なること諸傳に比類なく、安心起行の要義、念佛往生の靈驗玉をつらね鏡を懸く。是れ即上人一期の紀傳なりといへども、亦大師の遺教剩す所なく之を載録せり。語燈錄の編集に後る、凡そ三十年なるを以て、彼れに收むる所、殆ど此に漏るゝものなく、加之治ねく舊傳舊記を涉獵して、信すべきものは之を取り、疑ふべきものは之を捨て、力を極め歳を閲みして總修したるが故に、紀傳としては勿論遺教としても亦本傳を以て其の準となすを得べし。稿成りて之を奏進するや、上皇

叡威斜ならず、乃宸筆を染めて其の一二三七八の五卷を清寫し、後二條帝亦隨喜して四十五廿二廿五廿六卅三卅四卅五卅六卅七卅八卅九及び四十二の十三卷を書寫し、伏見法皇も亦第四十の一卷を映寫せらる。その餘は皆當時貴顯の筆なり。本集の卷頭にかゝぐるものは、第一卷初段後伏見上皇の宸翰、第四十卷第二段伏見法皇の宸翰、第廿五卷第二段後二條帝の宸翰なり。豈に前代未聞の盛事といはざるを得んや。今其の正本此傳に正本あり、副本一本を製せられたるものなり、今當麻往生院の寶藏に納むは、京都知恩院に襲藏し、現に海内の重寶たり。因て之を複寫して其の全文を附録第一に載す。中に於て上人の法語、消息、説話等の若し語燈錄等に出さざるものは、亦悉く類聚して之を本文の内に収録せり。

又法然上人傳記は世に轉寫して之を傳ふ。凡て九卷あるが故に入呼て九卷傳と稱す。一卷を上下に開きて十八冊となし、一百七段を分つ。叙説の起盡、文章用語、大抵勅修御傳に同じく、唯少し略せるのみ。卷頭の序文此書序文二通ありを始め、文中の記事に至て字句全く異ならざるもの多し。此の書作者の名を出さざれども、定めて是れ舜昌の作る所にして、勅修御傳の艸本ならん。序に今上人の遷化既に一百歳に及ぶの語あり、然るに建曆二年より徳治の初に至るまで、凡そ九十四五年あり。若し然

らば勅修御傳編集の年と殆ど相隣る。同時に別人ありて殆ど同文を作りて同一人を傳せんことは恐くは世にあるべからざらん。且夫れ此の書の末尾に記する如く、本を九卷に別つことは九品の淨業にあてんが爲なり。されば開きて十八冊となせることは、十八願に擬せんと欲してなるべし。然るに勅修御傳は四十八卷あり、是れ豈に四十八願を表示するものに非ずや。西行の撰集抄に、卷は九品の淨土に思ひあて、十に一を殘し、事は八十隨好に思ひよそへて、百に二十を洩せりといへり。古より此の類の託事少なからず。今も亦即稿本を九品十八願に表し、献本を四十八願に託したるものならざるか。加之義山の行狀翼贊序に、初め舜昌諸家の舊記を編攬して編して一套となし、畫圖を附入す。述作既に成て櫃に纏めて自ら之を珍とす。後恭く後伏見上皇の勅を承けて之を奏進す云云とあり。想ふに此の櫃に纏める原本なるものは、即今の九卷傳にあらざるなきか。然るに義山は、此書の第九に永延より以來嘉祿に至るまで二百四十年計といへる語あるに據りて、此書の撰述を嘉祿中と推せりと雖も、恐くは其れ非ならん。何となれば彼の一段は上人の遺骨を改葬して、之を嵯峨釋迦堂に藏することを叙するに、筆の因みに釋迦尊像渡來の由序を記して、今改葬の嘉祿三年に至る迄、凡そ二百四十年を經といへるに過ぎざればなり。若

し然らば嘉祿は九卷傳製作の年を示すに非ざるや明かならん。然るに此傳と勅修御傳と上人の法語等を録するに互に出沒なきにあらず。今悉く之を類別して以て本集の内に收め、其の存否同異を各文の終に記す。蓋し九卷傳の價値は毫も勅修御傳に譲らざるを信ずるに由ればなり。

又他門の師及後代末徒の手に成れる上人の紀傳、並に法語固より尠なからず。所謂教行信證、歎異抄、口傳抄、執持抄、親鸞傳繪、山科連署記、女人往生聞書、後世物語聞書、拾遺古德傳、十卷傳、正源明義抄、遠流記等數十部あり。蓋し是等の諸書に記する所は或は執見を以て大師の法語を改竄潤飾し、或は事實を紛亂故造して以て眞を濫るもの甚だ多し。然れども古今之を信ずる者亦少なからざるのみならず、濫次の中必ずしも一人の伶倫なきに非ざるを以て、今上人の法語若し説話として其中に記載せるものは、皆之を取りて眞偽未詳録に附せり。兼ねて又眞傳と對照して以て反正の介を爲さば自他共に益を受けん。

又上人の著書と稱せらるゝものゝ中に眞偽なきにあらず。了惠の手記せる漢語燈錄の跋文に云く。

漢語燈錄十卷十七章。並拾遺語燈錄上卷三章。都是二十章。此予二十年來編索。此於

華夷、慎檢眞僞而所撰集也。此外世間所流本願奧義一卷、往生機品一卷、稱黑谷作者即僞書也。又有三部經總章列四十八願名目、第十八願名十念往生願者一卷、及問決一卷、金剛寶戒章三卷、並亦僞書也。上人與鎮西書曰、金剛寶戒章是僞書也。予不製如是書、釋迦彌陀以爲證明矣。云云。況又據理而論寶戒所述乃是聖道法門、而非上人之所作者著明矣。今則管見所及、取捨如斯、若有舛差、後賢糺之。又有子遺來哲續之。云云。之に依るに文永の當時既に僞書の流行を見るべし。此中、本願奧義一卷、往生機品一卷と稱するものは、今之を搜索するに獲ること能はず。是れ果して何の書をいふ乎。往生機品に關しては聊か説なきにあらざれども略して之を述べず。又三部經の總章に四十八願の名目を列ねて、第十八願を十念往生願と名くる者一卷といふは、恐くは今の彌陀本願義疏を指す歟。但し彼の書の中には四十八願の名目を列ねて、一に之を略釋せりといへども、而かも三部經の總章をあげず。又第十八願を念佛往生願と標して十念往生願と云はざれば、或は此書にあらざるやも知るべからず。されど彼の願の下に唯十念を釋して一形及一念をいはず。加之後人此の書を印行するに當りて多少の改竄を試み、乃願名を改め總章を刪りて、以て了惠の指目を免れんことを努めたるものと解せられざるにもあらず。假令又之を相關せずとするも、而も

世に所謂本願義疏なるものは、定て大師の眞撰にあらざるべし。獨り文義の蕪雜なるのみならず、記載の事項亦疑ふべきもの多し。此書元と笠置眞慶の請によりて、建曆元年二月上人自ら之を撰すと稱す。卷尾に眞慶との往復書を附して此事を記する中、上人は眞慶を彌勒菩薩と稱し、眞慶は上人を勢至菩薩と讚するが如き、殆ど兒戲に類するものに非ずや。又其の卷末に夢中の善導を記して、今より先來の教相に依る勿れ。須く二藏三法輪を以て淨土宗を定判すべしと言ふが如き、即宛然たる中世宗學者の口吻を見るべし。然るに淨土布薩式の卷尾に奧書云と題して、今光明院一師に限りて述ぶる所は彌陀本願義疏、一乘戒儀廣本、上下二卷、略本一卷是也とあり。而して其の下に沙門聖覺記之といへど、恐くは後人、聖覺に擬託して、以て此の書の信を釣らんと欲する者ならん。次に問決一卷といふは、未だ何の書といふことを知らず。又金剛寶戒章三卷は元祿十年之を印行して現に世に在り。一卷は訓授章、一卷は釋義章、一卷は祕決章なり。然るに此書の眞僞古來その説紛々たり。了惠は鎮西に與ふるの書を引て、上人既に自ら此の書の僞妄を指示せられたりといへるも、九卷傳並に勅修御傳に載する上人自筆の誓文と稱するものには、唯此の如きの事を申さずとありて、贈答共に此の書の事を記せず。是れ聊か不審なりといへども、而も

上人已に金剛寶戒の説を作さずと明言せられたる上は、其の書は言ふまでもなく上人の親撰にあらざるべし。然るに了譽聖問の傳戒論並に決疑鈔直牒等によるに、上人自ら金剛寶戒章二卷、淨土布薩式二卷、淺略戒儀一卷を作るといひ、淨土布薩式奥書には、上人の作は選擇集、金剛章兩部二卷云云といひ、長西錄附錄何人の附加なるを知らず聴作を列ぬ著にも金剛寶戒章金剛寶戒釋義章の兩部を列ぬ。蓮門經籍錄眞撰の部に、亦金剛寶戒章二卷を出だし、其の下に偽造一卷あり、京兆文雄具に之を辨ずと記せり。文雄の論は今之を見ずと雖も、全長の傳戒論私記等に、秘決章一卷は門人の偽作する所といへり。蓋し秘決章は上人と門人との問答を記せるものにして、上人の自撰にあらざること文に在りて明かなるのみならず、文中の義旨亦頗る聖道の論に富むが故に、乃偽作の説を生じたるものならん。然れども之を他の二卷に比するに、用語義理互に異ならず、恐くは通じて一人の手に出でたるものなるべし。若し然らば其の一眞にあらざんば、即他の二亦偽妄たるを免れず。義山亦偽妄の説をなして云く、金剛寶戒章は蓋し大師の門徒中に異見を生ぜる者、偽て書を著はし、名を大師にかりて時人を誑惑し、殊に宗門の秘奧、大師の實義と稱するならん。長樂寺鏡空上人の奥書に、此書は法本房行空の輩、偽作して妄に上人の作と云、全く不可用と云云。

此の説信を置くに足るべし。又漢語燈錄如法書寫法則の下に、別有廣法則載般舟讚文、恐是偽書歟とあり。此の廣法則果して今傳ふる所あるか。未だ詳ならず。

又和語燈錄の跋文に和字の偽書あることを記して云く。

愚見のをよぶところ集編かくのごとし。しかるに世中に黒谷の御作といふ文おほし。いはゆる決定往生行業抄、本願相應抄、安心起行作業抄、九條の北の政所へ進ずる御返事かの御返事に二通あり。これこの文どもは餘の和語の書に文章も似ず。義勢もたがへり。おほきにうたがひあるうへに、古人偽書と申つたへたり。しかばこれをいれず。又廿二問答とて廿六七張の文あり、又臨終行儀とて五六張の文あり。眞偽しりがたし。いさゝかおぼつかなきによりて、これをのぞけり。又念佛得失義といふ文あり、上人の御作といへり。しかれどもこれはまさしくあらぬ人の、つくれる文也。このほかにまことしからぬ文二三本あり。中／＼いふにたらぬ物ども也。をよそ二十餘年のあひだ、あまねく花夷をたづね、くはしく眞偽をあきらかにすべし。又おつるところの眞書あらば、この拾遺に續くべし。云云。

此の中決定往生行業抄、安心起行作業抄、及廿二問答は之を索めたるも俱に獲る能

はず。本願相應抄集今の作本は印本あり、希に世に傳ふ。今本願寺龍谷文庫の藏書に依りて之を寫す。九條の北の政所へ進ずる御返事も亦之を得ず。然るに語燈錄、勅修御傳等に載する御消息即本集の第六輯第三十九なりを見るに、中に三心を述釋せり。此消息何人に遣はされたるや明ならず。翼贊に、此御文體甚だ禮儀ありて見ゆれば、若は月輪殿の北方へ遣はされける御返事なるにやとあり。されど語燈錄の中に之を收めたるより見れば、御消息は了惠の所謂僞造の御返事にはあらざるべきか。又いふ所の臨終行儀とは果して是れ何の書といふことを知らず。西方指南抄に法然上人臨終行儀と題する一篇あり。その中に上人臨終の祥瑞及諸人の感夢を記すること詳なり。されど此の文は長くして唯五六張のみならず、又上人の述作にあらざれば、定めて今の所謂臨終行儀にあらざらん。又現に傳ふる所の摺本の臨終行儀は、上人の撰述といふのみならず、紙數も粗、相如けりといへども、而かも漢語にして和字の文にあらず。此の燈錄の跋文は和語の書に就て論ずる所にして、恐くは漢字の本を指すにあらず。若し然らば是非決し難し。但し今現に摺本の世に行はるゝものあるが故に、之を寫して附録第二に收む。此の摺本の原本は今駿州乘運寺に藏す。奥書に建久元年十月日法然御筆阿闍梨成呼の語あり。又寛永三年十一月三日雄譽靈巖跋を製して、茲

の御臨終記は上人の眞筆なること實正にして、叡山の衆徒駿州に下り、之を善然寺増譽に寄進せしことを記せり。章譽智典亦その記を作りて、此の本の乘運寺に轉藏せし顛末を序す。今之を検するに筆蹟秀麗にして當時の書風を存し、加之文中の義旨亦上人の遺言に背かざるが如し。勅修御傳に、建久三年二月上人、後白河法皇の爲に御往生の儀式を定められたるを記し、又聖護院無品親王の病牀に臨みて臨終の行儀を談ぜらるといへば、必ずしも上人の著作にあらずと斷ずべからず。今唯姑く了惠の言に因みて之を眞僞未詳に編するのみ。念佛得失義は一巻にして現に印本を傳ふ。文義淺劣、定て上人の眞撰にあらざるが如し。或は云ふ、高野明遍の作と、未だ其の可否を詳にせず。

又長西錄附録に上人の著述として、凡そ十九部を列ぬる中、金剛寶戒章、本願義疏を初め、其の他に淨土布薩式二卷、圓頓十二門戒儀一卷、略戒儀一卷、三聚一心戒一卷、大原十二問答集一卷、西方發心抄一卷、初重卷物、師秀說相等あり。内に於て淨土布薩式は其の奥書聖覺記之に依るに、上人最後の述作なりと記し、傳戒論並に決疑鈔直牒等亦大師の自作となせり。然れども古より之を疑ふもの少なからず。大玄の圓戒歸元等には、西山末徒の僞作する所ならんといひ、布薩式辨正には、名を上人に藉りて

眞を濫るものといへり。蓋し此書授菩薩戒儀、本願義疏等と互に交渉を有するものにして、恐くは中世の比相次で世に出てたるものならん。此書の奥書に選擇集、金剛寶戒章は、綽禪師の教相を述べ、天台の戒法を釋したるものにして、即昔教なり。今光明院の一師に限りて述ぶる所は、彌陀本願義疏、一乘戒儀廣本上下二卷、略本一卷是なりといひ、而して又此の受戒儀即布薩式を最後の述作といふに考ふれば、金剛寶戒の相傳に對抗して、別に一旗幟を繡さんと企たるものにあらざるなきか。其の編纂の體裁を見るに、大旨授菩薩戒儀の敷衍にして、中間戒相を説く處は亦全く法藏の梵網疏を寫せり。加之外典雜書を引用し文義共に膚淺にして、決して大師の親撰にあらざるべし。或は謂ふ、上人自作の布薩式は亡逸して今傳はらずと。未だその眞否を知らず。次に圓頓十二門戒儀一卷といふは、即授菩薩戒儀則にして、世に黒谷古本と稱するもの是なり。此の書妙樂の十二門戒儀に擬して十二門を開き、圓頓戒授受の法を記せり。略戒儀一卷といふは所謂机上の法式にして、慧亮説戒の舊儀と傳ふるものなり。案ずるに淨家傳來の戒儀に古來三本あり。一は庭儀の廣本にして、即妙樂の十二門戒儀是なり。二は堂上の軌則にして、黒谷古本と稱するもの是なり。三は机上の法式にして、即略戒儀是なり。後の二本は傳へて上人の作といふといへども、正

受戒の下に相承の次第を記して、聖光、良忠、良曉、良譽及了譽等の名を出せば、少なくとも後代の加筆あるを以て、之を本集に採録せず。云云。又三聚一心戒一卷は未だ之を獲ず。勅修御傳に上人抄記の三聚淨戒を津戸三郎に贈られたるを記すと雖も、義山は其の書未だ考へずといへり。又いふ三聚淨戒と云もの十紙ばかりなるありて、大師の御作なりと云、未詳眞僞と。眞宗教典志にも亦之を眞僞未決部に編せり。次に大原十二問答集一卷といふは、即今世に聖覺の記と傳ふる大原談義開書鈔を指せるものにして、顯眞以下十二人の問答を記述し、大原勝林院に於ける文治二年の論談の筆録と稱するもの是なり。増上寺西譽始めて見聞一卷を作り、爾後無絃、玄貞等盛に布衍して之を世に行ふ。慶長中貞安夙に此の書を疑ふて乃三難を立つ、事は出て、貞安問答に在り。三難とは一に元亨釋書中に曾て大原論談の事を記せず。二に鎮西記主等の諸祖全く此書を用ゐず。三に其の文中、上人の滅後に渡來せる般舟讚を引く是なり。自ら亦重要な問難といはざるを得ず。然れども此の他に更に疑點なきにあらず。即此の書號して聖覺の記といふといへども、彼の法印は文は巧にして漢和共に其の長ずる所たり。元久法語の如き、勝尾寺開題供養表白の如き、和文として實に一代の範と作すに足る。又山門に送る起請文は漢文にして彼れの執筆する

所なり。然るに其の文字森嚴にして章句自ら法あり。之を今の聞書鈔に比するに、その妍媸固より年を同して語るべからざるを覺ゆ。且夫れ所載の義趣往々として上人平生の勸化に違背するものなきにあらず。所謂極樂遠からずして十萬億刹の西に構へ、彌陀己心に在りて一坐華臺の形を現ずといふが如き、宛として中世禪門模倣の語なるを見るべし。加之是の如く問者を立て、一一上人の決答を記することは、金剛寶戒祕決章、一向專修七箇條問答等皆同一なり。想ふに斯かる筆法の擬託、一時流行し、此等の書相次て世に出てたるものならん。西方發心抄今集には板本世に傳ふ、二卷あり。先啓目錄に大抵義正しといへるも、文義、上人の自撰に似ず。文雄目錄には之を偽妄濫真類に附せり。又初重卷物といふは即往生記是なり。此書輒く披露すべきものにあらざるが故に、省きて之を録せず。師秀說相とは、安樂房の父外記禪門師秀の爲に說かれたるものにして、即本集に收むる所の逆修說法是なり。又蓮門經籍錄に此等の著作以外に、淨土名目圖一卷を眞傳の部に編し、偽妄錄の下に彌陀經義一卷、諸神本懷集一卷、七箇問答一卷、興御書一卷を列ぬ。中に於て淨土名目圖一卷といふは、建曆元年八月、上人勝尾寺に於て教相の事を演述せられたるを聖覺自ら之を記せりと傳ふるものにして、中に源空上人說、聖覺法印記と署せり。了

譽聖問之を圖解し、次で展轉敷衍して盛に世に行ふ。布薩式の卷末に淨土名目釋上下、上人御作目錄之内編入云云の文字あり。此書かの布薩式と關聯する所あるか。然るに其の文中麒麟聖財論、說法明眼論等の偽書を採用し、選擇集の教相に同じからざるもの多し。況や上人說と署すといへども、而も所謂上人の說は僅々數語にして餘は皆了譽聖問の言なるに於てをや。故に今棄て、本集に收めず。彌陀經義集は元と善導に擬託して後人の作れる所然るに一本に題して沙門法然集記とあり。諸神本懷集は先啓目錄、眞宗教典志等皆存覺の作となせり。然るに一本に題して沙門源空記といふ。共に論を待たざるなり。七箇問答一卷とは具に一向專修七箇條問答と稱す。印本あり。智海、重源等各一問を設けて上人之を決す。大原談義聞書鈔と意匠相似たり。中に法皇、上人を禮す等の語あるを見れば、或は殿中間答に擬して、後人の執筆せるものならん。興御書は京都金戒光明寺に其の原本を藏す。教典志に、書中叙する所を考ふるに、元久二年四月、眞影を吾が祖即親に賜ふの時、與ふる所の書ならん。文辭簡潔にして具に玄奧を盡くし、眞宗の法義此に由て興盛するが故に稱して興御書といふ。又印可の御書と曰ふと記せり。されど是れ信ずるに足らず。凡そ上人の滅後に異執紛綸として起り、互に正邪を競諍して、各偽書を作り、又法語を改竄して

以て自家の地歩となさんことを企てたる者甚だ多し。今此の書蓋し其の随一なるものならん。

又天台小部集釋の中に、決定往生祕密義と題する一篇あり。或は云ふ、此の書上人叡山黒谷に在るの日著はす所歟と。義旨天台に黨し筆鋒立を鉤めて、固より開宗以後の作と見るべからず。又隆堯の念佛安心大要の中に上人の法語一篇あり。別行本に題して法然聖人法語といふ是なり。其の奥に建仁元年二月源空六十九歳と書し、又此の原本は光明寺に在りといへり。又念佛縁起なるもの一巻あり、正徳五年の印本なり。奥に建久五年八月沙門源空の語を置き、又御眞筆の本に依りて之を書寫すと記す。又眞宗教典志に三心義私記一巻、未檢、眞偽未決部に附すといへり。又世に母儀教導と名くる一巻あり、母儀との往復書を載す。文義上人に似ずといへども、他の疑偽の書と共に之を本集の後に録するなり。涅槃和讃六字名號探書等に至りては、現に上人の名を有すれども、擬託たること極めて分明なるが故に之を除く。其の他諸處の寶庫に藏する法語消息等少なからず、中に就て信ずべきものは之を本文の内に載し、疑ふべきものは之を附録第二に編す。

凡そ本集編纂の體裁は、舜昌以前の史籍に就きて、其の著作、法語、消息、説話等の確と

して疑ふべからざるものは、收めて悉く之を本文に集録し、行狀紀傳等にかゝる者は、之を附録第一に纂輯せり。其の眞偽詳ならざるものは、則皆一併して之を附録第二に編集し、人をして玉石同架の中に、自ら瓦礫を捨て、以て珠玉を拾はしめんことを期望し、兼ねて亦學者をして薰蕕を辨じ、涇渭を分つの料に備へしめんと欲するなり。希くは我が大師上人の深重の冥護を得て、彌々遺教の八紘に光被せんことを祈ると云ふ。

明治三十九年六月

編者の一人 望月信亨謹識



法然上人全集

黑田真洞
望月信亨 共纂

第壹輯 教旨

一 選擇本願念佛集

選擇本願念佛集

南無阿彌陀佛

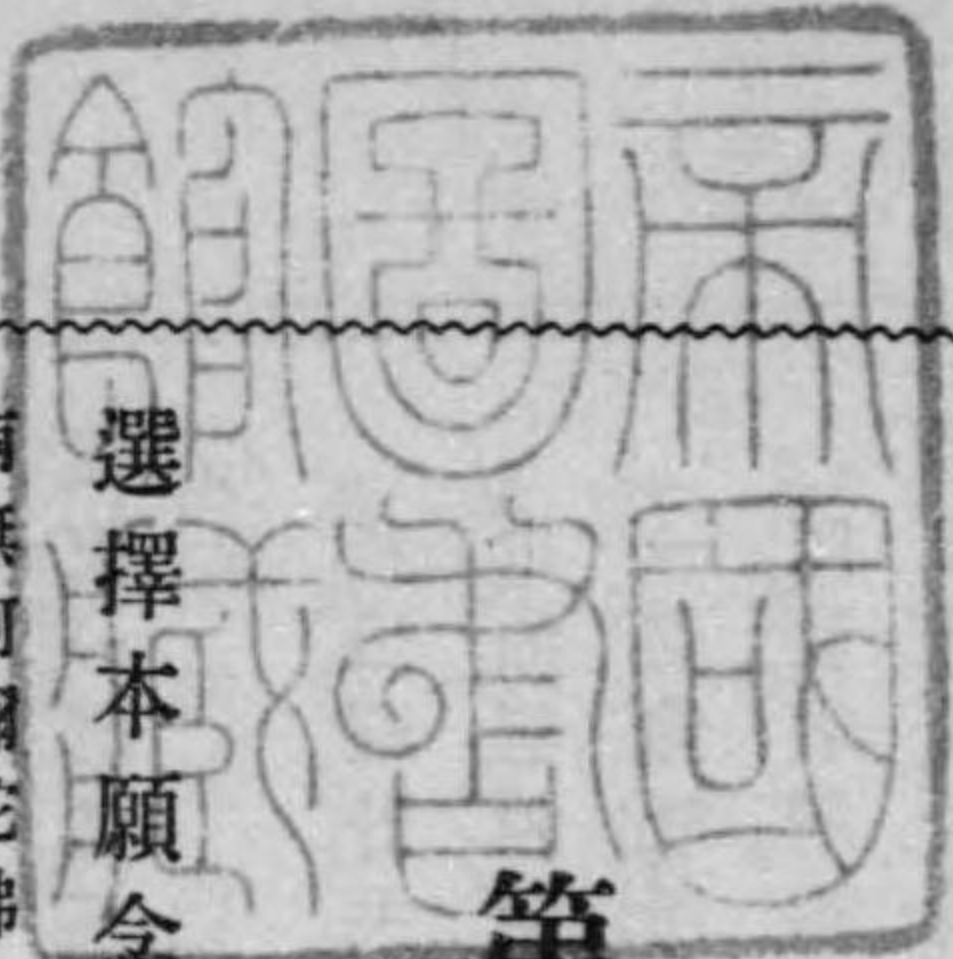
往生之業
念佛爲先

道綽禪師立聖道淨土二門而捨聖道正歸淨土之文

安樂集上云問曰一切衆生皆有佛性。遠劫以來應值多佛。何因至今仍自輪迴生死不出。火宅。答曰依大乘聖教良由不得二種勝法以排生死。是以不出火宅。何者爲二。一謂聖道。二謂往生淨土。其聖道一種今時難證。一由去大聖遙遠。二由理深解微。是故大集月藏經

第壹輯 教旨 選擇本願念佛集

(1)



一本法下(9)
無現字

云我末法時中億億衆生起行修道未有一人得者。當今末法現是五濁惡世。唯有淨土一門可通入路。是故大經云。若有衆生。縱令一生造惡。臨命終時。十念相續。稱我名字。若不生者。不取正覺。又復一切衆生。都不自量。若據大乘。真如實相。第一義空。曾未措心。若論小乘。修入見諦修道。乃至那含羅漢。斷五下除五上。無問道俗。未有其分。縱有人天果報。皆爲五戒十善。能招此報。然持得者甚希。若論起惡造罪。何異暴風驟雨。是以諸佛大慈。勸歸淨土。縱使一形造惡。但能繫意。專精常能念佛。一切諸障。自然消除。定得往生。何不思量。都無去心也。

默一本作駁

私云竊計。夫立教多少。隨宗不同。且如有相宗立三時教。而判一代聖教。所謂有空。中是也。如無相宗立二藏教。以判一代聖教。所謂菩薩藏聲聞藏是也。如華嚴宗立五教。而攝一切佛教。所謂小乘教。始教。終教。頓教。圓教是也。如法華宗立四教。五味以攝一切佛教。四教者。所謂藏。通。別。圓是也。五味者。所謂乳。酪。生。熟。醍。醐是也。如真言宗立二教。而攝一切。所謂顯教。密教是也。今此淨土宗者。若依道綽禪師意。立二門。而攝一切。所謂聖道門。淨土門是也。問曰。夫立宗名。本在華嚴天台等八宗九宗。未聞於淨土之家。立其宗名。然今號淨土宗。有何證據也。答曰。淨土宗名。其證非一。元曉遊心安樂道云。淨土宗意。本爲

就此一本作
準之一本作
準之以下皆
同

準一本作准
以下皆同

一本乘下無
也字

(3)

凡夫兼爲聖人。又慈恩西方要決云。依此一宗。又迦才淨土論云。此之一宗。竊爲要路。其證如此。不足疑端。但諸宗立教。非今正意。且就淨土宗。略明二門者。一者聖道門。二者淨土門。初聖道門者。就此有二。一者大乘。二者小乘。就大乘中。雖有顯密權實等不同。今此集意。唯存顯大。及以權大。故當歷劫迂迴之行。準是思之。應存密大。及以實大。然則今真言佛心。天台華嚴三論法相地論攝論此等八家之意。正在此也。應知大小乘者。總是小乘經律論之中。所明聲聞緣覺。斷惑證理。入聖德果之道也。準上思之。亦可攝俱舍成實諸部律宗而已。凡此聖道門大意者。不論大乘。及以小乘。於此娑婆世界之中。修四乘道。得四乘果也。四乘者。三乘之外。加佛乘也。次往生淨土門者。就此有二。一者正明往生淨土之教。二者傍明往生淨土之教。初正明往生淨土之教者。謂三經一論是也。三經者。一無量壽經。二觀無量壽經。三阿彌陀經也。一論者。天親往生論是也。或指此三經號淨土三部經也。問曰。三部經名。亦有其例乎。答曰。三部經名。其例非一。一者法華三部。謂無量義經。法華經。普賢觀經是也。二者大日三部。謂大日經。金剛頂經。蘇悉地經是也。三者鎮護國家三部。謂法華經。仁王經。金光明經是也。四者彌勒三部。謂上生經。下生經。成佛經是也。今者。唯是彌陀三部。故名淨土三部經也。彌陀三部者。是淨土正依經也。次傍明往

一本土下
無之行二
字無 (4)

一本謂下
無於字

生淨土之教者華嚴法華隨求尊勝等明諸往生淨土之行之諸經是也。又起信論實性論十住毗婆沙論攝大乘論等明諸往生淨土之行之諸論是也。凡此集中立聖道淨土二門意者爲令捨聖道入淨土門也。就此有二由。一由去大聖遙遠。二由理深解微。此宗之中立二門者非獨道綽曇鸞天台迦才慈恩等諸師皆有此意。且曇鸞法師往生論注云謹案龍樹菩薩十住毗婆沙云菩薩求阿毗跋致有二種道。一者難行道。二者易行道。難行道者謂於五濁之世於無佛時求阿毗跋致爲難。此難乃有多途。粗言五三以示義意。一者外道相善亂菩薩法。二者聲聞自利障大慈悲。三者無願惡人破他勝德。四者顛倒善果能壞梵行。五者唯是自力無他力持。如斯等事觸目皆是。譬如陸路步行則苦。易行道者謂但以信佛因緣願生淨土。乘佛願力便得往生彼清淨土。佛力住持卽入大乘正定之聚。正定卽是阿毘跋致。譬如水路乘船則樂。此中難行道者卽是聖道門也。易行道者卽是淨土門也。難行易行聖道淨土其言雖異其意是同。天台迦才同之。應知又西方要決云仰惟釋迦啟運弘益有緣。教闡隨方並霑法潤。親逢聖化道悟三乘。福薄因疎勸歸淨土。作此業者專念彌陀。一切善根迴生彼國。彌陀本願誓度娑婆。上盡現生一形下至臨終十念。俱能決定皆得往生。此又同後序云夫以生居像季去聖斯遙道預三

四

一本家下有
亦字

少一本作小

一本行下無
而字

(5)

乘無方契悟。人天兩位躁動不安。智博情弘能堪久處。若也識癡行淺恐溺幽塗。必須遠跡娑婆。栖心淨域。此中三乘者卽是聖道門意也。淨土者卽是淨土門意也。三乘淨土聖道淨土其名雖異其意亦同。淨土宗學者先須知此旨。設雖先學聖道門人若於淨土門有其志者須棄聖道歸於淨土。例如彼曇鸞法師捨四論講說一向歸淨土。道綽禪師閣涅槃業偏弘西方行。上古賢哲猶以如此。末代愚魯寧不遵之哉。問曰聖道家諸宗各有師資相承。謂如天台宗者慧文南岳天台章安智威慧威玄朗湛然次第相承。如真言宗者大日如來金剛薩埵龍樹龍智金智不空次第相承。自餘諸宗又各有相承血脈。而今所言淨土宗有師資相承血脈譜乎。答曰如聖道家血脈淨土宗亦有血脈。但於淨土一宗諸家不同。所謂廬山慧遠法師慈愍三藏道綽善導等是也。今且依道綽善導之一家論師資相承血脈者此亦有兩說。一者善提流支三藏慧龍法師道場法師曇鸞法師大海禪師法上法師已上出唐安樂集二者善提流支三藏曇鸞法師道綽禪師善導禪師懷感法師少康法師已上出唐宋兩傳

善導和尚立正雜二行而捨雜行歸正行之文

觀經疏第四云就行立信者然行有二種。一者正行。二者雜行。言正行者專依往生經行

者是名正行。何者是也。一心專讀誦此觀經彌陀經無量壽經等。一心專注思想觀察憶念彼國二報莊嚴。若禮即一心專禮。彼佛。若口稱即一心專稱。彼佛。若讚歎供養即一心專讚歎供養。是名為正。又就此正中復有二種。一者一心專念彌陀名號。行住坐臥不問時節。久近念念不捨。者是名正定之業。順彼佛願。故若依禮誦等。即名為助業。除此正助二行已外。自餘諸善悉名雜行。若修前正助二行。心常親近憶念不斷。名為無間也。若行後雜行。即心常間斷。雖可迴向得生。衆名疎雜之行也。

一本生下無之字

私云就此文有二意。一明往生行相。二判二行得失。初明往生行相者。依善導和尚意。往生之行雖多大。分爲二。一正行。二雜行。初正行者。就此有開合二義。初開爲五種。後合爲二種。初開爲五種者。一讀誦正行。二觀察正行。三禮拜正行。四稱名正行。五讚歎供養正行也。第一讀誦正行者。專讀誦觀經等也。即文云。一心專讀誦此觀經彌陀經無量壽經等是也。第二觀察正行者。專觀察彼國依正二報也。即文云。一心專注思想觀察憶念彼國二報莊嚴是也。第三禮拜正行者。專禮彌陀也。即文云。若禮即一心專禮。彼佛是也。第四稱名正行者。專稱彌陀名號也。即文云。若口稱即一心專稱。彼佛是也。第五讚歎供養正行者。專讚歎供養彌陀也。即文云。若讚歎供養即一心專讚歎供養。是名為正是也。若

一本生下無也字

開讚歎與供養而爲二者。可名六種正行也。今依合義。故云五種。次合爲二種者。一者正業。二者助業。初正業者。以上五種之中。第四稱名為正定之業。即文云。一心專念彌陀名號。行住坐臥不問時節。久近念念不捨。者是名正定之業。順彼佛願。故是也。次助業者。除第四口稱之外。以讀誦等四種而爲助業。即文云。若依禮誦等。即名為助業是也。問曰。何故五種之中。獨以稱名念佛爲正定業乎。答曰。順彼佛願。故云。稱名念佛是彼佛本願行也。故修之者。乘彼佛願。必得往生也。其本願義。至下可知。次雜行者。即文云。除此正助二行已外。自餘諸善悉名雜行是也。意云。雜行無量不遑具述也。但今且翻對五種正行。以明五種雜行也。一讀誦雜行。二觀察雜行。三禮拜雜行。四稱名雜行。五讚歎供養雜行也。第一讀誦雜行者。除上觀經等往生淨土經已外。於大小乘顯密諸經受持讀誦悉名。讀誦雜行。第二觀察雜行者。除上極樂依正已外。於大小顯密諸經受持讀誦悉名。讀誦雜行。第三禮拜雜行者。除上禮拜彌陀已外。於一切諸佛菩薩等及諸世天等禮拜恭敬悉名。禮拜雜行。第四稱名雜行者。除上稱彌陀名號已外。於一切佛菩薩等及諸世天等名號。悉名稱名雜行。第五讚歎供養雜行者。除上彌陀佛已外。於一切諸佛菩薩等及諸世天等讚歎供養悉名。讚歎供養雜行。此外亦有布施持戒等無量之行。皆可攝盡。

不回向
一本作
不迴向
一本甚
以字
本作呢
一本佛
亦字
一本生
口字
一本常
相字

雖似是一
一本是
下無於字

別一本
不作

雜行之言。次判二行得失者。若修前正助二行。心常親近。憶念不斷。名為無間也。若行後雜行。即心常間斷。雖可回向得生。衆名疎雜之行。即其文也。案此文意。就正雜二行。有五番相對。一親疎對。二近遠對。三有間無間對。四不回向回向對。五純雜對也。第一親疎對者。先親者修正助二行者。於阿彌陀佛甚為親昵。故疏上文云。衆生起行。口常稱佛。佛即聞之。身常禮敬。佛即見之。心常念佛。佛即知之。衆生憶念佛者。佛亦憶念衆生。彼此三業不相捨離。故名親緣也。次疎者。雜行也。衆生口不稱佛。佛即不聞之。身不禮佛。佛即不見之。心不念佛。佛即不知之。衆生不憶念佛者。佛不憶念衆生。彼此三業常相捨離。故名疎行也。第二近遠對者。先近者修正助二行者。於阿彌陀佛甚為鄰近。故疏上文云。衆生願見佛。佛即應念。現在目前。故名近緣也。次遠者。雜行也。衆生不願見佛。佛即不應念。不現目前。故名遠也。但親近義。雖似是一善導之意。分而為二。其旨見於疏文。故今所引釋也。第三無間有間對者。先無間者修正助二行者。於彌陀佛憶念不間斷。故云名為無間是也。次有間者。修雜行者。於阿彌陀佛憶念常間斷。故云心常間斷是也。第四不回向回向對者。修正助二行者。縱令不用回向。自然成往生業。故疏上文云。今此觀經中。十聲稱佛。即有十願。十行具足。云何具足。言南無者。即是歸命。亦是發願回向之義。言阿彌陀

非純一本
作

一本非下
無

例一本作
亦字
一本也
名一本
無之字
(9)

佛者。即是其行。以斯義故。必得往生。已次回向者。修雜行者。必用回向之時。成往生之因。若不用回向之時。不成往生之因。故云雖可回向得生是也。第五純雜對者。先純者修正助二行者。是純極樂之行也。次雜者。是非純極樂之行。通於人天。及以三乘。亦通於十方淨土。故云雜也。然者。西方行者。須捨雜行。修正行也。問曰。此純雜義。於經論中有其證據乎。答曰。於大小乘經律論之中。立純雜二門。其例非一。大乘即於八藏之中。而立雜藏。當知七藏是純。一藏是雜。小乘即於四含之中。而立雜含。當知三含是純。一含是雜。律即立二十毘度。以明戒行。其中前十九是純。後一是雜。毘度也。論則立八毘度。明諸法性。相前七毘度。是純。後一是雜。毘度也。賢聖集中。唐宋兩傳。立十科法。明高僧行德。其中前九是純。後一是雜。科也。乃至大乘義章。有五聚法門。前四聚是純。後一是雜。聚也。亦非管顯教。密教之中。有純雜法。謂山家佛法。血脈譜云。一胎藏界。曼陀羅血脈譜一首。二金剛界。曼陀羅血脈譜一首。三雜曼陀羅血脈譜一首。前二首是純。後一首是雜。純雜之例。雖多。今略舉小分而已。當知純雜之義。隨法不定。因茲今善導和尚意。且於淨土行論。純雜也。亦此純雜名不局內典。外典之中。其例甚多。恐繁不出矣。但於往生行而分二行。不限善導一師。若依道綽禪師意者。往生之行。雖多。東而為二。一謂念佛往生。二謂万行往生。若依

無一本生下
之字 (10)

懷感禪師意往生之行雖多東而爲二。一謂念佛往生。二謂諸行往生。同之如是三師各

10

立二行攝往生行甚得其旨。自餘諸師不然。行者應思之。

往生禮讚云若能如上念念相續畢命爲期者十即十生。百即百生。何以故。無外雜緣得正

一本願下無
得字

念故。與佛本願得相應故。不違教故。隨順佛語故。若欲捨專修雜業者百時希得一二。千時

乃一本故下無
機悔心一本

希得五三。何以故。乃由雜緣亂動失正念故。與佛本願不相應故。與教相違故。不順佛語故。

作機悔心一本

係念不相續故。憶想間斷故。迴願不懇重真實故。貪瞋諸見煩惱來間斷故。無有慚愧懺悔

心故。又不相續念報彼佛恩故。心生輕慢。雖作業行常與名利相應故。人我自覆不親近同

行善知識故。樂近雜緣自障障他。往生正行故。何以故。余比日自見聞諸方道俗解行不同

專雜有異。但使專意作者十即十生。修雜不至心者千中無一。此二行得失。如前已辨。仰願

一切往生人等善自思量。已能令身願生彼國者。行住坐臥必須勵心。剋己晝夜莫廢畢命

爲期。上在一形似如少苦前念命終後念即生彼國。長時永劫常受無爲法樂。乃至成佛不

經生死。豈非快哉。應知。

一本行下無
而字

私云見此文彌須捨雜修專。豈捨百即百生專修正行而堅執千中無一雜修雜行乎。行

者能思量之。

一本所下無
而字

(11)

彌陀如來不以餘行爲往生本願。唯以念佛爲往生本願之文。

無量壽經上云。設我得佛。十方衆生。至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不取正覺。

觀念法門引上文云。若我成佛。十方衆生。願生我國。稱我名字。下至十聲。乘我願力。若不生者。不取正覺。

往生禮讚同引上文云。若我成佛。十方衆生。稱我名號。下至十聲。若不生者。不取正覺。彼佛

今現在世成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生。

私云一切諸佛各有總別二種之願。總者四弘誓願是也。別者如釋迦五百大願。藥師十

二上願等是也。今此四十八願者是彌陀別願也。問曰。彌陀如來於何時何佛所而發此

願乎。答曰。壽經云。佛告阿難。乃往過去久遠無量不可思議無央數劫。錠光如來興出於

世。教化度脫無量衆生。皆令得道。乃取滅度。次有如來名曰光遠。乃次名處世。如此諸佛

五十三。皆悉已過。爾時次有佛名世自在王如來。時有國王聞佛說法。心懷悅豫。尋發無

上正真道意。棄國捐王行作沙門。號曰法藏。高才勇哲。與世超異。詣世自在王如來所。乃

於是世自在王佛即爲廣說二百一十億諸佛刹土。天人之善惡。國土之麤妙。應其心願。

悉現與之。時比丘聞佛所說。嚴淨國土。皆悉親見。超發無上殊勝之願。其心寂靜。志無

所著一切世間無能及者。具足五劫思惟攝取莊嚴佛國清淨之行。阿難白佛彼佛國土壽量幾何。佛言其佛壽命四十二劫。時法藏比丘攝取二百一十億諸佛妙土清淨之行。又大阿彌陀經云其佛即選擇二百一十億佛國土中諸天人民之善惡國土之好醜。為選擇心中所欲願。樓夷互羅佛此云世自說經畢。曇摩迦此云法藏。便一其心即得天眼徹視悉自見二百一十億諸佛國土中諸天人民之善惡國土之好醜。即選擇心中所願便結得是二十四願經。平等覺經亦復同之此中選擇者即是取捨義也。謂於二百一十億諸佛淨土之中捨人天之惡而取人天之善。捨國土之醜而取國土之好也。大阿彌陀經選擇義如是。雙卷經意亦有選擇義。謂云攝取二百一十億諸佛妙土清淨之行是也。選擇與攝取其言雖異其意是同。然則捨不清淨行而取清淨之行也。上天人之善惡國土之麤妙其義亦然。準是應知。夫約四十八願一往各論選擇攝取之義者。第一無三惡趣願者於所觀見之二百一十億土中或有有三惡趣之國土。或有無三惡趣之國土。即選擇捨其有三惡趣麤惡國土。選取其無三惡趣善妙國土。故云選擇也。第二不更惡趣願者於彼諸佛土中或有雖國中無三惡道其國人天壽終之後從其國去復更三惡趣之土。或有不更惡道之士。即選擇捨其更惡道麤惡國土。選取其不更惡道善妙國土。故云選擇也。第三悉皆

一本土下無之字

則一本作者而字

一本雖上有縱字

金色願者於彼諸佛土中或有一土之中有黃白二類人天之國土。或有純黃金色之國土。即選擇捨黃白二類麤惡國土。選取黃金一色善妙國土。故云選擇也。第四無有好醜願者於彼諸佛土中或有人天形色好醜不同之國土。或有形色一類無有好醜之國土。即選擇捨好醜不同麤惡國土。選取無有好醜善妙國土。故云選擇也。乃至第十八念佛往生願者於彼諸佛土中或有以布施為往生行之土。或有以持戒為往生行之土。或有以忍辱為往生行之土。或有以精進為往生行之土。或有以禪定為往生行之土。或有以般若信第一義為往生行之土。或有以菩提心為往生行之土。或有以六念為往生行之土。或有以持經為往生行之土。或有以持呪為往生行之土。或有以起立塔像飯食沙門及以孝養父母奉事師長等種種之行各為往生行之國土等。或有專稱其國佛名為往生行之土。如此以一行配一佛土者且是一往之義也。再往論之其義不定。或有一佛土中以多行為往生行之土。或有多佛土中以一行通為往生行之土。如是往生之行種種不同。不可具述也。即今選擇前布施持戒乃至孝養父母等諸行而選取專稱佛號故云選擇也。且約五願略論選擇其義如是。自餘諸願準是應知。問曰。曾約諸願選擇捨麤惡而選取善妙。其理可然。何故第十八願選擇一切諸行唯偏選取念佛一行為往生本願乎。答曰。聖

且是一本作是且

一本生下無之字

一本行下無而字

一本惡下無而字

一本具下無而字

一本易下無以字
則一本作者
則一本作者

意難測不能輒解。雖然今試以二義解之。一者勝劣義。二者難易義。初勝劣者念佛是勝餘行是劣。所以者何。名號者是万德之所歸也。然則彌陀一佛所有四智三身十力四無畏等一切內證功德。相好光明說法利生等一切外用功德。皆悉攝在阿彌陀佛名號之中。故名號功德最為勝也。餘行不然。各守一隅。是以為劣也。譬如世間屋舍名字之中。攝棟梁椽柱等一切家具。而棟梁等一一名字中不能攝一切。以是應知。然則佛名號功德勝餘一切功德。故捨劣取勝。以為本願歟。次難易義者。念佛易修。諸行難修。是故往生禮讚云。問曰。何故不令作觀。直遣專稱名字者。有何意也。答曰。乃由衆生障重境細。心攝識。顯神飛觀難成就也。是以大聖悲憐。直勸專稱名字。正由稱名易故。相續即生。上又往生要集問曰。一切善業各有利益。各得往生。何故唯勸念佛一門。答曰。今勸念佛。非是遮餘種種妙行。只是男女貴賤。不簡行住坐臥。不論時處。諸緣修之不難。乃至臨終願求往生。得其便宜。不如念佛。上故知念佛易故。通於一切。諸行難故。不通諸機。然則為令一切衆生平等往生。捨難取易。以為本願歟。若夫以造像起塔。而為本願。則貧窮困乏之類。定絕往生望。然富貴者少。貧賤者甚多。若以智慧高才。而為本願。則愚鈍下智者。定絕往生望。然智慧者少。愚癡者甚多。若以多聞多見。而為本願。則少聞少見輩。定絕往生望。然多聞

則一本作者
一本者下無其字

何以一本作
同何以一本作
一本天下有
既以二字
悉一本作以
獨一本作以
以當一本孤
(15)

者少。少聞者甚多。若以持戒持律。而為本願。則破戒無戒人。定絕往生望。然持戒者少。破戒者甚多。自餘諸行。準是應知。當知以上諸行等。而為本願。則得往生者少。不往生者甚多。然則彌陀如來法藏比丘之昔。被催平等慈悲。為普攝於一切。不以造像起塔等諸行。為往生本願。唯以稱名念佛一行。為其本願也。故法照禪師五會法事讚云。彼佛因中立弘誓。聞名念我。總迎來。不簡貧窮。將富貴。不簡下智與高才。不簡多聞持淨戒。不簡破戒罪根深。但使迴心多念佛。能令瓦礫變成金。上問曰。一切菩薩。雖立其願。或有已成就。亦有未成就。未審法藏菩薩四十八願。為已成就。將為未成就也。答曰。法藏誓願一一成就。何者。極樂界中。既無三惡趣。當知是則成就。無三惡趣之願也。何以得知。即願成就文云。亦無地獄餓鬼畜生諸難之趣。是也。又彼國人天壽終之後。無三惡趣。當知是則成就。不墮惡趣之願也。何以得知。即願成就文云。又彼菩薩。乃至成佛。不墮惡趣。是也。又極樂人天。無有一人不具三十二相。當知是則成就。具三十二相願也。何以得知。即願成就文云。生彼國者。皆悉具足三十二相。是也。如是初自無三惡趣。願終至得三法忍。願一一誓願皆悉成就。第十八念佛往生願。豈獨不成就乎。然則念佛之人。皆當往生。何以得知。即念佛往生願成就文云。諸有衆生。聞其名號。信心歡喜。乃至一念至心。迴向願生彼國。即

得往生住不退轉是也。凡四十八願莊嚴淨土。華池寶閣無非願力。何於其中獨可疑惑。念佛往生願乎。加之一一願終云若不爾者不取正覺。而阿彌陀佛成佛已來於今十劫成佛之誓既以成就。當知一一之願不可虛設。故善導云彼佛今現在世成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生。上問曰經云十念。釋云十聲。念聲之義如何。答曰念聲是一。何以得知。觀經下品下生云令聲不絕。具足十念。稱南無阿彌陀佛。稱佛名故於念念中除八十億劫生灰之罪。今依此文聲即是念念即是聲其意明矣。加之大集月藏經云大念見大佛。小念見小佛。感師釋云大念者大聲念佛。小念者小聲念佛。故知念即是唱也。問曰經云乃至。釋云下至。其意如何。答曰乃至與下至其意是一。經云乃至者從多向少之言也。多者上盡一形也。少者下至十聲一聲等也。釋云下至者下者對上之言也。下者下至十聲一聲等也。上者上盡一形也。上下相對之文其例惟多。宿命通願云設我得佛國中人不識宿命下至不知百千億那由他諸劫事者不取正覺。如是五神通及以光明壽命等願中一一置下至之言是則從多至少以下對上之義也。例上八種之願今此願乃至者即是下至也。是故今善導所引釋下至之言其意不相違。但善導與諸師其意不同。諸師之釋別云十念往生願。善導獨總云念佛往生願。諸師別云十念往生願者

一本念下有之字

一本無無量壽經下云六字

其意即不周也。所以然者上捨一形下捨一念故也。善導總言念佛往生願者其意即周也。所以然者上取一形下取一念故也。

三輩念佛往生之文

無量壽經下云佛告阿難十方世界諸天人民其有至心願生彼國。凡有三輩。其上輩者捨家棄欲而作沙門。發菩提心一向專念無量壽佛。修諸功德願生彼國。此等衆生臨壽終時無量壽佛與諸大衆現其人前。即隨彼佛往生其國。復於七寶華中自然化生住不退轉。智慧勇猛神通自在。是故阿難其有衆生欲於今世見無量壽佛。應發無上菩提之心。修行功德願生彼國。

佛語阿難其中輩者十方世界諸天人民其有至心願生彼國。雖不能行作沙門。大修功德。當發無上菩提之心一向專念無量壽佛。多少修善奉持齋戒。起立塔像。飯食沙門。懸繒然燈散華燒香。以此迴向願生彼國。其人臨終無量壽佛化現其身。光明相好具如真佛。與諸大衆現其人前。即隨化佛往生其國。住不退轉。功德智慧次如上輩者也。佛告阿難其下輩者十方世界諸天人民其有至心欲生彼國。假使不能作諸功德。當發無上菩提之心一向專意。乃至十念。念無量壽佛。願生其國。若聞法歡喜信樂不生疑惑。乃

至一念念於彼佛以至誠心願生其國此人臨終夢見彼佛亦得往生功德智慧次如中輩者也。

私問曰上輩文中念佛之外亦有捨家棄欲等餘行。中輩文中亦有起立塔像等餘行。下輩文中亦有菩提心等餘行。何故唯云念佛往生乎。答曰善導和尚觀念法門云又此經下卷初云佛說一切衆生根性不同有上中下隨其根性佛皆勸專念無量壽佛名其人命欲終時佛與聖衆自來迎接盡得往生。依此釋意三輩俱云念佛往生也。問曰此釋未遮前難。何棄餘行唯云念佛乎。答曰此有三意。一為廢諸行歸於念佛而說諸行也。二為助成念佛而說諸行也。三約念佛諸行二門各為立三品而說諸行也。一為廢諸行歸於念佛而說諸行者。準云善導觀經疏中上來雖說定散兩門之益望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名之釋意且解之者。上輩之中雖說菩提心等餘行。望上本願意唯在衆生專稱彌陀名。而本願中更無餘行。三輩俱依上本願。故云一向專念無量壽佛也。一向者對二向三向等之言也。例如彼五竺有三種寺。一者一向大藥寺。此寺之中無學小藥。二者一向小藥寺。此寺之中無學大藥。三者大小兼行寺。此寺之中大小兼學。故云兼行寺。當知大小兩寺有一向之言。兼行之寺無一向之言。今此經中一向亦然。若念佛外亦

準一本作准

一本向下並無之字

雖先一本作既先雖

一本無次異類助成者六字

一本見下無於字

觀一本作卷

觀一本作卷俱一(19)本作共

加餘行即非一向。若準寺者可云兼行。既云一向不兼餘明矣。雖先說餘行後云一向專念。明知廢諸行唯用念佛。故云一向。若不然者一向之言最以亘消歟。二為助成念佛說。此諸行者此亦有二意。一以同類善根助成念佛。二以異類善根助成念佛。初同類助成者善導和尚觀經疏中舉五種助行助成念佛一行是也。具如上正雜二行之中說。次異類助成者先就上輩而論。正助者一向專念無量壽佛者是正行也。亦是所助也。捨家棄欲而作沙門發菩提心等者是助行也。亦是能助也。謂往生之業念佛為本。故為一向修念佛捨家棄欲而作沙門。又發菩提心等也。就中出家發心等者且指初出及以初發念佛是長時不退之行。寧容妨礙念佛也。中輩之中亦有起立塔像懸繒然燈散華燒香等諸行。是則助成念佛也。其旨見於往生要集。謂助念方法中方處供具等是也。下輩之中亦有發心。亦有念佛。助正之義準前可知。三約念佛諸行各為立三品而說諸行者。先約念佛立三品者。謂此三輩中通皆云一向專念無量壽佛。是則約念佛門立其三品也。故往生要集念佛證據門云雙觀經三輩之業雖有淺深。然通皆云一向專念無量壽佛。師感同。次約諸行門立三品者。謂此三輩中通皆有菩提心等諸行。是則約諸行立其三品也。故往生要集諸行往生門云雙觀經三輩亦不出此。凡如此三義雖有不同。俱是所以

一本佛下無
而字
盜無一本作

爲一向念佛也。初義卽是爲廢立而說。謂諸行爲廢而說。念佛爲立而說。次義卽是爲助正而說。謂爲助念佛之正業而說。諸行之助業。後義卽是爲徇正而說。謂雖說念佛諸行二門以念佛而爲正。以諸行而爲徇。故云三輩通皆念佛也。但此等三義最難知。請諸學者取捨在心。今若依善導以初爲正耳。問曰三輩之業皆云念佛。其義可然。但觀經九品與壽經三輩本是開合異也。若爾者何壽經三輩之中皆云念佛。至觀經九品上中二品不說念佛而至下品始說念佛也。答曰此有二義。一如問端云雙卷三輩觀經九品開合異者以此應知。九品之中皆可念佛。云何得知。三輩之中皆有念佛。九品之中何無念佛乎。故往生要集云問念佛之行於九品中是何品攝。答若如說行理當上上。如是隨其勝劣應分九品。然經所說九品行業是示一端。理實無量。故知念佛亦可通九品。二觀經之意初廣說定散之行。皆逗衆機。後廢定散二善歸念佛一行。所謂汝好持是語等之文是也。其義如下具述。故知九品之行唯在念佛矣。

念佛利益之文

無量壽經下云佛語彌勒其有得聞彼佛名號歡喜踊躍乃至一念當知此人爲得大利。則是具足無上功德。

唯字一本在
說下
而字一本上無

一本念下無
之字
佛字一本在
念下。一本在
殿下無事字

善導禮讚云其有得聞彼彌陀佛名號歡喜至一念皆當得生彼。

私問曰準上三輩文念佛之外舉菩提心等功德何不歎彼等功德唯獨讚念佛功德乎。答曰聖意難測定有深意。且依善導一意而謂之者原夫佛意雖唯欲正直說念佛之行而一往隨機說菩提心等諸行分別三輩淺深不同。然今於諸行者既捨而不歎。置而不可論者也。唯就念佛一行既選而讚歎。思而容分別者也。若約念佛分別三輩此有二意。一隨觀念淺深而分別之。二以念佛多少而分別之。淺深者如上所引若如說行理當上上是也。次多少者下輩文中既有十念乃至一念之數。上中兩輩準此隨增。觀念法門云日別念一万徧佛亦須依時禮讚淨土莊嚴事。大須精進或得三万六万十万者皆是上品上生人。當知三万已上是上品上生業。三万已去是上品已下業。既隨念數多少分別品位是明矣。今此言一念者是指上念佛願成就之中所言一念與下輩之中所明一念也。願成就文中雖云一念未說功德大利。又下輩文中雖云一念亦不說功德大利。至此一念說爲大利。歎爲無上。當知是指上一念也。此大利者是對小利之言也。然則以菩提心等諸行而爲小利。以乃至一念而爲大利也。又無上功德者是對有上之言也。以餘行而爲有上。以念佛而爲無上也。既以一念爲一無上。當知以十念爲十無上。又以百念爲

百無上。又以千念爲千無上。如是展轉從少至多念佛恆沙無上功德從應恆沙。如是應知。然則諸願求生之人何廢無上大利念佛強修有上小利餘行乎。

末法萬年後餘行悉滅特留念佛之文

無量壽經下卷云當來之世經道滅盡我以慈悲哀愍特留此經止住百歲其有衆生值斯經者隨意所願皆可得度。

私問曰經唯云特留此經止住百歲全不云特留念佛止住百歲。然今何云特留念佛哉。答曰此經所詮全在念佛。其旨見前。不能再出善導懷感惠心等意亦復如是。然則此經止住者即念佛止住也。所以然者此經雖有善提心之言未說善提心之行相。又雖有持戒之言未說持戒之行相。而說善提心行相者廣在善提心經等。彼經先滅善提心之行何因修之。又說持戒行相者廣在大小戒律。彼戒律先滅持戒之行何因修之。自餘諸行準是應知。故善導和尚往生禮讚釋此文云。萬年三寶滅此經住百年。爾時聞一念皆當得生。彼又釋此文略有四意。一者聖道淨土二教住滅前後。二者十方西方二教住滅前後。三者兜率西方二教住滅前後。四者念佛諸行二行住滅前後也。一聖道淨土二教住滅前後者謂聖道門諸經先滅。故云經道滅盡淨土門此經特留。故云止住百歲也。當知

斯一本作此

謂一本者下無

則一本作者

以一本而上有
之一本願下有
之一本生下
有之一本王上
有之一字
(23)

聖道機緣淺薄淨土機緣濃厚也。十方西方二教住滅前後者謂十方淨土往生諸教先滅。故云經道滅盡。西方淨土往生此經特留。故云止住百歲也。當知十方淨土機緣淺薄西方淨土機緣濃厚也。三兜率西方二教住滅前後者謂上生心地等上生兜率諸教先滅。故云經道滅盡。往生西方此經特留。故云止住百歲也。當知兜率雖近緣淺極樂雖遠緣深也。四念佛諸行二行住滅前後者謂諸行往生諸教先滅。故云經道滅盡。念佛往生此經特留。故云止住百歲也。當知諸行往生機緣最淺。念佛往生機緣甚深也。加之諸行往生緣少念佛往生緣多。又諸行往生近局末法萬年之時。念佛往生遠霑法滅百歲之代也。問曰既云我以慈悲哀愍特留此經止住百歲。若爾者釋尊以慈悲而留經教何經何教而不留也。而何不留餘經唯留此經乎。答曰縱令留何經別指一經則亦不避此難。但特留此經有其深意歟。若依善導和尚意者此經之中已說彌陀如來念佛往生本願。釋迦慈悲爲願念佛殊留此經。餘經之中未說彌陀如來念佛往生本願。故釋尊慈悲而不留之也。凡四十八願皆雖本願殊以念佛爲往生規。故善導釋云弘誓多門四十八願。標念佛最爲親。人能念佛佛還念。專心想佛佛知人。已故知四十八願中既以念佛往生願而爲本願中王也。是以釋迦慈悲特以此經止住百歲也。例如彼觀無量壽經中不

獨一本作
願下有之
字下
可字一本在
廣下
(24)

付屬定散之行唯獨付屬念佛之行。是即順彼佛願故付屬念佛一行也。問曰百歲之間可留念佛其理可然。此念佛行唯爲被彼時機將爲通於正像末法之機也。答曰可廣通於正像末法。舉後勸今其義應知。

彌陀光明不照餘行者唯攝取念佛行者之文

觀無量壽經云無量壽佛有八万四千相。一一相各有八万四千隨形好。一一好復有八万四千光明。一一光明徧照十方世界念佛衆生攝取不捨。同經疏云從無量壽佛下至攝取不捨已來正明觀身別相光益有緣卽有其五。一明相多少。二明好多少。三明光多少。四明光照遠近。五明光所及處徧蒙攝益。問曰備修衆行但能迴向皆得往生。何以佛光普照唯攝念佛者有何意也。答曰此有三義。一明親緣。衆生起行口常稱佛佛卽聞之。身常禮敬佛佛卽見之。心常念佛佛卽知之。衆生憶念佛者佛亦憶念衆生。彼此三業不相捨離故名親緣也。二明近緣。衆生願見佛佛卽應念現在目前故名近緣也。三明增上緣。衆生稱念卽除多劫罪。命欲終時佛與聖衆自來迎接。諸邪業繫無能礙者故名增上緣也。自餘衆行雖名是善若比念佛者全非比技也。是故諸經中處處廣讚念佛功能。如無量壽經四十八願中唯明專念彌陀名號得生。又如彌陀經中一日七日專念。

彌陀名號得生。又十方恆沙諸佛證誠不虛也。又此經定散文中唯標專念名號得生。此例非一也。廣顯念佛三昧竟。

觀念法門云又如前身相等光一一徧照十方世界但有專念阿彌陀佛衆生彼佛心光常照是人攝護不捨。總不論照攝餘雜業行者。

私問曰佛光明唯照念佛者不照餘行者有何意乎。答曰解有二義。一者親緣等三義如文。二者本願義。謂餘行非本願故不照攝之。念佛是本願故照攝之。故善導和尚六時禮讚云彌陀身色如金山。相好光明照十方。唯有念佛蒙光攝。當知本願最爲強。上又所引文中言自餘衆善雖名是善若比念佛者全非比技也。者意云是約淨土門諸行而所比論也。念佛是既二百一十億中所選取妙行也。諸行是既二百一十億中所選捨麤行也。故云全非比技也。又念佛是本願行。諸行非本願。故云全非比技也。

念佛行者必可具足三心之文

觀無量壽經云若有衆生願生彼國者發三種心。即便往生。何等爲三。一者至誠心。二者深心。三者迴向發願心。具三心者必生彼國。

同經疏云經云一者至誠心。至者真誠者實。欲明一切衆生身口意業所修解行必須真實。

一本諸行下
有是字

(25)

心中作。不得外現賢善精進之相。內懷虛假。貪嗔邪偽。奸詐百端。惡性難侵。事同蛇蝎。雖起三業。名為雜毒之善。亦名虛假之行。不名真實業也。若作如此。安心起行者。縱使苦勵身心。日夜十二時急走急作。如灸頭然者。衆名雜毒之善。欲迴此雜毒之行。求生彼佛淨土者。此必不可也。何以故。正由彼阿彌陀佛。因中行菩薩行時。乃至一念一刹那。三業所修皆是真實心中作。凡所施為。趣求亦皆真實。又真實有二種。一者自利真實。二者利他真實。言自利真實者。復有二種。一者真實心中制捨。自他諸惡及穢國等。行住坐臥。想同一切菩薩。制捨諸惡。我亦如是也。二者真實心中勤修。自他凡聖等善。真實心中口業讚歎。彼阿彌陀佛及依正二報。又真實心中口業毀厭。三界六道等。自他依正二報。苦惡之事。亦讚歎一切衆生。三業所為善。若非善業者。敬而遠之。亦不隨喜也。又真實心中身業合掌禮敬。四事等供養。彼阿彌陀佛及依正二報。又真實心中身業輕慢。厭捨此生。凡三界等。自他依正二報。又真實心中意業。思想觀察。憶念彼阿彌陀佛及依正二報。如現目前。又真實心中意業輕賤。厭捨此生。凡三界等。自他依正二報。不善三業。必須真實心中捨。又若起善三業者。必須真實心中作。不簡內外。明闇皆須真實。故名至誠心。二者淡心。言淡心者。即是淡信之心也。亦有二種。一者決定淡信。自身現是罪惡生。凡夫曠劫已來。常沒常流。轉無有出離之緣。二者

決定淡信。彼阿彌陀佛四十八願。攝受衆生。無疑無慮。棄彼願力。定得往生。又決定淡信。信釋迦佛說。此觀經三福九品。定散二善。證讚彼佛。依正二報。使人欣慕。又決定淡信。彌陀經中十方恆沙諸佛。證勸一切凡夫。決定得生。又淡信者。仰願一切行者等。一心唯信佛語。不顧身命。決定依行。佛遣捨者。即捨。佛遣行者。即行。佛遣去處。即去。是名隨順佛教。隨順佛意。是名隨順佛願。是名真佛弟子。又一切行者。但能依此經淡信行者。必不悞衆生也。何以故。佛是滿足大悲人。故實語。故除佛已還。智行未滿。在其學地。由有正習二障。未除。果願未圓。此等凡聖。縱使測量諸佛教意。未能決了。雖有平章。要須請佛證為定也。若稱佛意。即印可言。如是如是。若不可佛意者。即言汝等所說是義。不如是不印者。即同無記。無利無益之語。佛印可者。即隨順佛之正教。若佛所有言說。即是正教。正義正行。正解正業。正智。若多若少。衆不問菩薩人天等。定其是非也。若佛所說。即是了教。菩薩等說。盡名不了教也。應知是故。今時仰勸一切有緣。往生人等。唯可淡信佛語。專注奉行。不可信用菩薩等。不相應教。以為疑礙。抱惑自迷。廢失往生之大益也。又淡心淡信者。決定建立自心。順教修行。永除疑錯。不為一切別解。別行異學。異見異執之所退失。傾動也。問曰。凡夫智淺。惑障處淡。若逢解行不同。人多引經論來相妨難證云。一切罪障。凡夫不得往生者。云何對治。彼難成就信心。決定直

進不生怯退也。答曰：若有人多引經論證云：不生者行者即報云：仁者雖將經論來證，濟不生如我意者，決定不受汝破。何以故？然我亦不是不信。彼諸經論盡皆仰信。然佛說彼經時，處別時別對機別利益別。又說彼經時，即非說觀經彌陀經等時。然佛說教備機時亦不同。彼即通說人天菩薩之解行。今說觀經定散二善，唯為韋提及佛滅後五濁五苦等一切凡夫證言得生。為此因緣，我今一心依此佛教，決定奉行。縱使汝等百萬億壽不生者，唯增長成就我往生信心也。又行者更向說言：仁者善聽我今為汝更說決定信相。縱使地前菩薩羅漢辟支等，若一若多乃至徧滿十方，皆引經論證言不生者，我亦未起一念疑心。唯增長成就我清淨信心。何以故？由佛語決定成就了義，不為一切所破壞。故又行者善聽縱使初地已上十地已來，若一若多乃至徧滿十方異口同音，皆云釋迦佛指讚彌陀毀皆三界六道勸勵眾生專心念佛及修餘善畢，此一身後必定生彼國者，此必虛妄不可依信也。我雖聞此等所說亦不生一念疑心，唯增長成就我決定上上信心。何以故？乃由佛語真實決了義故。佛是實知實解實見實證，非是疑惑心中語故。又不為一切菩薩異見異解之所破壞。若實是菩薩者，衆不違佛教也。又置此事，行者當知縱使化佛報佛，若一若多乃至徧滿十方各各輝光吐舌徧覆十方，一一說言釋迦所說相讚勸發一切凡夫專心念佛及修餘

一本恆下無
河字
一本生下無
惡見二字

善迴願得生彼淨土者，此是虛妄定無此事也。我雖聞此等諸佛所說，畢竟不起一念疑退之心，畏不得生彼佛國也。何以故？一佛一切佛，所有知見解行證悟果位大悲等，同無少差別。是故一佛所制，即一切佛同制。如似前佛制斷殺生十惡等罪，畢竟不犯不行者，即名十善十行隨順六度之義。若有後佛出世，豈可改前十善令行十惡也？以此道理推驗，明知諸佛言行不相違失。縱令釋迦指勸一切凡夫盡此一身專念專修捨命已後，定生彼國者，即十方諸佛悉皆同讚同勸同證。何以故？同體大悲故。一佛所化，即是一切佛化。一切佛化，即是一佛所化。即彌陀經中說釋迦讚歎極樂種種莊嚴，又勸一切凡夫一日七日一心專念彌陀名號，定得往生。次下文云：十方各有恆河沙等諸佛同讚。釋迦能於五濁惡時惡世界惡衆生惡見惡煩惱惡邪無信盛時，指讚彌陀名號，勸勵衆生稱念，必得往生。即其證也。又十方佛等，恐畏衆生不信釋迦一佛所說，即共同心同時各出舌相徧覆三千世界，說誠實言。汝等衆生皆應信是釋迦所說，所讚所證一切凡夫，不問罪福多少，時節久近，但能上盡百年下至一日七日一心專念彌陀名號，定得往生，必無疑也。是故一佛所說，即一切佛同證誠其事也。此名就人立信也。次就行立信者，然行有二種：一者正行，二者雜行。云云。如前二見人得。二者迴向發願心。言迴向發願心者，過去及以今生身口意業所修世出世善根及

隨喜佗一切凡聖身口意業所修世出世善根以此自佗所修善根悉皆真實深信心中迴向願生彼國故名迴向發願心也。又迴向發願願生者必須決定真實心中迴向願作得生想。此心滾信由若金剛不爲一切異見異學別解別行人等之所動亂破壞。唯是決定一心投正直進不得聞彼人語。卽有進退心生怯弱迴願落道卽失往生之大益也。問曰若有解行不同邪雜人等來相惑亂或說種種疑難善不得往生。或云汝等衆生曠劫已來及以今生身口意業於一切凡聖身上具造十惡五逆四重謗法闡提破戒破見等罪未能除盡。然此等之罪繫屬三界惡道云何一生修福念佛卽入彼無漏無生之國永得證悟不退位也。答曰諸佛教行數越塵沙。稟識機緣隨情非一。譬如世間人眼可見可信者如明能破闇空能含有地能載養水能生潤火能成壤。如此等事悉名待對之法。卽目可見千差萬別。何況佛法不思議之力豈無種種益也。隨出一門者卽出一煩惱門也。隨入一門者卽入一解脫智慧門也。爲此隨緣起行各求解脫。汝何以乃將非有緣之要行。郵惑於我。然我之所愛卽是我有緣之行。卽非汝所求。汝之所愛卽是汝有緣之行。亦非我所求。是故各隨所樂而修其行者必疾得解脫也。行者當知若欲學解脫。凡至聖乃至佛果一切無礙皆得學也。若欲學行者必藉有緣之法。少用功勞多得益也。又白一切往生人等。今夏爲行者說一譬喻守

護信心以防外邪異見之難。何者是也。譬如有人欲向西行百千之里。忽然中路見有二河。一是火河在南。二是水河在北。二河各闊百步。各深無底。南北無邊。正水火中間有一白道。可闊四五寸許。此道從東岸至西岸亦長百步。其水波浪交過。溼道其火燄亦來燒道。水火相交常無休息。此人既至空曠迴處。更無人物。多有羣賊惡獸。見此人單獨競來欲殺。此人怖死直走向西。忽然見此大河。卽自念言此河南北不見邊畔。中間見一白道。極是狹小。二岸相去雖近。何由可行。今日定死無疑。正欲到迴羣賊惡獸漸漸來逼。正欲南北避走。惡獸毒蟲競來向我。正欲向西尋道而去。復恐墮此水火二河。當時惶怖不復可言。卽自思念。我今迴亦死。住亦死。去亦死。一種不免死。我寧尋此道向前而去。既有此道。必應可度。作此念時。東岸忽聞入勸聲。仁者但決定尋此道。行必無死難。若住卽死。又西岸上有人喚言。汝一心正念直來。我能護汝。衆不畏墮於水火之難。此人既聞此遣彼喚。卽自正當身心。決定尋道直進。不生疑怯退心。或行一分二分。東岸羣賊等喚言。仁者迴來。此道嶮惡。不得過。必死無疑。我等衆無惡心相向。此人雖聞喚聲。亦不迴顧。一心直進。念道而行。須臾卽到西岸。永離諸難。善友相見慶樂無已。此是喻也。次合喻者言。東岸者卽喻此娑婆之火宅也。言西岸者卽喻極樂寶國也。言羣賊惡獸詐親者卽喻衆生六根六識六塵五陰四大也。言無人空

一本欲下有
住字。教國
一本作淨國

倒一本作到

三二

迴澤者即喻常隨惡友不值真善知識也。言水火二河者即喻衆生貪愛如水瞋憎如火也。言中間白道四五寸者即喻衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心也。乃由貪瞋強故即喻如水火善心微故喻如白道。又水波常溼道者即喻愛心常起能染汚善心也。又火焰常燒道者即喻瞋嫌之心能燒功德之法財也。言人行道上直向西者即喻迴諸行業直向西。方也。言東岸聞人聲勸遣尋道直西進者即喻釋迦已滅後人不見由有教法可尋即喻之如聲也。言或行一分二分羣賊等喚迴者即喻別解別行惡見人等妄說見解迭相惑亂及自造罪退失也。言西岸上有人喚者即喻彌陀願意也。言須臾到西岸善友相見喜者即喻衆生久沈生灰曠劫輪迴迷倒自纏無由解脫。仰蒙釋迦發遣指向西方。又藉彌陀悲心招喚。今信順二尊之意不願水火二河念無遺棄彼願力之道捨命已後得生彼國與佛相見慶喜何極也。又一切行者行住坐臥三業所修無間晝夜時節常作此解常作此想故名迴向發願心。又言迴向者生彼國已還起大悲迴入生灰教化衆生亦名迴向也。三心既具無行不成。願行既成若不生者無有是處。又此三心亦通攝定善之義。應知。

往生禮讚云問曰今欲勸人往生者未知若爲安心起行作業定得往生彼國土也。答曰必欲生彼國土者如觀經說者具三心必得往生何等爲三。一者至誠心。所謂身業禮拜彼佛。

口業讚歎稱揚彼佛意業專念觀察彼佛。凡起三業必須真實故名至誠心。二者深心。即是眞實信心。信知自身是具足煩惱。凡夫善根薄少流轉三界不出火宅。今信知彌陀本弘誓願及稱名號下至十聲一聲等定得往生。乃至一念無有疑心故名深心。三者迴向發願心。所作一切善根悉皆迴願往生故名迴向發願心。具此三心必得生也。若少一心即不得生。如觀經具說。應知。

可全一本作
全可

辭一本作言

辭一本作言

私云所引三心者是行者至要也。所以者何。經則云具三心者必生彼國。明知具三必應得生。釋則云若少一心即不得生。明知一少是更不可。因茲欲生極樂之人可全具足三心也。其中至誠心者是眞實心也。其相如彼文。但外現賢善精進相。內懷虛假者。外者對內之辭也。謂外相與內心不調之意。即是外智內愚也。賢者對愚之辭也。謂外是賢內即愚也。善者對惡之辭也。謂外是善內即惡也。精進者對懈怠之辭也。謂外示精進相。內即懷懈怠心也。若夫翻外善內者。祇應備出要。內懷虛假等者。內者對外之辭也。謂內心與外相不調之意。即是內虛外實也。虛者對實之辭也。謂內虛外實者也。假者對眞之辭也。謂內假外眞也。若夫翻內播外者。亦可足出要。次深心者謂深信之心。當知生灰之家。以疑爲所止。涅槃之城。以信爲能入。故今建立二種信心。決定九品往生者也。又此中言一

一本知下有
之字
一本勿下有
令字

(34)

切別解別行異學異見等者是指聖道門解行學見也。其餘即是淨土門意。在文可見。明知善導之意亦不出此二門也。迴向發願心之義不可俟別釋。行者應知此三心者總而言之通諸行法。別而言之在往生行。今舉通攝別意。即周矣。行者能用心敢勿忽緒。

念佛行者可行用四修法之文

一本禮下無
專字
一本不下無
令字

善導往生禮讚云。又勸行四修法。何者爲四。一者恭敬修。所謂恭敬禮拜彼佛及彼一切聖衆等。故名恭敬修。畢命爲期誓不中止。即是長時修。二者無餘修。所謂專稱彼佛名。專念專想。專禮。專讚。彼佛及一切聖衆等。不雜餘業。故名無餘修。畢命爲期誓不中止。即是長時修。三者無間修。所謂相續恭敬禮拜。稱名讚歎。憶念觀察。迴向發願。心心相續。不以餘業來間。故名無間修。又不以貪瞋煩惱來間。隨犯隨懺。不令隔念。隔時隔日。常使清淨。亦名無間修。畢命爲期誓不中止。即是長時修。

一本二下有
者字
一本本作袋
者字
一本三下有
者字

西方要決云。但修四修以爲正業。一者長時修。從初發心乃至菩提。恆作淨因。終無退轉。二者恭敬修。此復有五。一敬有緣聖人。謂行住坐臥。不背西方。涕唾便痢。不向西方也。二敬有緣像。教謂造西方彌陀像。變不能廣作。但作一佛二菩薩。亦得。教者彌陀經等。五色帛盛。自讀教。佗此之經。像安置室中。六時禮懺。香華供養。特生尊重。三敬有緣善知識。謂宣淨土教。

一本四下有
者字
一本五下有
者字

(35)

者若干由。句十由。句已來。竝須敬重親近供養。別學之者。總起敬心。與己不同。但知敬也。若生輕慢得罪無窮。故須總敬。卽除行障。四敬同緣伴。謂同修業者。自雖障重。獨業不成。要藉良朋。方能作行。扶危救厄。助力相資。同伴善緣。淡相保重。五敬三寶。同體別相。竝合。淡敬不能具錄。爲淺行者。不果依修。住持三寶者。與今淺識作大因緣。今粗料簡言。佛寶者。謂雕檀繡綺。素質金容。鏤玉圖。繪磨石。削土。此之靈像。特可尊重。剋爾觀形。罪消增福。若生少慢。長惡善亡。但想尊容。當見真佛。言法寶者。三乘教旨。法界所流。名句所詮。能生解緣。故須珍仰。以發慧基。鈔寫尊經。恆安淨室。箱篋盛貯。竝合嚴敬。讀誦之時。身手清潔。言僧寶者。聖僧菩薩。破戒之流。等心起敬。勿生慢想。三者無間修。謂常念佛。作往生心。於一切時。心恆想巧。譬若有人。被佗抄掠。身爲下賤。備受艱辛。忽思父母。欲走歸國。行裝未辦。由在佗鄉。日夜思惟。苦不堪忍。無時暫捨。不念耶娘。爲計既成。便歸得達。親近父母。縱任歡娛。行者亦然。往因煩惱。壞亂善心。福智珍財。竝皆散失。久流生灰。制不自由。恆與魔王。而作僕使。驅馳六道。苦切身心。今遇善緣。忽聞彌陀慈父。不違弘願。濟拔羣生。日夜驚忙。發心願往。所以精勤不倦。當念佛恩。報盡爲期。心恆計念。四者無餘修。謂專求極樂。禮念彌陀。但諸餘業。行不令雜起。所作之業。日別須修。念佛誦經。不畱餘課耳。

私云四修之文可見恐繁而不解。但前文中既云四修唯有三修。若脫其文。若有其意也。要非脫文。有其濃意也。何以得知。四修者一長時修。二懇重修。三無餘修。四無間修也。而以初長時只是通用。後三修也。謂懇重若退。懇重之行即不可成。無餘若退。無餘之行即不可成。無間若退。無間之行即不可成。為使成就此三修行。皆以長時屬於三修。所令通修也。故三修之下皆結云。畢命為期。誓不中止。即是長時修是也。例如彼精進通於餘五度而已。

彌陀化佛來迎不讚歎聞經之善唯讚歎念佛之行之文

觀無量壽經云。或有衆生。作衆惡業。雖不誹謗。方等經典。如此愚人。多造衆惡。無有慚愧。命欲終時。遇善知識。為讚大藥。十二部經。首題名字。以聞。如是諸經名。故除卻千劫極重惡業。智者復教。合掌叉手。稱南無阿彌陀佛。稱佛名。故除五十億劫生灰之罪。爾時彼佛即遣化佛化觀世音。化大勢。至至行者前。讚言善男子。汝稱佛名。故諸罪消滅。我來迎汝。同經疏云。所聞化讚。但述稱佛之功。我來迎汝。不論聞經之事。然望佛願。意者唯勸正念。稱名往生。義疾不同。雜散之業。如此經及諸部中。處處廣歎勸令稱名。將為要益也。應知。私云聞經之善。非是本願雜業。故化佛不讚。念佛之行。是本願正業。故化佛讚歎。加之聞

分一本作芬

指一本明下無分一本作芬

經與念佛滅罪多少不同也。觀經疏云。問曰。何故聞經十二部。但除罪千劫。稱佛一聲。即除罪五百万劫者。何意也。答曰。造罪之人。障重。加以灰苦來逼。善人雖說。多經。貪受之心。浮散。由心散。故除罪稍輕。又佛名是一。即能攝散。以住心。復教令正念。稱名。由心重。故即能除罪多劫也。

約對雜善讚歎念佛之文

觀無量壽經云。若念佛者。當知此人。是人中分陀利華。觀世音菩薩大勢至菩薩。為其勝友。當坐道場。生諸佛家。

同經疏云。從若念佛者。下至生諸佛家。已來。正顯念佛三昧功能。超絕實非雜善得為比類。即有其五。一明專念彌陀佛名。二明指讚能念之人。三明若能相續念佛者。此人甚為希有。要無物可以方之。故引分陀利為喻。言分陀利者。名入中好華。亦名希有華。亦名入中上上華。亦名入中妙好華。此華相傳名。蔡華是。若念佛者。即是人中好人。人中妙好人。人中上上人。人中希有人。人中最勝人也。四明專念彌陀名者。即觀音勢至。常隨影護。亦如親友知識也。五明今生既蒙此益。捨命即入諸佛之家。即淨土是也。到彼長時聞法。歷事供養。因圓果滿。道場之座。豈賒。

一本說下無於字

餘行所不堪
一本作所不堪
堪能一本作能

藟一本作纏

私問曰經云若念佛者當知此人等唯約念佛者而讚歎之釋家有何意云實非雜善得爲比類相對雜善獨歎念佛乎答曰文中雖隱義意是明所以知者此經既說定散諸善并念佛行而於其中獨標念佛喻分陀利非待雜善云何能顯念佛功超餘善諸行然則念佛者即是人中好人者是待惡而所美也言人中妙好人者是待羸惡而所稱也言人中上上人者是待下下而所讚也言人中希有人者是待常有而所歎也言入中最勝人者是待最劣而所褒也問曰既以念佛名上上者何故不說於上上品中至下下品而說念佛乎答曰豈前不云念佛之行廣互九品即前所引往生要集云隨其勝劣應分九品是也加之下品下生是五逆重罪之人也而能除滅逆罪餘行所不堪唯有念佛之力堪能滅於重罪故爲極惡最下之人而說極善最上之法例如彼無明淵源之病非中道府藏之藥即不能治今此五逆重病淵源亦此念佛靈藥府藏非此藥者何治此病故弘法大師二教論引六波羅蜜經云第三法寶者所謂過去無量諸佛所說正法及我今所說所謂八萬四千諸妙法蘊乃至調伏純熟有緣衆生而令阿難陀等諸大弟子一聞於耳皆悉憶持攝爲五分一素咀纒二毘奈耶三阿毘達磨四般若波羅蜜多五陀羅尼門此五種藏教化有情隨所應度而爲說之若彼有情樂處山林常居閑寂修靜慮者而爲彼說

一本速下無疾字一本五下無法字

一本醒下有之字

循一本作通

素咀纒藏若彼有情樂習威儀護持正法一味和合令得久住而爲彼說毘奈耶藏若彼有情樂說正法分別性相循環研覈究竟甚深而爲彼說阿毘達磨藏若彼有情樂習大藥真實智慧離於我法執著分別而爲彼說般若波羅蜜多藏若彼有情不能受持契經調伏對法般若或復有情造諸惡業四重八重五無間罪誦方等經一闍提等種種重罪使得銷滅速疾解脫頓悟涅槃而爲彼說諸陀羅尼藏此五法藏譬如乳酪生酥熟酥及妙醍醐契經如乳調伏如酪對法教者如彼生酥大藥般若猶如熟酥總持門者譬如醍醐醍醐之味乳酪酥中微妙第一能除諸病令諸有情身心安樂總持門者契經等中最爲第一能除重罪令諸衆生解脫生疾速證涅槃安樂法身此中五無間罪者是五逆罪也即非醍醐妙藥者五無間病甚爲難療念佛亦然往生教中念佛三味是如總持亦如醍醐若非念佛三味醍醐之藥者五逆深重病甚爲難治應知問曰若爾者下品上生是十惡輕罪之人何故說念佛乎答曰念佛三味重罪尚滅何況輕罪哉餘行不然或有滅輕而不滅重或有消一而不消二念佛不然輕重兼滅一切徧治譬如阿伽陀藥徧治一切病故以念佛爲王三味凡九品配當是一往義五逆迴心通於上上讀誦妙行亦通下下十惡輕罪破戒次罪各通上下解第一義發菩提心亦通上下一法各有九品若約

一本別下
無也莫二(40)
而一本作英

一本經下無
云字

已一本作以

就一本作付

四〇

品卽九九八十一品也。加之迦才云。衆生起行既有千殊。往生見土亦有萬別也。莫見一往文而起封執。其中念佛是卽勝行。故引分陀利以爲其喻。譬意應知。加之念佛行者觀音勢至如影與形。暫不捨離。餘行不爾。又念佛者捨命已後。決定往生極樂世界。餘行不定。凡流五種嘉譽。蒙二尊影護。此是現益也。亦往生淨土。乃至成佛。此是當益也。又道綽禪師於念佛一行。立始終兩益。安樂集云。念佛衆生攝取不捨。壽盡必生此名。始益。言終益者。依觀音授記經云。阿彌陀佛住世長久。兆載永劫。亦有滅度。般涅槃時。唯有觀音勢至。住持安樂。接引十方。其佛滅度。亦與住世時節等同。然彼國衆生一切無有親見佛者。唯有一向專念阿彌陀佛往生者。常見彌陀現在不滅。此卽是其終益也。上當知念佛有如此等現當二世始終兩益。應知。

釋尊不付屬定散諸行。唯以念佛付屬阿難之文。

觀無量壽經云。佛告阿難。汝好持是語。持是語者卽是持無量壽佛名。

同經疏云。從佛告阿難。汝好持是語。已下。正明付屬彌陀名號。流通於退代。上來雖說定散兩門之益。望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名。

私云。案疏文有二行。一定散。二念佛。初言定散者。又分爲二。一定善。二散善。初就定善有。

令一本作雖

就一本作付

就一本作付

令一本作雖
令一本作雖

一本善下有
之字。令一
本作雖
(41)

其十三一者日想觀。二者水想觀。三者地想觀。四者寶樹觀。五者寶池觀。六者寶樓閣觀。七者華座觀。八者像想觀。九者阿彌陀佛觀。十者觀音觀。十一者勢至觀。十二者皆往生觀。十三者雜想觀。具如經說。縱令無餘行。或一或多。隨其所堪。修十三觀。可得往生。其旨見經。敢莫疑慮。次就散善有二一者三福。二者九品。初三福者。經曰。一者孝養父母。奉事師長。慈心不殺。修十善業。二者受持三歸。具足衆戒。不犯威儀。三者發菩提心。深信因果。讀誦大乘。勸進行者。經上孝養父母者。就此有二。一世間孝養。二出世孝養也。世間孝養者。如孝經等說。出世孝養者。如律中。生緣奉仕法。奉事師長者。就此又有二。一世間師長。二出世師長也。世間師者。教仁義禮智信等師也。出世師者。教聖道淨土二門等師也。縱令無餘行。以孝養奉事爲往生業也。慈心不殺。修十善業者。就此有二。義一者初慈心不殺者。是四無量心中。初慈無量也。卽舉初一攝。後三也。縱令無餘行。以四無量心爲往生業也。次修十善業者。一不殺生。二不偷盜。三不邪淫。四不妄語。五不綺語。六不惡口。七不兩舌。八不貪。九不瞋。十不邪見也。二者合慈心不殺。修十善業二句。而爲一句。謂初慈心不殺者。此非四無量之中。慈無量是指十善之初不殺。故知正是十善一句也。縱令無餘行。以十善業爲往生業也。受持三歸者。歸依佛法僧也。就此有二。一者大乘三歸。二者小

獨一本作遍
一本宗下有
之本字。令一
本作雖
獨一本作遍
獨一本作遍
令一本作遍
一本果下有
可字
一本業下無
也字

樂三歸也。具足衆戒者此亦有二。一者大樂戒。二者小樂戒也。不犯威儀者此亦有二。一者大樂。謂有八万。二者小樂。謂有三千。發菩提心者諸師意不同也。天台卽有四教菩提心。謂藏通別圓是也。具如止觀說。真言卽有三種菩提心。謂行願勝義三摩地是也。具如菩提心論說。華嚴亦有菩提心。如彼菩提心義及遊心安樂道等說。三論法相各有菩提心。具如彼宗章疏等說。又有善導所釋菩提心。具如疏述。發菩提心其言雖一。各隨其宗。其義不同。然則菩提心之一句。廣互諸經。徧該顯密。意氣博遠。詮測冲逸。願諸行者莫執一遮。万諸求往生之人各須發自宗菩提心。縱令無餘行。以菩提心爲往生業也。深信因果者就此有二。一者世間因果。二者出世因果。世間因果者卽六道因果也。如正法念經說。出世因果者卽四聖因果也。如諸大小樂經說。若以此因果二法徧攝諸經者。諸家不同。且依天台謂華嚴者說。佛菩薩二種因果。阿含者說。聲聞緣覺二樂因果。方等諸經者說。四樂因果也。般若諸經者說。通別圓因果。法華者說。佛因佛果。涅槃者復說。四樂因果也。然則深信因果之言。徧普該羅於一代矣。諸求往生之人。縱令無餘行。以深信因果爲往生業也。讀誦大樂者分而爲二。一者讀誦。二者大樂。讀誦者卽是五種法師之中。舉轉讀誦。二師顯受持等三師。若約十種法行者卽是舉披讀誦。二種法行。顯書寫供養。

盡一本作而
一本樂下無
而字
之一本三下
之二字。一
下之。一本
(43)

等八種法行也。大樂者簡小樂之言也。非別指一經。通於一切諸大樂經。謂一切者佛意廣指一代所說諸大樂經。而於一代所說有已結集經。有未結集經。又於已結集經。或有隱龍宮。不流布人間之經。或有甯天竺。未來到漢地之經。而今就翻譯將來之經。而論之者。貞元入藏錄中。始自大般若經六百卷。終于法常住經。顯密大樂經總六百三十七部。二千八百八十三卷也。皆須攝讀誦大樂之一句。願西方行者各隨其意樂。或讀誦法華。以爲往生業。或讀誦華嚴。以爲往生業。或受持讀誦遮那教王。及以諸尊法等。以爲往生業。或解說書寫般若方等。及以涅槃經等。以爲往生業。是則淨土宗觀無量壽經意也。問曰。顯密旨異。何顯中攝密乎。答曰。此非云攝顯密之旨。貞元入藏錄中。同編之盡入大樂經限。故攝讀誦大樂一句也。問曰。爾前經中何攝法華乎。答曰。今所言攝者。非論權實偏圓等義。讀誦大樂之言。普通前後大樂諸經。前者觀經已前諸大樂經是也。後者王宮已後諸大樂經是也。唯云大樂而無選權實。然則正當率嚴方等般若法華涅槃等諸大樂經也。勸進行者者。謂勸進定散諸善。及念佛三昧等也。次九品者。開前三福爲九品業。謂上品上生。中言慈心不殺者。卽當上世福中第三句。次具諸戒行者。卽當上戒福中第二句。具足衆戒。次讀誦大樂者。卽當上行福中第三句。讀誦大樂。次修行六念者。卽上第三

福中第三句之意也。上品中生中言善解義趣等者即是上第三福中第二第三意也。上品下生中言深信因果發道心等者即是上第三福第一第二意也。中品上生中言受持五戒等者即上第二福中第二句意也。中品中生中言或一日一夜受持八戒齋等者又同上第二福之意也。中品下生中言孝養父母行世仁慈等者即上初福第一第二句意也。下品上生者是十惡罪人也。臨終一念罪滅得生。下品中生者是破戒罪人也。臨終聞佛依正功德罪滅得生。下品下生者是五逆罪人也。臨終十念罪滅得生。此之三品尋常之時唯造惡業。雖不求往生臨終之時始遇善知識即得往生。若準上三福者第三福大業意也。定善散善大概如此。文即云上來雖說定散兩門之益是也。次念佛者專稱彌陀佛名是也。念佛義如常。而今言正明付屬彌陀名號流通於遐代者。凡此經中既雖廣說定散諸行即不令以定散付屬阿難流通後世。唯以念佛三昧一行即使付屬阿難流通遐代也。問曰何故以定散諸行而不付屬流通乎。若夫依業淺深。嫌不付屬三福業中有淺有深。其淺業者孝養父母奉事師長也。其深業者具足衆戒發菩提心。深信因果讀誦大乘也。須捨淺業付屬深業。若依觀淺深。嫌不付屬十三觀中有淺有深。其淺觀者日想水想是也。其深觀者始自地觀終于雜想觀。總十一觀是也。須捨淺觀付屬深觀。就中第

雖廣一本作
廣雖一本作
不合以定散
一本作以定
散不令

一本使上有
一本而無不
一本作尚無
一本作(45)

一本味下有
之字一本
曰下無既字
一本屬下有
之字
一本屬下有
之字
一本下無
直字
不重一本作
重不

以一本作用

九觀是阿彌陀佛觀也。即是觀佛三昧也。須捨十二觀付屬觀佛三昧也。就中同疏玄義分中云此經觀佛三昧爲宗。亦念佛三昧爲宗。既以二行爲一經宗。何廢觀佛三昧而付屬念佛三昧哉。答曰既云望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名。定散諸行非本願。故不付屬。亦於其中觀佛三昧殊勝行非佛本願。故不付屬。念佛三昧是佛本願。故以付屬。言望佛本願者指雙卷經四十八願中第十八願也。言一向專稱者指同經三輩之一向專念也。本願之義具如前辨。問曰若爾者何故不直說本願念佛行。煩說非本願定散諸善乎。答曰本願念佛行雙卷經中委既說之。故不重說耳。又說定散爲顯念佛超過餘善。若無定散何顯念佛特秀。例如法華秀三說上。若無三說何顯法華第一。故今定散爲廢而說。念佛三昧爲立而說。但定散諸善皆以難測。凡定善者夫依正之觀懸鏡而照臨。往生之願指掌而速疾。或一觀之力能祛多劫之罪愆。或具憶之功終得三昧之勝利。然則求往生之人宜修行定觀。就中第九真身觀是觀佛三昧之法也。行若成就者即見彌陀身。見彌陀故得見諸佛。見諸佛故現前授記。此觀利益最甚深也。然今至觀經流通分釋迦如來告命阿難使付屬流通往生要法。嫌觀佛法而不付屬阿難。而選念佛法即以付屬阿難。觀佛三昧之法尚以不付屬。何況於日想水想等觀乎。然則十三定觀皆是

此非唯遠
一本作是
遠非 (46)

一本雖下無
是字

一本願下有
之字

一本願下有
之字非當
一本作即

後之一本作
之後

然則一本作
然者

所不付屬之行也。然世人若樂觀佛等不修念佛。此非唯遠乖彌陀本願。亦是近違釋尊付屬行者。空商量。次散善中有大小持戒行。世皆以為持戒行者是入真要也。破戒之者不可往生。又有菩提心行。人皆以為菩提心是淨土綱要。若無菩提心者。即不可往生。又有解第一義行。此是理觀也。人亦以為理是佛源。不可離理求佛土。若無理觀者。不可往生。又有讀誦大經行。人皆以為讀誦大經。即可往生。若無讀誦行者。不可往生。就此有二一者持經。二者持呪。持經者持般若法華等諸大經也。持呪者持隨求尊勝光明阿彌陀等諸神呪也。凡散善十一人。皆雖是貴而於其中。此四箇行當世之人。殊所欲之行也。以此等行。殆抑念佛。情尋經意者。不以此諸行付屬流通。唯以念佛一行。即使付屬流通後世。應知釋尊所以不付屬諸行者。即是非彌陀本願故也。亦所以付屬念佛者。即是彌陀本願故也。今又善導和尚所以廢諸行。歸念佛者。非當為彌陀本願之行。亦是釋尊付屬之行也。故知諸行非機失時。念佛往生當機得時。感應豈唐捐哉。當知隨佗之前雖暫開定散門。隨自之後還閉定散門。一開以後。永不閉者。唯是念佛一門。彌陀本願釋尊付屬意在此矣。行者應知。亦此中退代者。依雙卷經意。遠指末法。萬年後之百歲之時也。是則舉遐攝邇也。然則法滅之後。猶以然也。何況末法哉。末法已然。何況正法像法哉。故

知念佛往生道通正像末之三時及法滅百歲之時焉。

以念佛為多善根。以雜善為小善根之文。

阿彌陀經云。不可以少善根福德因緣。得生彼國。舍利弗。若有善男子善女人。聞說阿彌陀佛。執持名號。若一日。若二日。若三日。若四日。若五日。若六日。若七日。一心不亂。其人臨命終時。阿彌陀佛。與諸聖眾。現在其前。是人終時。心不顛倒。即得往生阿彌陀佛極樂國土。善導釋此文云。極樂無為涅槃界。隨緣雜善。恐難生。故使如來。選要法教。念彌陀。專復專。七日七夜。心無間。長時起行。倍皆然。臨終聖眾。持華現。身心踊躍。坐金蓮。坐時。即得無生忍。一念迎將。至佛前。法侶將衣。競來著。證得不退入三賢。

私云。不可以少善根福德因緣。得生彼國者。諸餘雜行者。難生彼國。故云隨緣雜善。恐難生。少善根者。對多善根之言也。然則雜善。是少善根也。念佛是多善根也。故龍舒淨土文云。襄陽石刻阿彌陀經。乃隋陳仁稜所書。字畫清婉。人多摹玩。自一心不亂。而下云。專持名號。以稱名。故諸罪消滅。即是多善根福德因緣。今世傳本。脫此二十一字。上非當有多少義。亦有大小義。謂雜善是小善根也。念佛是大善根也。亦有勝劣義。謂雜善是劣善根也。念佛是勝善根也。其義應知。

持一本作指

(47)

六方恆沙諸佛不證誠餘行唯證誠念佛之文

善導觀念法門云又如彌陀經云六方各有恆河沙等諸佛皆舒舌徧覆三千世界說誠實言若佛在世若佛滅後一切造罪凡夫但迴心念阿彌陀佛願生淨土上盡百年下至七日一日十聲三聲一聲等命欲終時佛與聖衆自來迎接即得往生如上六方等佛舒舌定爲凡夫作證罪滅得生若不依此證得生者六方諸佛舒舌一出口已後終不還入口自然壞爛。

若七日及一日一本作一日及七日

同往生禮讚引阿彌陀經云東方如恆河沙等諸佛南西北方及上下一一方如恆河沙等諸佛各於本國出其舌徧覆三千大千世界說誠實言汝等衆生皆應信是一切諸佛所護念經云何名護念若有衆生稱念阿彌陀佛若七日及一日下至十聲乃至一聲一念等必得往生證誠此事故名護念經。

又云六方如來舒舌證專稱名號至西方到彼華開開妙法十地願行自然彰。同觀經疏引阿彌陀經云又十方佛等恐畏衆生不信釋迦一佛所說即共同心同時各出舌徧覆三千世界說誠實言汝等衆生皆應信是釋迦所說所讚所證一切凡夫不問罪福多少時節久近但能上盡百年下至一日七日一心專念彌陀名號定得往生必無疑也。

一本願下有也字
一本說下有之字
一本佛下無而字

在於一本作難在

同法事讚云心心念佛莫生疑六方如來證不虛三業專心無雜亂百寶蓮華應時見。法照禪師淨土五會法事讚云萬行之中爲急要迅速無過淨土門不但本師金口說十方諸佛共傳證。

私問曰何故六方諸佛證誠唯局念佛一行乎答曰若依善導意念佛是彌陀本願故證誠之餘行不爾故無之也問曰若依本願證誠念佛者雙卷觀經等說念佛時何不證誠乎答曰解有二義一解云雙卷觀經等中雖說本願念佛而兼明餘行故不證誠此經一向純說念佛故證誠之。二解云彼雙卷等中雖無證誠之言此經已有證誠例此思彼於彼等經中所說念佛亦應有證誠之義文在於此經義通於彼經故天台十疑論云又阿彌陀經大無量壽經鼓音聲陀羅尼經等云釋迦佛說此經時有十方世界各恆河沙諸佛舒其舌徧覆三千世界證誠一切衆生念阿彌陀佛乘佛本願大悲願力故決定得生極樂世界。

六方諸佛護念念佛行者之文

觀念法門云又如彌陀經說若有男子女人七日七夜及盡一生一心專念阿彌陀佛願往生者此人常得六方恆河沙等佛共來護念故名護念經。護念經意者亦不令諸惡鬼神得

一本意上無經字(49)

便亦無橫病橫灰橫有厄難一切灾邪自然消散。除不至心。往生禮讚云若稱佛往生者常為六方恆河沙等諸佛之所護念故名護念經。今既有此增上誓願可憑諸佛子等何不勵意去也。

私問曰唯有六方如來護念行者如何。答曰不限六方如來彌陀觀音等亦來護念。故往生禮讚云十往生經云若有衆生念阿彌陀佛願往生者彼佛即遣二十五菩薩擁護行者。若行若坐若住若臥若晝若夜一切時一切處不令惡鬼惡神得其便也。又如觀經云若稱禮念阿彌陀佛願往生彼國者彼佛即遣無數化佛無數化觀音勢至菩薩護念行者。復與前二十五菩薩等百重千重圍繞行者不問行住坐臥一切時處若晝若夜常不離行者。今既有斯勝益可憑願諸行者各須至心求往。又觀念法門云又如觀經下文若有人至心常念阿彌陀佛及二菩薩觀音勢至常與行人作勝友知識隨逐影護。又云又如般舟三昧經行品中說云佛言若人專行此念彌陀佛三昧者常得一切諸天及四天王龍神八部隨逐影護愛樂相見永無諸惡鬼神災障厄難橫加惱亂。具如護持品中說。又云除入三昧道場日別念彌陀佛一萬畢命相續者即蒙彌陀加念得除罪障。又蒙佛與聖衆常來護念。既蒙護念即得延年轉壽。

釋迦如來以彌陀名號懇勸付屬舍利弗等之文

阿彌陀經云佛說此經已舍利弗及諸比丘一切世間天人阿脩羅等聞佛所說歡喜信受作禮而去。

善導法事禮釋此文云世尊說法時將了懇勸付屬彌陀名。五濁增時多疑謫。道俗相嫌不用聞。見有修行起瞋毒。方便破壞競生怨。如此生旨關提輩毀滅頓教永沈淪。超過大地微塵劫未可得離三途身。大衆同心皆懺悔所有破法罪因緣。

私云凡案三經意諸行之中選擇念佛以為旨歸。先雙卷經中有三選擇一選擇本願。二選擇讚歎。三選擇匪教。一選擇本願者念佛是法藏比丘於二百一十億土中所選擇往生之行也。細旨見上。故云選擇本願也。二選擇讚歎者上三輩中雖舉菩提心等餘行釋迦即不讚嘆餘行唯於念佛而讚歎云當知一念無上功德。故云選擇讚歎也。三選擇匪教者又上雖舉餘行諸善釋迦選擇唯重念佛一法。故云選擇匪教也。次觀經中又有三選擇一選擇攝取。二選擇化讚。三選擇付屬。一選擇攝取者觀經之中雖明定散諸行彌陀光明唯照念佛衆生攝取不捨。故云選擇攝取也。二選擇化讚者下品上生人雖有聞經稱佛二行彌陀化佛選擇念佛云汝稱佛名故諸罪消滅我來迎汝。故云選擇化讚也。

有一本作令

俱一本作共

欲速一本作速欲

三選擇付屬者又雖明定散諸行唯獨付屬念佛一行。故云選擇付屬也。次阿彌陀經中有一選擇。所謂選擇證誠也。已於諸經中雖多說往生之諸行。六方諸佛於彼諸行而不證誠。至此經中說念佛往生。六方恆沙諸佛各舒舌覆大千說誠實語而證誠之。故云選擇證誠也。加之般舟三昧經中又有一選擇。所謂選擇我名也。彌陀自說言欲來生我國者常念我名莫有休息。故云選擇我名也。本願攝取我名化讚此之四者是彌陀選擇也。讚歎願教付屬此之三者是釋迦選擇也。證誠者六方恆沙諸佛之選擇也。然則釋迦彌陀及十方各恆沙等諸佛同心選擇念佛一行。餘行不爾。故知三經俱選念佛以為宗致耳。計也。夫欲速離生死二種勝法中且闍聖道門。選入淨土門。欲入淨土門。正雜二行中且拋諸雜行。選應歸正行。欲修於正行。正助二業中猶倚於助業。選應專正定。正定之業者即是稱佛名。稱名必得生。依佛本願故。問曰華嚴天台真言禪門三論法相諸師各造淨土法門章疏。何不依彼等師唯用善導一師乎。答曰彼等諸師各皆雖造淨土章疏。而不以淨土為宗。唯以聖道而為其宗。故不依彼等諸師也。善導和尚偏以淨土而為宗。而不以聖道為宗。故偏依善導一師也。問曰淨土祖師其數又多。謂弘法寺迦才慈愍三藏等是也。何不依彼等諸師唯用善導一師哉。答曰此等諸師雖宗淨土。未發三昧善導

一本師下無而字
 一本師下無而字
 一本雖下無是字

一本盡下
 有十方二
 (53)

和尚是三昧發得之人也。於道既有其證。故且用之。問曰若依三昧發得者。懷感禪師亦。是三昧發得之人也。何不用之。答曰善導是師也。懷感是弟子也。故依師而不依弟子也。況師資之釋其相違甚多。故不用之。問曰若依師而不依弟子者。道綽禪師者是善導和尚之師也。抑又淨土祖師也。何不用之。答曰道綽禪師者。雖是師。未發三昧。故自不知。往生得否。問善導曰。道綽念佛得往生否。導令辨一莖蓮華置之佛前。行道七日不萎。悴即得往生。依之七日果然華不萎黃。綽歎其深詣。因請入定觀當得生否。導即入定須臾。報曰師當懺三罪方可往生。一者師嘗安佛像尊像。在檐廊下。自處深房。二者驅使策役。出家人。三者營造屋宇。損傷蟲命。師安於十方佛前懺第一罪。於四方僧前懺第二罪。於一切衆生前懺第三罪。綽公靜思。往答皆曰不虛。於是洗心悔謝。訖而見導。即曰師罪滅矣。後當有白光照燭。是師往生之相也。已上新修 往生傳爰知善導和尚者。行發三昧。力堪師位。解行非凡。將是曉矣。況又時人諺曰佛法東行。已來未有禪師盛德矣。絕倫之譽。不可得而稱者。歟。加之條錄經文義之刻。頗感靈瑞。屢預聖化。既蒙聖冥。加然造經科文。舉世而稱。證定疏。人貴之如佛經法。即彼疏第四卷。奧云敬白一切有緣知識等。余既是生。凡夫智慧淺短。然佛教幽微。不敢輒生異解。遂即標心結願。請求靈驗。方可造心。南無歸命盡。

編一本作通
以下皆同

虛空徧法界一切三寶釋迦牟尼佛阿彌陀佛觀音勢至彼土諸菩薩大海衆及一切莊嚴相等。某今欲出此觀經要義。楷定古今。若稱三世諸佛釋迦佛阿彌陀佛等大悲願意者。願於夢中得見。如上所願一切境界諸相。於佛像前結願。已日別誦阿彌陀經三遍。念阿彌陀佛三萬遍。至心發願。即於當夜見西方空中如上諸相境界悉皆顯現。雜色寶山百重千重種種光明下照於地。地如金色。中有諸佛菩薩或坐或立或語或嘿或動身手或住不動者。既見此相合掌立觀。量久乃覺。覺已不勝欣喜。於即條錄義門。自此已後每夜夢中常有一僧而來指授玄義科文。既了夏不復見。後時脫本竟已復夏。至心要期七日。日別誦阿彌陀經十遍。念阿彌陀佛三萬遍。初夜後夜觀想彼佛國土莊嚴等相。誠心歸命一如上法。當夜即見三具轆轤道邊獨轉。忽有一人乘白駱駝來前見勸師當努力決定往生莫作退轉。此界穢惡多苦不勞貪樂。答言大蒙賢者好心視誨。某畢命爲期不敢生於懈怠之心。云云第二夜見阿彌陀佛身真金色在七寶樹下金蓮華上坐。十僧圍繞亦各坐一寶樹下。佛樹上乃有白衣挂繞。正面向西合掌坐觀。第三夜見兩幢杆極大高顯。懸五色道路縱橫人觀無礙。既得此相已即便休止。不至七日。上來所有靈相者本心爲物不爲己身。既蒙此相不敢隱藏。謹以申呈。義後被聞於末代。願使含靈聞之。生信有識。

機一本作通
極字一本軒下無

一本恐下有
爲不二字

觀者西歸。以此功德迴施衆生。悉發菩提心。慈心相向。佛眼相看。菩提眷屬。作真善知識。同歸淨國。共成佛道。此義已請證定。竟一句一字不可加減。欲寫者一如經法。應知。上已靜以善導觀經疏者是西方指南行者目足也。然則西方行人必須珍敬矣。就中每夜夢中有僧指授玄義。僧者恐是彌陀應現。爾者可謂此疏是彌陀傳說。何況大唐相傳云善導是彌陀化身也。爾者可謂又此文是彌陀直說。既云欲寫者一如經法。此言誠乎。仰討本地者四十八願之法王也。十劫正覺之唱。有憑于念佛。俯訪垂迹者專修念佛之導師也。三昧正受之語。無疑于往生。本迹雖異。化導是一也。於是貧道昔披閱茲典。粗識素意。立舍餘行。云歸念佛。自其已來。至于今日。自行化他。唯釋念佛。然則希問津者。示以西方通津。適尋行者。誨以念佛。別行信之者多。不信者尠。當知淨土之教。叩時機而當行運也。念佛之行。感水月而得昇降也。而今不圖蒙仰辭謝無地。仍今愁集念佛要文。剩述念佛要義。唯願命旨不顧不敏。是即無慚無愧之甚也。庶幾一經高覽之後。埋于壁底。莫遺意前。恐令破法之人。墮於惡道也。

選擇本願念佛集

二 淨土宗略要文

五六

淨土宗略要文

道綽禪師立聖道淨土二門判一代聖教而捨聖道正歸淨土之文

安樂集云問曰一切衆生皆有佛性。遠劫以來應值多佛。何因至今仍自輪迴生處不出火宅。答曰依大乘聖教良由不得二種勝法以排生處。是以不出火宅。何者爲二。一謂聖道。二謂往生淨土。其聖道一種今時難證。一由去大聖遙遠。二由理淺解微。是故大集月藏經云我末法時中億億衆生起行修道未有一人得者。當今末法現是五濁惡世。唯有淨土一門可通入路。是故大經云若有衆生縱令一生造惡。臨命終時十念相續稱我名字若不生者不取正覺。又復一切衆生都不自量。若據大乘真如實相第一義空曾未措心。若論小乘修入見諦修道乃至那含羅漢斷五下除五上無問道俗未有其分。縱有人天果報皆爲五戒十善。能招此報。然持得者甚希。若論起惡造罪何異暴風驟雨。是以諸佛大悲勸歸淨土。縱使一形造惡但能繫意專精常能念佛一切諸障自然消除定得往生。何不思量都無去心也。

善導和尚意釋尊出世本意唯說念佛往生之文

法事讚云如來出現於五濁隨空方便化羣萌。或說多聞而得度。或說小解證三明。或教福慧雙除障。或教禪念坐思量。種種法門皆解脫。無過念佛往西方。上盡一形至十念。三念五念佛來迎。直爲彌陀弘誓重。致使凡夫念卽生。

善導和尚立正雜二行捨雜行歸正行之文

觀無量壽經疏第四卷釋上品上生三心中深心云就行立信者然行有二種。一者正行。二者雜行。言正行者專依往生經行。行者是名正行。何者是也。一心專讀誦此觀經彌陀經無量壽經等。一心專注思想觀察憶念彼國二報莊嚴。若禮卽一心專禮彼佛。若口稱卽一心專稱彼佛。若讚歎供養卽一心專讚歎供養。是名爲正。又就此正中復有二種。一者一心專念彌陀名號。行住坐臥不問時節久近。念念不捨者是名正定之業。順彼佛願故。若依禮誦等卽名爲助業。除此正助二行已外。自餘諸善悉名雜行。若修前正助二行。心常親近憶念不斷。名爲無間也。若行後雜行。卽心常間斷。雖可迴向得生。衆名疎雜之行也。

善導和尚判正雜二行得失之文

往生禮讚云若能如上念念相續。畢命爲期者。十卽十生。百卽百生。何以故。無外雜緣得正念故。與佛本願得相應故。不違教故。隨順佛語故。若欲捨專修雜業者。百時希得一二千時。

希得三五。何以故。乃由雜緣亂動。失正念故。與佛本願不相應故。與教相違故。不順佛語故。係念不相續故。憶想間斷故。迴顧不愆。重真實故。貪瞋諸見煩惱來間斷故。無有慚愧懺悔心故。又云。余比日自見聞諸方道俗。解行不同。專雜有異。但使專意作者。十即十生。修雜不至心者。千中無一。

善導和尚意三部經共唯明念佛往生之文

觀經疏第三云。自餘衆行。雖名是善。若比念佛者。全非比技也。是故諸經中處處廣讚念佛功能。如無量壽經四十八願中。唯明專念彌陀名號得生。又如彌陀經中。一日七日專念彌陀名號得生。又十方恆沙諸佛證誠不虛也。又此經定散文中。唯標專念名號得生。此例非一也。

彌陀如來唯以名號爲往生本願之文

往生禮讚云。如無量壽經云。若我成佛。十方衆生稱我名號。下至十聲。若不生者。不取正覺。彼佛今現在。世成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生。

念佛利益之文

無量壽經下卷云。佛語彌勒。其有得聞彼佛名號。歡喜踊躍。乃至一念。當知此人爲得大利。

則是具足無上功德。往生禮讚云。其有得聞彼彌陀佛名號。歡喜至一念。皆當得生。彼

私云。一念既得無上功德。當知十念即十無上功德。百念即百無上功德也。應知。

末法萬年後除行悉滅時釋迦如來以慈悲特留念佛之文

無量壽經下卷云。當來之世。經道滅盡。我以慈悲哀愍。特留此經。止住百歲。其有衆生。值此經者。隨意所願。皆可得度。往生禮讚云。萬年三寶滅。此經住百年。爾時聞一念。皆當得生。彼

以念佛爲多善根以諸行爲少善根之文

阿彌陀經云。不可以少善根福德因緣得生彼國。舍利弗。若有善男子善女人。聞說阿彌陀佛執持名號。若一日。若二日。若三日。若四日。若五日。若六日。若七日。一心不亂。其人臨命終時。阿彌陀佛與諸聖衆。現在其前。是人終時。心不顛倒。即得往生阿彌陀佛極樂國土。善導釋此文云。極樂無爲涅槃界。隨緣雜善。恐難生。故使如來選要法教。念彌陀專復專。七日七夜。心無間。長時起行。倍皆然。臨終聖衆持花現身。心踊躍坐金蓮。

六方諸佛等護念佛行者之文

觀念法門云。又如彌陀經說。若有男子女人。七日七夜。及盡一生。一心專念阿彌陀佛。願往生者。此人常得六方恆河沙等佛。共來護念。故名護念經。護念意者。亦不令諸惡鬼神得侵。

亦無橫病橫灰橫有厄難一切災障自然消散。除不至心。往生禮讚云。十往生經云。若有衆生念阿彌陀佛。願往生者。彼佛即遣二十五菩薩擁護行者。若行若坐。若住若臥。若晝若夜。一切時一切處。不令惡鬼惡神得其便也。又如觀經云。若稱禮念阿彌陀佛。願往生彼國者。彼佛即遣無數化佛。無數化觀世音。勢至菩薩。護念行者。復與前二十五菩薩等百重千重圍遶行者。不問行住坐臥一切時處。若晝若夜。常不離行者。今既有斯勝益。可憑願諸行者各須至心求往。

釋尊以彌陀名號慇懃付屬舍利弗之文

阿彌陀經云。佛說此經已。舍利弗及諸比丘。一切世間天人阿修羅等。聞佛所說歡喜信受。作禮而去。善導法事讚釋此文云。世尊說法時。將了慇懃付屬彌陀名。五濁增時多疑謫。道俗相嫌不用聞。見有修行起瞋毒。方便破壞競生怨。如此生旨闡提輩。毀滅頓教永沈淪。超過大地微塵劫。未可得離三途身。大衆同心皆懺悔。所有破法罪因緣。

彌陀光明不照餘行者唯照念佛行者之文

觀無量壽經云。無量壽佛有八万四千相。一一相各有八万四千隨形好。一一好復有八万四千光明。一一光明遍照十方世界。念佛衆生攝取不捨。往生禮讚云。彌陀身色如金山。相

好光明照十方。唯有念佛蒙光攝。當知本願最爲強。

不讚雜善唯歎念佛行者之文

觀無量壽經云。若念佛者。當知此人是人中分陀利花。觀世音菩薩大勢至菩薩爲其勝友。當坐道場。生諸佛家。彼經疏云。從若念佛者。下至生諸佛家。已來正顯念佛三昧功能超絕。實非雜善得爲比類。卽有其五。一。明專念彌陀佛名。二。明指讚能念之人。三。明若能相續念佛者。此人甚爲希有。更無物可以方之。故引分陀利爲喻。言分陀利者。名人中好花。亦名希有花。亦名人中上上花。亦名人中妙好花。此花相傳名蔡花。是若念佛者。卽是人中好人人中妙好人人中上上人人中希有人人中最勝人也。

釋迦如來不付屬餘行唯以念佛付屬阿難之文

觀無量壽經云。佛告阿難。汝好持是語。持是語者。卽是持無量壽佛名。彼經疏釋此文云。從佛告阿難。汝好持是語。已下。正明付屬彌陀名號。流通於退代。上來雖說定散兩門之益。望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名。

私云。此中定者。始自日想觀以來十三觀是也。散者。初三福業後九品業是也。此定散二善中。雖說諸往生行。佛本願者。唯在名號。故釋迦如來唯以名號付屬阿難尊者也。

念佛行者必當具足三心之文

往生禮讚云必欲生彼國土者如觀經說者具三心必得往生何等爲三。一者至誠心所謂身業禮拜彼佛口業讚歎稱揚彼佛意業專念觀察彼佛。凡起三業必須真實。故名至誠心。二者深信心即是真實信心。信知自身是具足煩惱凡夫善根薄少流轉三界不出火宅。今信知彌陀本弘誓願及稱名號下至十聲一聲等定得往生乃至一念無有疑心。故名深信心。三者迴向發願心所作一切善根悉皆迴願往生。故名迴向發願心。具此三心必得生也。若少一心即不得生。

不簡下智破戒等依彌陀本願唯念名號即得往生之文

法照禪師五會法事讚云彼佛因中立弘誓聞名念我總來迎不簡貧窮將富貴不簡下智與高才不簡多聞持淨戒不簡破戒罪根深但使迴心多念佛能令瓦礫變成金。

修行淨業時節延促之文

觀經疏第四云上盡一形下至一日一時一念等或從一念十念至一時一日一形大意者一發心已後誓畢此生無有退轉唯以淨土爲期。

出漢語錄了惠曰此一條者元久元年二月十七日上人爲伊豆山源延所集也。

三 往生大要抄

往生大要抄

いまわが淨土宗には二門をたて、釋迦一代の説教をおさむるなり。いはゆる聖道門。淨土門なり。はじめ花嚴阿含よりをはり法華涅槃にいたるまで。大小乗の一切の諸經にとくとところのこの娑婆世界にありながら。斷迷開悟のみちを。聖道門とは申すなり。是につきて。大乘の聖道あり。小乗の聖道あり。大乘に二あり。即佛乘と菩薩乘と也。小乘に二あり。即聲聞と緣覺との二乘なり。これをすべて四乗となづく。佛乘とは。即身成佛の教なり。眞言達磨天台花嚴等の四宗にあかすところなり。すなはち眞言宗には。父母所生身速證大覺位と申して。この身ながら。大日如來のくらしいにのぼるとならふ也。佛心宗には。前佛後佛以心傳心とならひて。たゞちに人の心をさしてほとけと申なり。かるがゆへに即心是佛の法となづけて。成佛とは申さぬなり。この法は。釋尊入滅の時。涅槃經をときをはりてのち。たゞ一偈をもちて。迦葉尊者に付囑し給へる法なり。天台宗には。煩惱即菩提。生死即涅槃と觀じて。觀心にてほとけになること

ならふ也。八歳の龍女が南方無垢世界にしてすみやかに正覺をなりしその證なり。花嚴宗には初發心時便成正覺とてまた即身成佛とならふなり。これらの宗にはみな即身頓證のむねをのぶれば佛乘となづくる也。つぎに菩薩乘といは歴劫修行成佛の教なり。三論法相の二宗にならふところなり。すなはち三論宗には八不中道の無相の觀に住してしかも心には四弘誓願ををこし。身には六波羅蜜を行じて三阿僧祇に菩薩の行を修してのちほとけになると申す也。法相宗には五重唯識の觀に住してしかも四弘誓願ををこし。六度を行じて三祇劫をへて佛になると申す也。これらを菩薩乘となづく。つぎに緣覺乘といは飛花落葉をみてひとり諸法の無常をさとる。あるひは十二因縁を觀じてときは四生をそきは百劫にさとりをひらくなり。つぎに聲聞乘といははじめ不淨數息を觀するよりをはり四諦の觀にいたるまで。ときは三生をそきは六十劫に。四向三果のくらゐをへて大阿羅漢の極位にいたる也。此二乗の道は成實俱舍の兩宗にならふところ也。又聲聞につきて戒行をそなふべし。比丘は二百五十戒を受持し。比丘尼は五百戒を受持するなり。これを五篇七聚の戒となづくる也。又沙彌沙彌尼の十戒。式沙摩尼の六法。優婆塞優婆夷の五戒。みなこれ

律宗の中にあかすところ也。をよそこの四乗の聖道は大小乗をえらばず。われらの身にたへ。時にかなひたる事にてはなき也。もし聲聞のみちにをもむかば。二百五十戒たもちがたく。苦集滅道の觀成じがたし。もし緣覺の觀をもとむとも。飛花落葉のさと。十二因縁の觀。ともに心をもよばぬ事也。又菩薩の行にをむては。三聚十重の戒發得しがたく。四弘六度の願行成就しがたし。されば身子は六十劫まで修行して。乞眼の惡縁にあひて。たちまちに菩薩の廣大の心をひるがへしき。いはんや末法のこのごろをや。下根のわれらをや。たとひ即身頓證の理を觀ずとも。眞言の入我々入。阿字本不生の觀。天台の三觀六即中道實相の觀。花嚴宗の法界唯心の觀。佛心宗の即心是佛の觀。理はふかく。解はあさし。かるがゆへに末代の行者。その證をうることは。めてかたし。このゆへに道綽禪師は。聖道的一種は。今時は證しがたしとのたまへり。すなはち大集月藏經をひきて。そのありさまをあかせり。こまかにのぶるにをよばず。つぎに淨土門は。まづこの娑婆世界をいとひすて。いそぎてかの極樂淨土にひま。れて。かのくに。して佛道を行ずる也。しかればかつ。淨土にいたるまでの願行。をたて。往生をとぐべき也。かの國にひまる。事は。すべて機の善惡をえらばず。た

とほとけのちかひを信じ信ぜざるによる五逆十惡をつくれるものもたゞ一念十念に往生するはずなはちこのことなり也。このゆへに道綽はたゞ淨土の一門のみありて通入すべきみちなりと釋し給へり。通じているべしといふにつきてわたくしに意うるに二つの心あるべし。一にはひろく通じ。二にはとをく通ず。ひろく通ずといは五逆の罪人をあげてなを往生の機におさむいはんや餘の輕罪をや。いかにいはんや善人をやと意えつれば往生のうつはものなきらばるゝものなし。かるがゆへにひろく通ずといふ也。とをく通ずといは末法万年のち法滅百歲までこの教とまりてその時きゝて一念するみな往生すといへり。いはんや末法のなかをや。いかにいはんや正法像法をやと意得つれば往生の時にもるゝ世なし。かるがゆへにとをく通ずといふなり。ければこの心生死をはなれんとおもはんものは難證の聖道をすてゝ易往の淨土をねがふべき也。又この聖道淨土をば難行道易行道となづけたり。たとへをとりてこれをいふに難行道とはさかしきみちをかちよりゆかんがごとし。易行道とは海路をふねよりゆくがごとしといへり。しかるに目しる足なえたらんものは陸地にはむかふべからず。たとふねにのりてのみむかひのき

しにはつくべきなり。しかるにこのごろのわれらは智惠のまなこしむ。行法のあしなえたるともがら也。聖道難行のさがしきみちにはすべてのぞみをたつべし。たゞ彌陀本願のふねにのりてのみ生死のうみをわたりて極樂のきしにはつくべきなり。いまこのふねといはずなはち彌陀の本願にたとふる也。其本願といは四十八願也。そのなかに第十八の願をもて衆生の行とさだめたるなり。二門の主旨略してかのごとし。聖道の一門をさしをきて淨土の一門にいらんとおもはん人は道綽善導の釋をもて所依の三部經を習ふべきなり。さきには聖道淨土の二門を分別して淨土門にいるべきむねを申ひらきつ。いまは淨土の一門につきて修行すべきやうを申すべし。それ淨土に往生せんとおもはゞ心と行とのふたつ相應すべきなり。かるがゆへに善導の釋にたゞしその行のみあるは行すなはちひとりにしてまたいたるところなし。たゞその願のみあるは願すなはちむなくしてまたいたるところなし。かならず願と行とあひたすけてなすところみな剋すといへり。をよそ往生のみにかぎらず。聖道門の得道をもとめんにも。心と行とを具すべしといへり。發心修行となづくるこれ也。今此淨土宗に善導のごときは安心起行となづけたり。まづ

その安心といは、觀無量壽經にといていはく、若衆生ありてかのくに、むまれむとねがはんものは、三種の心をこして即往生すべし、なにをか三とする。一には至誠心、二には深心、三には迴向發願心也。三心を具するものは、かならずかのくにむまるといへり。善導和尚の觀經の疏ならびに往生禮讚の序に、此三心を釋し給へり。一に至誠心といは、まづ往生禮讚の文をいださば、一には至誠心、いはゆる身業にかのほとけを禮拜せんにも、口業にかのほとけを讚嘆稱揚せんにも、意業にかの佛を專念觀察せんにも、をよそ三業ををこすには、かならず眞實をもちよ。かるがゆへに至誠心となづくといへり。つぎに觀經の疏の文をいださば、一に至誠心といは、至といは眞也。誠といは實なり。一切衆生の身口意業の所作の解行、かならず眞實心の中になすべき事をあかさんとおもふ。外には賢善精進の相を現じて、内には虚假をいだく事なかれ。善の三業ををこさば、かならず眞實心の中になすべし。内外明闇をえらばず、みな眞實をもちよといへり。此二つの釋を、わたくしに料簡するに、至誠心といは、眞實の心なり。その眞實といは、内外相應の心也。身にふるまひ、口にいひ、意におもはん事、みな人めをかざる事なく、まことをあらはす也。しかるを人つねに、この至

誠心を、熾盛心と意得て、勇猛強盛の心ををこすを、至誠心と申すは、此釋の心にはたがふ也。文字もかはり、意もかはりたるものを、さればとてその猛利の心は、すべて至誠心をそむくと申にはあらず。それは至誠心のうへの熾盛心にてこそあれ、眞實の至誠心を地にして、熾盛なるはすぐれ、熾盛ならぬはあとるにてある也。是につきて九品の差別までもこゝろうべき也。されば善導の觀經の疏に、九品の文を釋する下に、一々の品ごとに、辨定三心以爲正因とさだめて、此三心は九品に通ずべしと釋し給へり。惠心も是をひきて、禪師の釋のごときは、理九品に通ずべしとこそはしるされたれ。此三心の中の至誠心なれば、至誠心すなはち九品に通ずべき也。又至誠心は、深心と迴向發願心とを體とす。この二をはなれては、なによりてか。至誠心をあらはすべき、ひろくほかをたづぬべきにあらず。深心も迴向發願心もまことなるを至誠心とはなづくる也。三心すべてに九品に通ずべしと意えてのうへには、その差別のあるやうをこゝろうるに、三心の淺深強弱によるべき也。かるがゆへに上品上生には、經に精進勇猛なるがゆへにとしき。釋には、日數すくなしといへども、作業はげしきがゆへにとしき。又上品中生をば、行業やゝよはくしてと釋し、上品下生をば、行

業こわからずなど釋せられたれば三心につきて。こわきもよはきもあるべしとこそこゝろえられたれ。よはき三心具足したらん人は。くらゐこそさがらんずれ。なを往生はうたがふべからざる也。それに強盛の心をこそさずば。至誠心かけて。ながく往生すべからずと意えて。みだりに身をもくだし。あまさへ人をもかろしむる人々の不便におぼゆる也。さらなり強盛の心をこらんは。めでたき事なり。善導の十徳の中に。はじめの至誠念佛の徳をいだすにも。一心に念佛して。ちからのつくるにあらざればやまず。乃至寒冷にもまたあせをながす。この相状をもて至誠をあらはすなどあるなれば。たれもさこそははげむべけれ。ただしこの定なるをのみ至誠心と意えて。是にたがはんをば至誠心かけたりといはんには。善導のごとく至誠心至極して。勇猛ならん人ばかりぞ往生はとぐべき。われらがごときの匪弱の心にては。いかんが往生すべきと臆せられぬべき也。かれは別して善導一人の徳をほむるにてこそあれ。これは通じて一切衆生の往生を決するにてあれば。たくらふべくもなき事也。所詮はただわれらがごときの凡夫をのく分につけて。強弱の眞實の心をこそす。至誠心となづけたるこそ。善導の釋の意はみえたれ。文につきてこそまかに意うれ

ば。外には賢善精進の相を現じ。内には虚假をいやくことなかれといふは。内には愚にして。外には賢相を現じ。内には惡をのみつくりて。外には善人の相を現じ。うちには懈怠にして。ほかには精進の相を現ずるを。虚假とは申す也。外相の善惡をばかへりみず。世間の謗譽をばわきまへず。内心に穢土をもいとひ。淨土をもねがひ。惡をもとめ。善をも修して。まめやかに佛の意にかなはん事をおもふを。眞實とは申也。眞實は虚假に對することば也。眞と假と對し。虚と實と對するゆへなり。この眞實虚假につきては。しく分別するに。四句の差別あるべし。一には外をかざりて内にはむなしき人。二には外をもかざらず内もむなしき人。三には外はむなしく見えて内はまことある人。四には外にもまことをあらはし内にもまことある人。かくのごときの四人の中には。前の二人をばともに虚假の行者といふべし。後の二人をばともに眞實の行者といふべし。しかれば。たゞ外相の賢愚善惡をばえらばず。内心の邪正迷悟によるべき也。をよその眞實の心は。人ごとに具しがたく。事にふれてかけやすき心ばへなり。をろかにはかなしといましめられたるやうもあること。はり也。無始よりこのかた今身にいたるまで。おもひならはして。さしもひさしく心をはなれぬ名利の

煩惱なればたゞんとするにやすらかに離がたきなりけりと。おもひゆるさるゝか
 たもあれども。又ゆるしはんべるべき事ならねば。わが心をかへりみて。誠をなすべ
 き事なり。しかるにわが心の程もおもひしられ。人のうへをも見るに。この人目をか
 ざる心ばへのいかにも。おもひはなれぬこそ。返く心うくかなしくおぼゆれ。
 この世ばかりをふかく執する人は。たゞまなこのまへのほまれ。むなしき名をもあ
 げんとおもはんをばいふにたらぬ事にてをきつ。うき世をそむきて。まことのみに
 をもむきたる人々の中にも。かへりてはかなくよしなき事かなとおぼゆる事もあ
 る也。むかしこの世を執する心のふかゝりしなごりにて。ほどくにつけたる名利
 をふりすてたるばかりを。ありがたくいみじき事におもひて。やがてそれを。この世
 さまにも心のいろのうるさきに。とりなしてさとりあさき世間の人の心のそこを
 ばしらず。うへにあらはるゝすがた事がらばかりを。たとかういみじかるをのみ本
 意におもひて。ふかき山路をたづね。幽なるすみかをしむるまでも。ひとすぢに心の
 しづまらんためとしもおもはて。をのづからたづねきたらん人。もしはつたへきか
 ん人のおもはん事をのみさきだて。まがきのうち庭のこたち。菴室のしつらひ。道

場の莊嚴など。たとへめてたく。心ぼそく物あはれならむ事。がらののみ。ひきかまへ
 んと執するほどに。罪の事も。ほとけのおぼしめさん事。もかへりみず。人のそしり
 にならぬ様をのみ。おもひいとなむ事。よりほかには。おもひまじふる事もなくて。ま
 ことしく往生をねがふべきかたをば。思もいれぬ事。などのあるが。やがて至誠心かけ
 て。往生せぬ心ばへにてある也。又世をそむきたる人こそ。中くひじり名聞もあり
 て。さやうにもあれ。世にありながら往生をねがはん人は。此心は何ゆへにかあるべ
 きと申す人のあるは。なをこまやかに心えざる也。世のほまれをおもひ。人めをかざ
 る心は。なに事にもわたる事なれば。ゆめまぼろしの榮花重職をおもふのみには。か
 ぎらぬ事にてある也。中々在家の男女の身にて。後世をおもひたるをば。心ある事の
 いみじくありがたきとこそは。人も申す事なれば。それにつけて。外をかざりて人に
 いみじがられんとおもふ人のあらんも。かたかるべくもなし。まして世をすてたる
 人などに。むかひては。さなからん心をも。あはれをしりがほにあひしらはんために。
 浮世のおそろしさ。此世のいとほしさ。などは。申すべきぞかし。又か様に申せば。ひ
 とへに。この世の人めはいかにもあり。なんとて。人のそしりをもかへりみず。ほかを

かざらねばとて心のまゝにふるまふがよきと申すにてはなきなり。菩薩の譏嫌戒とて人のそしりになりぬべき事をばなせそこそいましめられたれ。さればはうにまかせてふるまへば放逸とてわろき事にてあるなり。それに時にのぞみたる譏嫌戒のためばかりにいさゝか人めをつゝむかたはわざともさこそあるべき事を人目のみ執してまことのかたをもかへりみず。往生のさはりになるまでにひきなさるゝ事の返くもくちおしき也。譏嫌戒となづけてやがて虚假になる事もありぬべし。眞實といひなしてあまり放逸なる事もありぬべし。これをかまへてかまへてよくくゝ意えとくべし。詞なをたらぬ心ちする也。又此眞實につきて。自利の眞實利他の眞實あり。又三界六道の自他の依正をいとひすてゝ。かろしめいやしめんにも。阿彌陀佛の依正二報を。禮拜讚嘆憶念せんにも。をよそ厭離穢土欣求淨土の三業にわたりて。みな眞實なるべきむね。疏の文につぶさ也。その文しげくして。ことごとく出すことあたはず。至誠心のありさま。畧してかくのごとし。

二に深心といはまづ禮讚の文にはく。二者深心すなはち眞實の信心なり。自身は是煩惱を具足せる凡夫なり。善根薄少にして。三界に流轉して。火宅をいでずと信知

して。いま彌陀の本弘誓願の名號を稱する事。下十聲一聲にいたるまで。さだめて往生する事をうと信知して。乃至一念もうたがふ心ある事なかれ。かるがゆへに深心となづくといへり。次に觀經の疏の文にはく。二に深心といは。すなはちこれ深信の心なり。又二種あり。一には決定してふかく自身は現に是罪惡生死の凡夫也。曠劫より此かた常沒常流轉して。出離の縁ある事なしと信ぜよ。二には決定してふかく彼阿彌陀佛の四十八願をもて衆生を攝受し給ふ事うたがひなくおもんばかりなれば。かの願力に乗じて。さだめて往生する事をうと信じ。又決定してふかく釋迦佛。この觀經の三福九品定散二善をときてかのほとけの依正二報を證讚して。人をして欣慕せしめ給ふ事を信じ。又決定してふかく彌陀經の中に。十方恒沙の諸佛の一切の凡夫決定してむまるゝ事をうと證勸し給へり。ねがはくは一切の行者。一心にたゞ佛語を信じて身命をかへりみず。決定して依行して。佛の捨しめ給はん事をば即すて。ほとけの行ぜしめ給はん事をば即行じ。ほとけの去しめ給はんところをば即され。これを佛教に隨順し。佛意に隨順すとなづけ。これを眞の佛弟子となづく。又深心を深信といは。決定して自心を建立して。教に順じて修行して。ながく疑錯を

のぞきて一切の別解別行異學異見異執のために退失し傾動せられざれといへり。わたくしに此二つの釋を見るに文に廣畧あり言に同異ありといへどもまづ二種の信心をたつる事はそのおもむきこれひとつなりすなはち二の信心といははじめにわが身は煩惱罪惡の凡夫也火宅をいてず出離の縁なしと信ぜよといひつぎには決定往生すべき身なりと信じて一念もうたがふべからず人にもいひさまたげらるべからずなどいへる前後のことば相違して意得がたきに似たれども心をとめて是を案ずるにははじめにはわが身のほどを信じのちにはぼとけの願を信ずる也たゞしのちの信心を決定せしめんがためにはじめの信心をばあぐる也そのゆへはもし初のわが身を信ずる様をあげずしてたゞちに後のほとけのちかひばかりを信ずべきむねをいだしたらましかばもろくの往生をねがはん人雜行を修して本願をたのまざらんをばしばらくをくまさしく彌陀の本願の念佛を修しながらもなを心にもし貪欲瞋恚の煩惱をもをこし身にをのづから十惡破戒等の罪業をもをかす事あらばみだりに自身を怯弱して返りて本願を疑惑しなまし。まことに此彌陀の本願に十聲一聲にいたるまで往生すといふ事はおぼろげの人

にてはあらし妄念をもをこさずつみをもつくらぬ人の甚深のさとりををこし強盛の心もちて申したる念佛にてぞあるらんわれらごときのえせものどもの一念十念にてはよもあらしとこそおぼえんもにくからぬ事也是は善導和尚未來の衆生のこのうたがひををこさん事をかへりみて此二種の信心をあげてわれらがごとき煩惱をも断ぜず罪惡をもつくれる凡夫なりともふかく彌陀の本願を信じて念佛すれば十聲一聲にいたるまで決定して往生するむねをば釋し給へる也かくだに釋し給はざらましかばわれらが往生は不定にぞおぼえましあやうくおぼゆるにつけても此釋のことに心にそみておぼえはんべる也されば此義を心えわかぬ人にこそあるめれほとけの本願をばうたがはねどもわが心のわろければ往生はかなはじと申あひたるがやがて本願をうたがふにて侍るなりさやうに申したちなばいかほどまでか佛の本願にかなはずさほどの心こそ本願にはかなひたれとはしり侍るべきそれをわきまへざらんにとりては煩惱を断ぜざらんほどは心のわろさはつさせぬ事にてこそあらんずればいまは往生してんともひたつ世はあるまじ又煩惱を断じてぞ往生はすべきと申すになりなば凡夫の往生とい

ふ事はみなやぶれなんすてに彌陀の本願力といふとも煩惱罪惡の凡夫をばいかにかたすけ給ふべき。えむかへ給はじ物をなど申すになるぞかし。佛の御ちからをばいかほどしるぞ。それに過ぎてほとけの願をうたがふ事はいかゞあるべき。又ほとけにたちあひまいらすとがありなんと申すべき事にてこそあれ。すべてわが心の善惡をはからひて佛の願にかなひかなはざるを意得あはせん事は佛智ならてはかなふまじき事也。されば善導は觀經の疏の一のまきに弘願を釋するに一切善惡の凡夫むまるゝことをうる事は阿彌陀佛の大願業力に乗じて増上縁とせずといふ事なしといひをきてほとけの密意弘深にして教門さとりがたし。三賢十聖もはかりてうかゞふところにあらずいはんやわれ信外の輕毛なり。あへて旨趣を知やとこそは釋し給ひたれば善導だにも十信にだにもいたらぬ身にていかてかほとけの御意をしるべきとこそは。おほせられたれば。ましてわれらが解にてほとけの本願をはからひしる事はゆめ／＼おもひよるまじき事也。たゞ心の善惡をもかへりみず罪の輕重をもわきまへず。意に往生せんとおもひて口に南無阿彌陀佛となへば。こゑについて決定往生のおもひをなすべし。その決定によりて。すな

はち往生の業はさだまる也。かく意をつればやすき也。往生は不定におもへばやがて不定なり。一定とおもへばやがて一定する事なり。所詮は深信といは。かの佛の本願は。いかなる罪人をもすてず。たゞ名號をとなふる事一聲まで。決定して往生すと。ふかくたのみて。すこしのうたがひもなきを申す也。觀經の下品下生を見るに。十惡五逆の罪人も。一念十念に往生すと。かれたり。十惡五逆等貪瞋。四重偷僧謗正法。未曾慚愧悔前愆といへるは。在生の時の惡業をあかす。忽遇往生善知識。急勸專稱彼佛名。化佛菩薩尋聲到。一念傾心入寶蓮といへるは。臨終の時の行相をあかす也。又雙卷經のおくに。三寶滅盡の後の衆生。乃至一念に往生すと。かれたり。善導釋していはく。万年三寶滅。此經住百年。爾時間一念。皆當得生彼といへり。此二つの意をもて。彌陀の本願のひろく攝し。とをくをよぶほどをばしるべき也。重をあげて輕をおさめ。惡人をあげて善人をおさめ。遠きをあげて近きをおさめ。後をあげて前をおさむるなるべし。まことに大悲誓願の深廣なる事。たやすく言をもてのぶべからず。心をとめておもふべき也。抑此ごろ末法にいれりといへども。いまだ百年にみたず。われら罪業をもしといへども。いまだ五逆をつくらず。しかればはるかに百年法滅のの

ちをすくひ給へり。いはんや此ごろをや。ひろく五逆極重のつみをすて給はず。いはんや十惡のわれらをや。たゞ三心を具して。もはら名號を稱すべし。たとひ一念といふともみだりに本願をうたがふ事なかれ。たゞしかやうのことはりを申つれば。つみをもすて給はねば。心にまかせてつみをつくらんもくるしかるまじ。又一念にも一定往生すなれば。念佛はおほく申さずともありなんと。あしく意うる人のいてきて。つみをばゆるし。念佛をば制するやうに申しなすが。返くもあさましく候也。惡をすゝめ善をととむる佛法はいかゞあるべき。されば善導は。貪瞋煩惱をきたしまじへざれといましめ。又念々相續していのちのをはらんを期とせよとをしへ。又日所作は五万六万乃至十万などとこそすゝめ給ひたれ。たゞこれは大悲本願の一切を攝する。なを十惡五逆をももらさず。稱名念佛の餘行にすぐれたる。すてに一念十念にあらはれたるむねを信ぜよと申すにてこそあれ。かやうの事はあしく意うれば。いづかたもひが事になる也。つよく信ずるかたをすゝむれば。邪見ををこし。邪見ををこさせじとこしらふれば。信心つよからずなるが術なき事にて侍る也。かやうの分別は。此ついでには事ながければ。起行の下にてこそまかに申ひらくべし。又ひく

ところの疏の文を見るに。後の信心につゐて二つの心あり。即佛につゐてふかく信じ。經につゐてふかく信ずべきむねを釋し給へるにやと意得らるゝ也。まづほとけにつゐて信ずといは。一には彌陀の本願を信じ。二には釋迦の所説を信じ。三には十方恒沙の證勸を信ずべきなり。經につゐて信ずといは。一には無量壽經を信じ。二には觀經を信じ。三には阿彌陀經を信ずるなり。すなはちはじめに決定してふかく阿彌陀佛の四十八願といへる文は。彌陀を信じ。又無量壽經を信ずる也。つぎに又決定してふかく釋迦佛の觀經といへる文は。釋迦を信じ。觀經を信ずるなり。つぎに決定してふかく彌陀經の中といへる文は。十方諸佛を信じ。又阿彌陀經を信ずる也。又つぎの文に。佛の捨しめ給はんをばすてよといふは。雜修雜行なり。ほとけの行ぜしめ給はん事をば行ぜよといふは。專修正行也。ほとけの去しめたまはん事をばされといふは。異學異解雜緣亂動の處なり。善導のみづからもさへ他の往生の正行をもさふと釋し給へる事。まことにをそるべき物なり。又佛教に隨順すといは。釋迦の御をしへにしたがひ。佛願に隨順すといは。彌陀の願にしたがふ也。佛意に隨順すといは。二尊の御意にかなふなり。いまの文の意は。さきの文に。三部經を信ずべしといへる

にたがはず詮してはたゞ難修をすて、專修を行ずるがほとけの御意にかなふとこそはきこえたれ。又つぎの文に別解別行のためにやぶられざれといふは解異に行異ならん人の難じやぶらんにつゐて念佛をもすて往生をうたがふ事なかれと申す也。さとりことなる人と申すは天台法相等の諸宗の學生これなり。行ことなる人と申すは眞言止觀等の一切の行者是なり。これらはみな聖道門の解行也。淨土門の解行にことなるがゆへに別解別行とはなづけたり。かくのごときの人にいひやぶらるまじきことはりは此文のつぎにこまかに釋し給へり。すなはち人につきて信をたて行につきて信をたつといふ二の信をあげたり。はじめの人につきて信をたつといへるこれなり。その文廣博にしてつぶさに出すことあたはずしかれどもその義至要にしてまたすてがたきによりてことばを畧し意をとりてそのをもむきをあかさば解行不同の人ありて。經論の證據をひきて一切の凡夫往生することをえずといはゞすなはちこたえていへ。なんぢがひくところの經論を信ぜざるにはあらず。みなことごとくあふひて信ずといへども。さらになんぢが破をばうけず。そのゆへは。なんぢがひくところの經論とわが信ずるところの經論とすてに各別の

法門なり。ほとけ此觀經彌陀經等とき給ふ事。時も別にところも別に對機も別に利益も別なり。佛の説教は機にしたがひ。時にしたがひて不同なり。かれは通じて人天菩薩の解行をとき。是は別して往生淨土の解行をとく。即佛の滅後の五濁極増の一切の凡夫決定して往生する事をうととき給へり。われいま一心に此佛教によりて決定して奉行す。たとひなんぢ百千万億ありてむまれずといふとも。たゞわが往生の信心を増長し成就せん。とこたへよといへり。又行者さらに難破の人にむかひてときていへ。なんぢよくきけ。われいまなんぢがために。さらに決定の信相をとかんといひて。はじめは地前菩薩及羅漢辟支佛等より。をはり化佛報佛までたてあげて。たとひ化佛報佛十方にみち／＼て。をの／＼ひかりをかゞやかし。したをいだし。て十方にまほひて。一切の凡夫念佛して一定往生すといふ事は。ひが事なり。信ずべからずとの給はん。にわれこれらの諸佛の所説をきくとも。一念も疑退の心ををこして。かの國にむまるゝ事をえざらん事ををそれじ。なにをもてのゆへにとならば一佛は一切佛也。大悲等同にしてす。こしの差別なし。同躰の大悲のゆへに。一佛の所説はすなはち是一切佛の化なり。こゝをもてまづ彌陀如來。稱我名號下至十聲。若不

生者不取正覺と願じて、その願成就してすてに佛になり給へり。又釋迦如來は、この五濁惡世にして、惡衆生惡見惡煩惱惡邪無信さかりなる時、彌陀の名號をほめ、衆生を勸勵して、稱念すればかならず往生する事をうととき給へり。又十方の諸佛は、衆生の釋迦一佛の所説を信ぜざらん事ををそれて、すなはちともに同心同時にをの舌相を出して、あまねく三千世界におほひて、誠實のことばをとき給ふ。なんだち衆生、みな釋迦の所説所讚所證を信ずべし。一切の凡夫罪福の多少時節の久近とはず。たゞよく上は百年をつくし、下は一日七日十聲一聲にいたるまで、心をひとつにしても、はら彌陀の名號を念ずれば、さだめて往生する事をうといふ事を信ずべし。かならずうたがふことなかれと證誠し給へり。かるがゆへに人につゐて信をたつといへり。かくのごとく一切諸佛の、一佛ものこらず同心に、あるひは願をこし、あるひはその願をとき、あるひはその説を證して、一切の凡夫念佛して決定往生すべきむねをすゝめ給へるうへには、いかなるほとけの又きたりて、往生すべからずとはの給ふべきぞといふ事は、りをもて、ほとけきたりての給ふともおどろくべからずとは信ずる也。ほとけなほしかり。いはんや地前地上の菩薩をや。いはんや

小乗の羅漢をやと意えつれば、まして凡夫のとかく申さんによりて、一念もうたがひおどろく心あるべからずとは申なり。おほかた此信心の様を、人の意えわかぬとおぼゆる也。心のそみくくと身のけもいよだち、なみだもおつるをのみ信のおこると申すは、ひが事にてある也。それは歡喜隨喜喜とぞ申べき。信といはうたがひに對する意にて、うたがひをのぞくを信とは申すべき也。みる事につけても、さく事につけても、その事一定さぞとおもひとりつる事は、人いかに申せども、不定におもひなす事はなきぞかし。これをこそ物を信ずるとは申せ。その信のうへに歡喜隨喜などもをこらんはず。くれたるにてこそあるべけれ。たとへばとしごろ心のほどをのみとりて、そら事せぬたしかならん人ぞとたのみたらん人の、さまざまにおそろしき誓言をたて、なをざりならずねんごろにちぎりをきたる事のあらんを、ふかくたのみて、わすれずたもちて、心のそこにかくたくはへたらんに、いと心の程もしらざらん人の、それなたのみそ、そら事をするぞと、さまざまにいひさまたげんにつきて、すこしもかはる心はあるまじきぞかし。それがやうに彌陀の本願をもふかく信じて、いはんやぶらるべからず。いはんや一代の教主も付囑し給へるをや。いはんや十

方の諸佛も證誠し給へるをやと意すべきにや。まことにことはりをきゝひらかざらんほどこそあらめ。ひとたびも是をきゝて信ををこしてんのちは。いかなる人とかくいふとも。なにかはみだるゝ心あるべきとこそはおぼえ候へ。つぎに行につめて信をたつといふは。即行に二つあり。一には正行。二には雜行なりといへり。此二行につめてあるひは行相。あるひは得失。文ひろく義おほしといへども。しばらく略を存す。つぶさには。下の起行の中にあかすべし。深心の大要をとるに是にあり。

和語燈錄に出づ。了惠曰く。この文に下卷あるべしとみゆるが。いづくにかくれて侍るにか。いまだたづねえず。もしたづねうる人あらばこれにつげと。

四 淨土宗略抄

淨土宗略抄

このたび生死をはなるゝみち。淨土にむまるゝにすぎたるはなし。淨土にむまるゝ

をこなひ。念佛にすぎたるはなし。おほよそうき世をいてゝ佛道にいるにおほくの門ありといへども。おほきにわかつて二門を出ず。すなはち聖道門と淨土門と也。はじめに聖道門といは。此娑婆世界にありながら。まどひをたちさとりをひらく道也。これにつきて大乘の聖道あり。小乗の聖道あり。大乘に又二あり。すなはち佛乘と菩薩乘と也。小乘に又二あり。聲聞乘と緣覺乘と也。これらを惣じて四乘となづく。たゞしこれらはみな。このごろのわれらが身にたへたる事にあらず。このゆへに道綽禪師は。聖道の一種は今時に證しがたしとの給へり。さればをのゝのをこなふやうを申して詮なし。たゞ聖道門は聞とをくしてさとりがたく。まどひやすくしてわが分にはおもひよらぬみちなりと。おもひはなつべき也。

つぎに淨土門といは。この娑婆世界をいとひすてゝ。いそぎて極樂にむまるゝ也。かの國にむまるゝ事は阿彌陀佛のちかひにて人の善惡をえらばず。たゞほとけのちかひをたのみたのまざるによる也。このゆへに道綽は。淨土の一門のみありて通入すべきみちなりと。のたまへり。さればこのごろ生死をはなれんと思はむ人は。證しがたき聖道をすてゝ。ゆきやすき淨土をねがふべき也。この聖道淨土をば難行道易

行道となづけたり。たとへをとりにてこれをいふに難行道はけはしきみちをかちにてゆくがごとし。易行道は海路をふねにのりてゆくがごとしといへり。あしなえ目しぬたらん人はかゝるみちにはむかふべからず。たとふねにのりてのみむかひのきしにはつくなり。しかるにこのごろのわれらは智恵のまなこしむ。行法のあしなへたるともがら也。聖道難行のけはしきみちには。惣じてのぞみをたつべし。たと彌陀の本願のふねにのりて。生死のうみをわたり。極樂のきしにつくべき也。いまこのふねはずなはち彌陀の本願にたとふる也。その本願といは。彌陀のむかしはじめて道心をこして。國王のくらゐをすて。出家して。ほとけになりて衆生をすくはん。とおぼしめし。時淨土をまうけむために。四十八願をこし給ひし中に。第十八の願にいはいはく。もしわれほとけにならん。十方の衆生。わがくに。むまれんとねがひて。わが名號をとなふる事。下十聲にいたるまで。わが願力に乗じて。もしむまれずば。われほとけにならじ。とちかひ給ひて。その願をこなひあらはして。いますてにほとけになりて。十劫を経給へり。されば善導の釋には。かのほとけいま現に世にましまして成佛し給へり。まさにしるべし。本誓重願むなしからず。衆生稱念すれば。かな

らず往生する事を得との給へり。このことはいはるをおもふに。彌陀の本願を信じて念佛申さん人は。往生うたがふべからず。よくよくこのことはいはるを思ひときて。いかさまにも。まづ阿彌陀佛のちかひをたのみて。ひとすぢに念佛を申して。ことさとの人の。とかくいひさまたげむにつきて。ほとけのちかひをうたがふ心ゆめ。あるべからず。かやうに心えて。さきの聖道門は。わが分にあらずと思ひすて。この淨土門にいりて。ひとすぢにほとけのちかひをあふぎて。名號をとなふるを。淨土門の行者とは申す也。これを聖道淨土の二門と申すなり。つぎに淨土門にいりてをこなふべき行につきて申さば。心と行と相應すべき也。すなはち安心起行となづく。その安心といは。心づかひのありさま也。すなはち觀無量壽經に説ていはく。もし衆生ありて。かのくに。むまれんと願するものは。三種の心をこして。すなはち往生すべし。何等をか三とする。一には至誠心。二には深心。三には迴向發願心なり。三心を具するものは。かならずかのくに。むまるといへり。善導和尚この三心を釋しての給はく。はじめの至誠心といは。至といは。眞也。誠といは。實也。一切衆生の身口意業に修せんと。ころの解行。かならず眞實心の中になすべき事

をあかさんとおもふ。外には賢善精進の相を現じて、内には虚假をいづく事を得ざれ。又内外明闇をさらはず。かならず眞實をもちゐるがゆへに至誠心となづくといへり。かるがゆへに至誠心とよかれたるは、すなはち眞實の心を云なり。眞實といふは、身にふるまひ口にいひ心に思はん事も、内むなくして外をかざる心なきをいふなり。詮してはまことに穢土をいとひ淨土をねがひて、外相と内心と相應すべき也。ほかにほかしこき相を現じて、うちには悪をつくり、外には精進の相を現じて、内には懈怠なる事なかれといふ意也。かるがゆへにほかに賢善精進の相を現じて、うちには虚假をいづく事なかれといへり。念佛を申さんにつゐて、人目には六万七万申すと披露して、まことにはさ程も申さずや。又人の見るありはたうとげにして、念佛申すよしを見え、人も見ぬところにては念佛申さずなどするやうなる心ばへ也。さればとて、わろからん事をもほかにあらはさんがよかるべき事にてはなし。たと詮するところは、まめやかにほとけの御意にかなはん事をおもひて、内にまことをこして、外相をば機嫌にしたがふべき也。機嫌にしたがふがよき事なればとて、やがて内心のまこともやぶるゝまでふるまはゞ。又至誠心かけたる心になりぬべ

したゞうちの心をまことにて、ほかをばとてもかくてもあるべき也。かるがゆへに至誠心となづく。二に深心といは、すなはち善導釋しての給はく、深心といは、ふかく信ずる心也。これに二つあり。一には決定して、わが身はこれ煩惱を具足せる罪惡生死の凡夫也。善根薄少にして、曠劫よりこのかたつねに三界に流轉して、出離の縁なしと、ふかく信ずべし。二にはふかくかの阿彌陀佛、四十八願をもて衆生を攝取し給ふ。すなはち名號をとなふる事。下十聲にいたるまで、かのほとけの願力に乗じて、さだめて往生を得と信じて、乃至一念もうたがふ心なきがゆへに深心となづく。又深心といは、決定して心を建、佛の教に順じて修行して、ながくうたがひをのぞきて、一切の別解別行、異學異見、異執のために、退失傾動せられざれといへり。この釋の意は、はじめにわが身の程を信じて、のちにはほとけのちかひを信ずるなり。のちの信心のためには、はじめの信をばあぐる也。そのゆへは往生をねがはんもろく、の人彌陀の本願の念佛を申しながら、わが身に貪欲瞋恚の煩惱をもこし、十惡破戒の罪惡をもつくるにをそれて、みだりにわが身をかるしめて、かへりてほとけの本願をうたがふ。善導はかねてこのうたがひをかく見て、二つの信心のやうをあげてわれらが

ごときの煩惱をもをこし罪をもつくる凡夫なりともふかく彌陀の本願をあふぎて念佛すれば十聲一聲にいたるまで決定して往生するむねを釋し給へりまことにはじめのわが身を信ずる様を釋し給はざりせばわれらが心ばへのありさまにてはいかに念佛申すともかのほとけの本願にかなひがたくいま一念十念に往生するといふは煩惱をもをこさずつみをもつくらぬめてたき人にてこそあるらめわれらごときのとものがらにてはよもあらじなど身の程思ひしられて往生もたのみがたきまであやうくおぼえなましにこの二つの信心を釋し給ひたる事はいみじく身にしてみてもふべき也この釋を心えわけぬ人はみなわが心のわろければ往生はかなはじなどこそは申あひたれそのうたがひをなすはやがて往生せぬ心ばへ也此むねを意えてながくうたがふ心あるまじき也心の善惡をもかへりみずつみの輕重をも沙汰せずたゞ口に南無阿彌陀佛と申せば佛のちかひによりてかならず往生するぞと決定の心ををこすべき也その決定の心によりて往生の業はさだまる也往生は不定におもへば不定也一定とおもへば一定する事也詮してはふかく佛のちかひをたのみていかなる過をもさらはず一定むかへ給ぞと信じて

うたがふ心のなきを深心とは申候也いかなるとがをもさらはねばとて法にまかせてふるまふべきにはあらずされば善導も不善の三業をば眞實心の中にすつべし善の三業をば眞實心の中になすべしとこそは釋し給ひたれ又善業にあらざるをばうやまでこれをとをさかれ又隨喜せざれなど釋し給ひたれば心のをよばん程はつみをもをそれ善にもすむべき事とこそは心えられたれたゞ彌陀の本誓の善惡をもさらはず名號をとなふればかならずむかへ給ぞと信じ名號の功德のいかなるとがをも除滅して一念十念もかならず往生をうる事のめてたき事をふかく信じてうたがふ心一念もなかれといふ意也又一念に往生すればとてかならずしも一念にかざるべからず彌陀の本願の意は名號をとなへん事もしは百年にても二十年にてももしは四五年にてももしは一二年にてももしは七日一日十聲一聲までも信心ををこして南無阿彌陀佛と申せばかならずむかへ給也惣じてこれをいへば上は念佛申さんと思ひはじめたらんよりいのちをはるまでも申也中は七日一日も申し下は十聲一聲までも彌陀の願力なればかならず往生すべしと信じていくら程こそ本願なれとさだめず一念までも定めて往生すと思ひて退

轉なくいのちをはらんまで申すべき也。又まめやかに往生の心ざしありて、彌陀の本願をたのみて念佛申さん人。臨終のわろき事は何事にかあるべき。そのゆへは、佛の來迎し給ふゆへは、行者の臨終正念のため也。それを意えぬ人は、みなわが臨終正念にて念佛申したらんおりぞ、ほとけはむかへ給ふべきとのみ意えたるは、佛の本願を信ぜず。經の文を意えぬ也。稱讚淨土經には、慈悲をもて加へ祐けて、心をしてみだらざらしめ給ふととかれたる也。たゞの時よく、申しをきたる念佛によりて、かならずほとけは來迎し給ふ也。佛のきたりて現じ給へるを見て、正念には住すと申すべき也。それにさきの念佛をばむなしく思ひなして、よしなき臨終正念をのみいのる人のおほくある。ゆゑしき僻胤の事也。されば佛の本願を信ぜん人は、かねて臨終をうたがふ心あるべからず。當時申さん念佛をぞいよ、心を至して申べき。いつかは佛の本願にも、臨終の時念佛申たらん人をのみむかへんとはたて給ひたる。臨終の念佛にて、往生すと申事は、もとは往生をもねがはずして、ひとへにつみをつくりたる悪人の、すでに死なんとする時は、はじめて善知識のすゝめにあひて、念佛して往生すところ。觀經にもとかれたれ。もとより念佛を信ぜん人は、臨終の沙汰を

ばあながちにすべき様もなき事なり。佛の來迎一定ならば、臨終の正念は、また一定とこそは、おもふべきことなり。この意をよく、心をとめて、意うべき事なり。又別解別行の人に、やぶられざれといは、さとりことに、をこなひことならん人の、いはん事につきて、念佛をもすて、往生をもうたがふ心なかれといふ事也。さとりことなる人と申すは、天台法相等の、八宗の學匠なり。行ことなる人と申すは、眞言止觀の一切の行者也。これらは、聖道門をならひをこなふ也。淨土門の解行に、異なるがゆへに、別解別行となづくる也。又惣じておなじく念佛を申す人なれども、彌陀の本願をばたのまずして、自力をばげみて、念佛ばかりにてはいかゞ往生すべき、異なる功德をつくり、ことなる佛にもつかへて、ちからをあはせてこそ、往生程の大事をばとぐべけれ。たゞ阿彌陀佛ばかりにては、かなはじものをなどうたがひをなし、いひさまたげん人のあらんにも、げにもと思ひて、一念もうたがふ心なくて、いかなること、はりをきくとも、往生決定の心をうしなふ事なかれと申す也。人にいひやぶらるまじきことは、りを善導こまかに釋し給へり。意をとりて申さば、たとひ佛ましく、て、十方世界にあまねくみち、て、光をかゞやかし舌をのべて、煩惱罪惡の凡夫、念佛して

一定往生すといふ事。ひが事なり信ずべからずとの給ふとも。それによりて。一念も
うたがふべからず。そのゆへは。佛はみな同心に衆生を引導し給に。すなはちまづ阿
彌陀佛淨土をまうけて。願をこしての給はく。十方衆生わが國に生まれんとねが
ひて。わが名號をとなへんものもし生まれずば。正覺をとらじとちかひ給へるを。釋
迦佛この世界にいて。衆生のためにかの佛の願をとき給へり。六方恒沙の諸佛は。
舌相を三千世界におほふて。虚言せぬ相を現じて。釋迦佛の彌陀の本願をほめて。一
切衆生をすゝめて。かのほとけの名號をとなふれば。さだめて往生すとの給へるは。
決定にしてうたがひなき事也。一切衆生みなこの事を信ずべしと證誠し給へり。か
くのごとく一切諸佛一佛ものこらず。同心に一切凡夫念佛して。決定して往生すべ
きむねをすゝめ給へるうへには。いづれの佛の又往生せずとはの給ふべきぞとい
ふことは。りをもて。佛きたりての給ふとも。おどろくべからずとは申す也。佛なをし
かり。いはむや菩薩聲聞緣覺をや。いかにいはんや凡夫をやと心えつれば。一度この
念佛往生を信じてんのちは。いかなる人とかくいひさまたぐともうたがふ心ある
べからずと申事なり。これを深心とは申すなり。

三に迴向發願心とは。善導これを釋しての給はく。過去をよび今生の。身口意業に修
するところの。世出世の善根。をよび他の一切の凡聖の。身口意業に修するところの。
世出世の善根を隨喜して。この自他所修の善根をもて。ことごとく眞實深心の中に
迴向して。かのくに。生まれんとねがふなり。かるがゆへに迴向發願心となづくも
也。又迴向發願して。生まれんと願はむものは。かならず決定して。眞實心の中に迴向
して。むまるゝ事をうる想をなす也。この心ふかくして。なをし金剛のごとくして。一
切の異見異學。別解別行の人のために。動亂破壊せられざれといへり。この釋の意は。
まづわが身につきて。前世にもつくりとつくりたらん功徳をみなことごとく極樂
に迴向して往生をねがふ也。わが身の功徳のみならず。一切凡聖の功徳をも迴向す
るなり。凡といは。凡夫のつくりたらん功徳をも。聖といは。佛菩薩のつくり給はん功
徳をも。隨喜すればわが功徳となるをもて。みな極樂に迴向して往生をねがふなり。
詮するところ。往生をねがふよりほかに。異事をばねがふまじき也。わが身にも人の
身にも。この界の果報をいのり。又おなじく後世の事なれども。極樂ならぬ淨土にむ
まれんともねがひ。もしは人中天上に生まれんともねがひ。かくのごとくかれこれ

に迴向する事なかれと也。もしこのことはりを思ひさだめざらんさきに。この土の事をものり。あらぬかたへ迴向したらん功德をもみなとり返して。いまは一すぢに極樂に迴向して往生せんとねがふべき也。一切の功德をみな極樂に迴向せよといへばとて又念佛の外にわざと功德をつくりあつめて迴向せよといふにはあらず。たゞすぎぬるかたの功德をも。今は一向に極樂に迴向し。こののちなりとも。をのづからたよりにしたがひて僧をも供養し。人に物をもほどこしあたへたらんをも。つくらんにしたがひてみな往生のために迴向すべしといふ意也。この心金剛のごとくして。あらぬさとりの人をしへられて。かれこれに迴向する事なかれといふ也。金剛はいかにもやぶれぬものなれば。たとへにとりてこの心をもて迴向發願してひまると申也。三心のありさまあらくかくのごとし。この三心を具すればかならず往生す。もし一心もかけぬればひまるゝ事をえずと。善導は釋し給ひたれば。もともこの心を具足すべき也。しかるにかやうに申たつる時は。別々にして事々しきやうなれども。意えとけばやすく具しぬべき心也。詮してはまことの心ありて。ふかく佛のちかひをたのみて往生をねがはんずる心なり。深き淺き事こそかはりめあ

りとも。たれも往生をもとむる程の人は。左程の心なき事やはあるべき。かやうの事は疎く思へば大事におぼえ。とりよりて沙汰すればさすがにやすき事也。かやうにこまかに沙汰ししらぬ人も具しぬべく。又よくく知たる人も少る事ありぬべし。さればこそいやしくをろかなるものゝ中にも往生する事もあり。いみじくたけなるひじりの中にも。臨終わろく往生せぬもあり。されどもこれを具足すべき様をもよくく意えわけてわが意に具したりともしり。又少たりとも思はんをば。かまへてく具足せんとはげむべきことなり。これを安心となづくる也。これぞ往生する心のありさまなり。これをよくく意えわくべきなり。次に起行といは。善導の御意によらば。往生の行おほしといへども。おほきにわかちて二とす。一には正行。二には雜行也。正行といは。これに又あまたの行あり。讀誦正行。觀察正行。禮拜正行。稱名正行。讚嘆供養正行。これらを五種の正行となづく。讚嘆と供養とを二行とわかつ時には。六種の正行とも申也。この正行につきて。ふさねて二とす。一には一心にもはら彌陀の名號をとなへて。行住坐臥によるひるわするゝ事なく。念々にすてざるを正定の業となづく。かのほとけの願に順ずるがゆへにといひて。念佛をもてまさしくさだ

めたる往生の業にたてし。もし禮誦等によるをばなづけて助業とすといひて念佛の外に阿彌陀佛を禮し。もしは三部經をよみ。もしは極樂のありさまを觀するも。讚嘆供養したてまつる事も。みな稱名念佛をたすけんがためなり。まさしくさだめたる往生の業は。たゞ念佛ばかりといふ也。この正と助とをのぞきて。外の諸行をば。布施をせんも。戒をたもたんも。精進ならんも。禪定を修せんも。かくの如くの六度万行。法華經をよみ。眞言をよこなふも。ろくろくのをこなひをば。とくみな雜行となづく。とく極樂に往生せんとおもはゞ。一向に稱名の正定業を修すべき也。これすなはち彌陀本願の行なるがゆへに。われらが自力にて生死をはなれぬべくば。かならずしも本願の行にかざるべからずといへども。他力によらずば往生をとげがたきがゆへに。彌陀の本願のちからをかりて。一向に名號をとなへよと。善導はすゝめ給へる也。自力といは。わがちからをはげみて往生をもとむる也。他力といは。たゞ佛のちからをたのみたてまつる也。このゆへに正行を行ずるものをば。專修の行者といひ。雜行を行ずるをば。雜修の行者と申也。正行を修するは。心つねにかの國に親近して憶念ひまなし。雜行を行ずるものは。心つねに間斷す。迴向してむまるゝ事をうべしと

いへども。疎雜の行となづくといひて。極樂にうるとき行といへり。又專修のものは。十人は十人ながらむまれ。百人は百人ながらむまる。なにをもてのゆへに。外に雜縁なくして正念をうるがゆへに。彌陀の本願と相應するがゆへに。釋迦の教に順ずるがゆへ也。雜修のものは。百人の中に二人むまれ。千人の中に四五人むまる。なにをもてのゆへに。彌陀の本願と相應せざるがゆへに。釋迦の教に順ぜざるがゆへに。憶想間斷するがゆへに。名利と相應するがゆへに。自もさへ。他の往生をもさふるがゆへにと釋し給ひたれば。善導を信じて淨土宗にいらん人は。一向に正行を修して。日々所作に。一万二万乃至五万六十万をも。器量のたへんにしたがひて。いくらなりともはげみて申すべきなりとこそ意えられたれ。それにこれをきゝながら。念佛の外に餘行をくはふる人のおほくあるは。意えられぬ事也。そのゆへは。善導のすゝめ給はぬ事をば。すこしなりともくはふべき道理ゆめくゝなき也。すゝめ給へる正行をだにもなをものうき身にて。いまだすゝめ給はぬ雜行をくはふべき事は。まことしからぬかたもありぬべし。又つみつくりたる人だにも往生すれば。まして功德なれば法華經などをよまんは。なにかはくるしかるべきなど申す人もあり。それらは

むげにきたなき事也。往生をたすけばこそいみじからめ。またげにならぬばかりを。いみじき事とてくはへをこなはん事は。なにかは詮あるべき。惡をばされば佛の御意にこのみてつくれとやすしめ給へる。かまへてとゞめよとこそいましめ給へども。凡夫のならひ。當時のまよひにひかれて惡をつくる事は。ちからをよばぬことなれば。慈悲ををこしてすて給はぬにてこそあれ。まことに惡をつくる人のやうに。餘行どもをくはへたからんは。ちからをよばず。たゞし經などをよまん事を。惡つくるにいひならべて。それもくるしからねば。ましてこれもなどといはんは。不便の事也。ふかき御のりもあしく意うるものにあひぬれば。返りて物ならずあさましくかなしき事也。たゞあらぬさとの人のともかくも申さん事を。ばきいれずして。すゝみぬべからん人を。ば誘^{コソ}すゝむべし。さとりたがひてあらぬさまならん人などに。論じあふ事などは。ゆめくあるまじき事也。たゞわが身一人まづよく往生をねがひて。念佛をばげみて。位たかく往生して。いそぎ返りきたりて。人々を引導せんとおもふべきなり。又善導の往生禮讚に問ていはく。阿彌陀佛を稱念禮觀するに。現世にいかなる功德利益かある。答ていはく。阿彌陀佛をとなふる事一聲すれば。すな

はち八十億劫の重罪を除滅す。又十往生經にいはく。もし衆生ありて。阿彌陀佛を念じて往生をねがふものは。かのほとけすなはち二十五の菩薩をつかはして。行者を護念し給ふ。もしは行。もしは坐。もしは臥。もしはよる。もしはひる。一切の時。一切のところに。惡鬼惡神をして。そのたよりをえせしめ給はずと。また觀經にいふごときは。阿彌陀佛を稱念して。かのくに。往生せんとおもへば。かの佛すなはち無數の化佛。無數の化觀音。勢至菩薩をつかはして。行者を護念し給ふ。さきの二十五の菩薩と。百重千重に行者を圍繞して。行住坐臥をとはず。一切の時處に。もしはひる。もしはよる。つねに行者をはなれ給はずと。又いはく。彌陀を念じて往生せんとおもふものは。つねに六方恆沙等の諸佛のために護念せらる。かるがゆへに護念經となづく。いますでにこの増上縁の誓願のため。のむべきあり。もろくの佛子等。いかてか心をばげまさざらんやといへり。かの文の意は。彌陀の本願をふかく信じて。念佛して往生をねがふ人を。彌陀佛よりはじめたてまつりて。十方の諸佛菩薩。觀音勢至無數の菩薩。この人を圍繞して。行住坐臥。よるひるをも。きはらず。かげのごとくにそひて。もろくの横惱をなす。惡鬼惡神のたよりをはらひのぞき給ひて。現世にはよこ

さまなるわづらひなく、安穩にして、命終の時は極樂世界へむかへ給ふ也。されば念佛を信じて往生をねがふ人は、ことさらに惡魔をはらはんために、よろづのほとけかみにいのりをもし、つゝしみをもする事は、なじかはあるべき。いはんや佛に歸し法に歸し、僧に歸する人には、一切の神王、恆沙の鬼神を眷屬として、つねにこの人をまもり給ふといへり。しかればかくのごときの諸佛諸神、圍繞してまもり給はんうへは、又いづれの佛神かありて、なやまし、またぐる事あらん。又宿業かぎりありて、うくべからんやまひは、いかなるもろく、のほとけかみにいのるとも、それによるまじき事也。いのるによりてやまひもやみ、いのちものぶる事あらば、たれかは一人としてやみしぬる人あらん。いはんや又佛の御ちからは、念佛を信ずるものをば、轉重輕受といひて、宿業かぎりありて、をもくうくべきやまひを、かろくうけさせ給ふ。いはんや非業をはらひ給はん事、ましまさざらんや。されば念佛を信ずる人は、たとひいかなるやまひをうくれども、みなこれ宿業也。これよりもをもくこそうくべきに、ほとけの御ちからにて、これほどもうくるなりとこそは申す事なれ。われらが惡業深重なるを滅して、極樂に往生する程の大事をすらとげさせ給ふ。ましてこのよ

にいく程ならぬいのちをのべ、やまひをたすくるちからましまさざらんやと申事也。されば後生をいのり、本願をたのむ心も、うすき人は、かくのごとく圍繞にも護念にもあづかる事なしとこそ善導はの給ひたれ。おなじく念佛すとも、ふかく信ををこして、穢土をいとひ極樂をねがふべき事也。かまへて心をとめて、このことはりをおもひほどきて、一向に信心を至して、つとめさせ給ふべき也。かやうにこまかに申のべたるをば、わたくしのことばおほくして、あやまりあらんなど、あなづりおぼしめす事ゆめ、あるべからず。ひとへに善導の御ことばをまなび、ふるき文釋の意をぬき、いだして申す事也。うたがひをなす心なくて、かまへて心をとどめて御らんじときて、意えさせ給ふべき也。あなかしこ、この定に意えて、念佛申さんにすぎたる往生の義はあるまじき事にて候なり

和語燈錄に出づ。了惠曰く。本にいはいはく。この書はかまくらの二位の禪尼の語によて。しるし進ぜらるゝ書也云々と。

五 淨土初學鈔

淨土初學鈔

往生要集卷上極樂證據云問十方有淨土何唯願生極樂耶答天台大師云諸經論處處唯勸衆生偏念阿彌陀佛令求西方極樂世界無量壽經觀經往生論等數十餘部經論文啓勸指授勸生西方是以偏念也。已大師披閱一切經論凡十五遍應知所述不可不信。至如天台十疑云阿彌陀佛別有大悲四十八願攝引衆生又觀經云阿彌陀佛有八万四千相一一相有八万四千好一一好放八万四千光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨若有念者機感相應決定得生又阿彌陀經大無量壽經鼓音聲陀羅尼經等云釋迦佛說此經時皆十方世界各有恆沙諸佛舒其舌相遍覆三千大千世界證誠一切衆生念阿彌陀佛乘佛大悲願力故決定得生極樂世界當知阿彌陀佛與此世界偏有因緣何以故得知無量壽經云末世法滅之時特留此經百年在世攝引衆生往生彼國故知彌陀與此世界極惡衆生偏有因緣其餘諸佛一切淨土雖有一經兩經略勸往生不如阿彌陀佛國處處經論懇勸丁寧勸往生也。已上往生要集取意

私云唐土懷感我朝惠心於往生行大分爲二一者念佛往生二者諸行往生也念佛往生者可知諸行往生者往生要集云今私云諸經行業總而言之不出梵網戒品別而論之不出六度細明其相有其十三一者財法等施二者三歸五戒八戒十戒多少戒行三者忍辱四者精進五者禪定六者般若信第一義是也七者發菩提心八者修行六念念佛法僧戒捨天謂之六念十六想觀亦不出之九者讀誦大乘十者守護佛法十一孝養父母奉事師長十二不生憍慢十三不染利養也已今私問云天台大師十疑論意念佛諸行之中何爲往生之行答云凡十疑論一部之中二十餘所乃有念佛往生之詞而無諸行往生之文故知天台意者於往生門則以念佛爲行不以餘行爲行也雖五大部章疏之中少有彌陀極樂之事而彼難備往生解行不以往生極樂爲本意勸之故十疑論者專爲勸進往生極樂作之然則欲得往生雖台宗人當依十疑學念佛門惠心先德亦有此意也又法相宗慈恩大師雖作百本章疏別作西方要決一卷以勸自他往生然則彼宗學人若期往生求西方者當學要決知往生行是亦惠心之意也又三論宗先達律師永觀乃作十因勸勵念佛往生珍海又作決定往生集以演念佛往生之道又真言宗不空三藏作阿彌陀儀軌宣說念佛往生之旨但念佛行相與顯宗所談其意少有異也又彌陀大小神呪句句有阿彌唵多之詞是即句句唱彌陀之意也若無

阿彌嘍多之句縱誦甘露之句無其驗者歟然則諸宗學者誰人違背念佛法門耶應知

諸宗經疏目錄

華嚴宗

- 華嚴經六十卷覺賢譯 法界觀門一卷杜順 搜玄記五卷智儼
- 探玄記二十卷 教義分齊章三卷 金師子章一卷
- 指歸一卷 華嚴三昧觀門一卷 普賢觀行法門一卷
- 華藏世界觀門一卷 華嚴策林一卷 華嚴安盡還源觀一卷
- 心經疏一卷 梵網經疏三卷 起信論疏三卷
- 同別記一卷 十二門論疏一卷 法界無差別論疏一卷已上法藏述
- 新譯華嚴經八十卷行法 新譯華嚴疏二十卷 隨疏演義鈔四十卷
- 四十華嚴經般若譯 貞元新譯華嚴經疏十卷 華嚴法界玄鏡一卷
- 華嚴綱要三卷 華嚴略策一卷 行願品別行疏一卷
- 三聖圓融觀門一卷 十二因緣觀門一卷 五蘊觀門一卷
- 答皇太子所問心要一卷 華嚴刹海變相讚一首 答復禮法師頌一首

證道頌一首已上證觀述出圓宗文類

已上出東大寺圓超錄

此宗章疏雖多今取其要不過于此此等法門中五教十宗十玄六相等法文義雖廣而不演往生極樂之事是非西方指南也

天台宗

- 妙法蓮華經八卷羅什譯 法華玄義十卷天台 同釋籤十卷妙樂
- 同文句十卷天台 同文句記十卷妙樂 摩訶止觀十卷天台
- 同輔行傳弘決十卷妙樂 禪門修證十卷 同觀心論一卷
- 維摩經玄疏六卷已上天台 同經略疏十卷妙樂 四教義十二卷天台
- 三觀義二卷天台 涅槃經疏十五卷灌頂 同玄義一卷灌頂
- 同金錫論一卷妙樂 金光明經疏三卷天台 同經玄義一卷天台
- 華嚴經骨目二卷妙樂 梵網經義記二卷 請觀音經疏一卷
- 觀無量壽經疏一卷 阿彌陀經義記一卷 阿彌陀十疑論一卷已上天台

已上出延曆寺玄照錄

第壹輯 教旨 淨土初學鈔

此宗章疏雖多其要不過于此。此等章疏文義廣博取要不過教觀二門。教則以四教五味爲要。觀則以三觀六卽爲宗。往生極樂之旨卽在觀經疏十疑等。

三論宗

- 法華經八卷
- 同經統略三卷
- 涅槃經疏二十卷
- 勝鬘經寶窟三卷
- 金光明經疏一卷
- 同經遊意一卷
- 孟蘭盆經疏一卷
- 中觀論疏十卷
- 十二門論一卷龍樹菩薩造
- 中論玄一卷
- 大乘玄五卷
- 法華經疏十二卷
- 同經遊意一卷
- 維摩經略疏五卷
- 仁王經疏二卷
- 小品般若經略疏四卷
- 觀無量壽經疏一卷
- 彌勒經遊意一卷
- 百論二卷提婆菩薩造
- 十二門論疏三卷
- 三論序疏一卷
- 法華玄論十卷
- 同經新撰疏六卷
- 法華論疏三卷
- 同經廣疏六卷
- 金剛般若經疏四卷
- 同經廣疏十卷
- 無量壽經疏一卷
- 中觀論四卷龍樹菩薩造
- 百論疏三卷
- 十二門論略疏一卷
- 二諦章三卷
- 淨名玄八卷已上吉藏

已上出元興寺安遠律師錄。

此宗章疏雖多取要不過于此。此中觀經雙卷經疏雖明往生之旨其義不委其餘皆明。八不中道二諦等旨。此等義門是明三祇成佛之旨不宗往生極樂之義也。

法相宗

- 能斷金剛般若波羅蜜多經一卷
- 六門陀羅尼經疏一卷
- 無垢稱經六卷
- 般若心經疏一卷
- 彌勒上生經一卷
- 法華義決一卷惠沼
- 金光明最勝王經十卷
- 同經疏一卷惠沼
- 瑜伽論鈔十六卷基
- 攝大乘論鈔十卷同
- 金剛般若會釋三卷基撰
- 般若理趣經一卷
- 無垢稱經疏六卷
- 妙法蓮華經八卷
- 同經疏二卷
- 同經攝釋四卷智周
- 同經疏六卷惠沼
- 梵網經疏五卷智周已上
大乘經疏
- 大乘百法明論一卷世親菩薩造
玄奘譯
- 大乘阿鞞達摩集論七卷
- 六門陀羅尼經一卷
- 般若理趣分述贊三卷
- 般若心經一卷
- 法華玄贊十卷
- 西方要決一卷已上基師
- 同經決擇記八卷宗俊
- 十一面神呪心經一卷
- 瑜伽論百卷彌勒菩薩造
玄奘譯
- 百法論玄贊一卷基
- 對法論鈔七卷基

- 辨中邊論三卷
- 同疏三卷基
- 二十唯識論一卷
- 同論疏十卷基
- 同論了義燈七卷惠沼
- 同論樞要二卷同
- 同論別鈔五卷同
- 同論了義燈七卷惠沼
- 同論演祕七卷智周
- 宗輪論疏一卷基
- 大乘法苑義林章七卷同
- 入道章一卷智周

已上出東大寺平祚錄。

此宗章疏雖多取要不過于此。慈恩大師雖作百部章疏成唯識論而為其宗。故號唯識法師。然此論中明唯識三性十地因果等而不明往生極樂之旨。故學此唯識論及五分十支之人不知往生極樂之道。欲知此宗極樂之道應學懷感法師羣疑論并慈恩大師西方要決也。

- 地論宗此有兩家一者南地二者北地南地者以慧光為祖師北地者以道龍為祖師慧光有十大弟子
- 南實意三藏 慧光上統 淨影寺慧遠慧光律師之孫弟 僧範 道憑等
- 北菩提留支三藏 道寵等
- 華嚴經疏七卷
- 涅槃經疏十卷
- 無量壽經疏一卷

- 觀無量壽經疏一卷
- 維摩經疏四卷
- 勝鬘經疏三卷
- 溫室經疏一卷
- 十地論疏七卷
- 大乘義章十四卷已上慧遠撰高僧傳云章疏五十餘卷云云

本朝三論宗人兼學此宗而不立為別宗也。淨影大師者自欣都率既生都率又遺誠門徒令修都率之業。因茲雖造觀經等疏而不慙勸西方也。凡其所談教證二道六相圓融等法門也。六相者總別同異成壞之六相也。又大乘義中多章以四宗釋判法門淺深。四宗者一立性宗二破性宗三破相宗四顯實宗也。立性宗者毘曇意也。破性宗者成實意也。破相宗者諸大乘經空無相義也。顯實宗者真如法界隨緣之義也。

- 攝論宗此有兩家一者南地二者北地南地以真諦三藏及法泰而為祖師北地以曇遷禪師而為祖師又地論淨影大師隨曇遷來攝論
- 南真諦三藏 法泰 靜嵩 智愷 僧宗 僧忍 法唯
- 北曇遷 慧休 慧遠 淨業
- 攝論疏二十五卷真諦與智愷共撰之 同論疏六卷
- 雜心疏五卷已上靜嵩

此宗意明十種勝相諸法唯心之旨。攝論梁代傳來此土。爾後百年之間世多不修淨土之業。此即由不會得此論別時意趣之文也。此文消通之後漸修淨業者多矣。私云或人

云攝論宗人空依西方要決願求往生也其旨見別紙

大乘律宗傳教大師所立也

菩薩地持經十卷

梵網經二卷

總大乘律二十七部五十五卷具如目錄

梵網經義記二卷天台

授菩薩戒儀一卷本妙樂註智證

同經疏一卷明曠

顯戒論三卷

同緣起二卷已上山家

傳述一心戒文三卷光定

顯揚大戒論八卷慈覺

普通授菩薩戒廣釋三卷安然

授如來金剛寶戒式一卷昌

天台圓教菩薩戒相承師資血脈譜一首

○蓮華臺藏世界赫赫天光師子座上盧舍那佛

逸多菩薩

天竺鳩摩羅什三藏

靈山聽衆南岳慧思大師靈山聽衆天台智者大師

章安灌頂大師

縉雲智威大師

東陽慧威大師

左溪玄朗大師

荆溪湛然大師

瑯琊道邃大師

大日本國比叡山前入唐受菩薩戒沙門最澄

前入唐受菩薩戒沙門義真道遠弟子

此大乘律宗經論章疏之中不明往生極樂之旨唯明成佛得道之義但明曠等疏中有以持戒行德迴向極樂然是傍依觀經等意而已禪門章云十重四十八輕不爲化城亦不爲人天果報也

真言宗本朝有八家各有師資相承血脈譜

此有二宗一者大日宗二者金剛頂宗大日宗立三部攝諸尊金剛頂宗立五部攝諸尊三部五部之中各有蓮華部法雖是彌陀之法而非往生淨土之行唯是速疾成佛之法也耳但諸尊法中有往生之法謂隨求尊勝無垢淨光如意輪寶篋光明阿彌陀等法也雖有是法只爲一機非往生極樂通方之法也若準善導意此等中唯彌陀供養法可攝讀誦正行也又新譯阿彌陀大呪卽是舊譯鼓音聲陀羅尼之同本也此雖導師所覽然非本願行故不立爲正定之業也

成實宗

立五時列二代此有南北兩家北地以羅什僧爲而爲祖師南地以僧粲而爲祖師

成實論十六卷羅什譯

同論義章二十卷惠影

同疏十六卷道藏

此宗意者四諦立章五聚明義又就此論有大小諍或以爲大乘宗或以爲小乘宗云云

大日經疏云成實諸宗應知此一論有諸家不同。例如四分三家也。然此論一部十六卷二百二品其中唯明三乘聖道之旨。要不明往生極樂之義也。又梁朝三大法師雲旻。皆以此宗之人也。雲者光宅寺法雲師也。善通法華。旻者莊嚴寺僧旻法師也。明解十地勝鬘藏者開善寺智藏法師也。精詳涅槃。妙樂大師云自梁陳已來釋法華者以光宅為長。

俱舍宗以唐三藏并普光法寶而為祖師

俱舍論三十卷

世親菩薩造支那三藏譯

同論記十五卷普光

宋高僧傳普光傳云其疏至圓暉略之為十卷。如漢之有沱歟。

同論疏十五卷法寶

宋高僧傳法寶傳云至乎六離合釋義俱舍宗以寶為定量矣。光師往往同迦溼彌羅餘師禮記衍字也。又云時光寶二法師者若什門之融叡焉。

大乘對俱舍鈔釋此論大意云四合幽鍵六足明鑒也。諸法體用凡聖因果三十軸之內辨盡矣。印度學者號而為聰明論。良有所由也。

又此論意聲聞三生六十劫得道。獨覺四生百劫得道。菩薩三祇百劫成佛。唯明三乘得

道不說往生極樂之法。雖名聰明論而於往生義不若四紙阿彌陀經歟。

四分律宗雖有十部僧祇等律而不弘之

四分律四十五卷或六十卷

此有三家。一者相州日光寺法礪

疏十卷號舊疏。宗依成實論。

二者西太原寺懷素

開四分律宗記十卷。宗依說一切有部。

三者

終南山道宣

行事鈔三卷。六卷鈔六卷。云云。

諸家教相同異集云

山王院。

律有兩家。一疏家。二鈔家。今時律宗以鈔家為高祖。

凡此律宗大意不出戒本羯磨。戒本者即是止惡。羯磨者即是修善。以此止行二善遠期。三乘道果。近期人天果報。然本律文不明淨土。但四分律鈔瞻病送終篇勸往生極樂。然是非律正意。俯依雙卷觀經等意而已。故知以戒律為宗之人若願求往生。空依瞻病送終之儀也。

出漢語證錄

第貳輯 釋 義

三經釋部

六 三部經釋

雙卷經。觀經。阿彌陀經。これを淨土三部經といふ。雙卷經には、まづあみだほとけの四十八願をときのちに願成就をあかせり。その四十八願といふは、法藏比丘。世自在王佛の御まへにして、菩提心ををこして、淨佛國土成就衆生の願をたて給ふ。その四十八願にあるひは無三惡趣ともたて。あるひは不更惡趣ともとき。あるひは悉皆金色ともいふは、みな第十八の願のためなり。その第十八願といは、設我得佛。十方衆生。至心信樂欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。といへり。四十八願の中に、この願ことに勝たりとす。そのゆへは、かの國にもしむまるゝ衆生なくば、悉皆金色無有好醜等の願も、なによてか成就せん。往生する衆生のあるにつきてこそ、身のいろも金色に。好醜あることもなく、五通をも具し、宿命をもさとるべけれ。これによて善導釋しての給はく、法藏比丘四十八願をたて給へるに、若我得佛。十方衆生。稱我名號。願生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。四十八願に一一にみなこの意ありと釋し給へり。をよそ諸佛の願といふは、上求菩提。下化衆生の心なり。大乘經にいはく、菩薩願有二種。一上求菩提。二下化衆生也。其上求菩提本意爲易濟度衆生。云云しかれば、たゞ本意は、下化衆生の願にあり。いま彌陀如來の國土を成就し給ふも、衆生を引接せんがためなり。惣じていづれのほとけも成佛已後は、内證外用の功德。濟度利生の方便みなふかくましまして、勝劣ある事なけれども、菩薩の道を行じ給ひし時の、善巧方便のちかひはこれまちゝなる事也。その中に彌陀如來は、因位の時。もはらわが名號を念ぜんものをむかへんとちかひ給ひて、兆載永劫の修行を衆生に廻向し給ふ。濁世のわれらが依怙。末代の衆生の出離。これにあらずば、なにをか期せんや。これによてかのほとけもみづから我建超世願となり給へり。三世の諸佛も、いまだかくのごときの願をばをこし給はず。十方の薩埵も、いまだこれらの願はましまさず。斯願若剋果。大千應感動。虛空諸天人。當雨珍妙花。とちかひしかば、大地六種に震動し。天より花ふりて、なんぢまさに正覺なり給ふべしとつげたりき。法藏比丘いまだ成佛し給はずとも、この願うたがふべからず。いかにいはんや成佛已後十劫になり給へり。信ぜ

國下至十念。若不生者。不取正覺。四十八願に一一にみなこの意ありと釋し給へり。をよそ諸佛の願といふは、上求菩提。下化衆生の心なり。大乘經にいはく、菩薩願有二種。一上求菩提。二下化衆生也。其上求菩提本意爲易濟度衆生。云云しかれば、たゞ本意は、下化衆生の願にあり。いま彌陀如來の國土を成就し給ふも、衆生を引接せんがためなり。惣じていづれのほとけも成佛已後は、内證外用の功德。濟度利生の方便みなふかくましまして、勝劣ある事なけれども、菩薩の道を行じ給ひし時の、善巧方便のちかひはこれまちゝなる事也。その中に彌陀如來は、因位の時。もはらわが名號を念ぜんものをむかへんとちかひ給ひて、兆載永劫の修行を衆生に廻向し給ふ。濁世のわれらが依怙。末代の衆生の出離。これにあらずば、なにをか期せんや。これによてかのほとけもみづから我建超世願となり給へり。三世の諸佛も、いまだかくのごときの願をばをこし給はず。十方の薩埵も、いまだこれらの願はましまさず。斯願若剋果。大千應感動。虛空諸天人。當雨珍妙花。とちかひしかば、大地六種に震動し。天より花ふりて、なんぢまさに正覺なり給ふべしとつげたりき。法藏比丘いまだ成佛し給はずとも、この願うたがふべからず。いかにいはんや成佛已後十劫になり給へり。信ぜ

ずばあるべからず。彼佛今現在世成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生。と釋し給へるはこれなり。諸有衆生。聞其名號。信心歡喜。乃至一念。至心迴向。願生彼國。即得往生。住不退轉。唯除五逆。誹謗正法。文これは即第十八の願成就の文なり。願には乃至十念ととくといへども。まさしく願成就の中には。一念にありとあかせり。又次に三輩往生の文あり。これは第十九の臨終現前の願成就の文なり。發菩提心等の業をもて三輩をわかつといへども。往生の業は通じてみな一向專念無量壽佛といへり。これすなはちかのほとけの本願なるがゆへ也。また其佛本願力。聞名欲往生。皆悉到彼國。自致不退轉。といふ文あり。漢朝に玄通律師といふものありき。小戒をたもてるものなり。遠行て野寺に宿したりけるに。隣房に人ありてこの文を誦す。玄通これをきゝて一兩遍誦してのち。おもひいだす事もなくて。わすれにけり。そのうちこの玄通律師戒をやぶれり。そのつみによて閻魔の應にいたる時。閻魔法王の給はく。なんぢ佛法流布のところ。にむまれたりき。所學の法。あらばすみやかにとくべしとて。高座にのぼせ給ひき。その時玄通高座にのぼりて。おもひめぐらすに。すべて心におぼゆる事なし。野寺に宿してきゝし文あり。これを誦せんとおもひいて。其佛本願力とい

ふ文を誦したりしかば。閻魔法王たまのかぶりをかたぶけて。これはこれ西方極樂の彌陀如來の功德をとく文なりといひて。禮拜し給ひき。願力不思議なる事。この文に見えたり。佛語彌勒。其有得聞彼佛名號。信心歡喜。乃至一念。當知此人爲得大利。即是具足无上功德。文彌勒菩薩にこの經を付屬し給ふには。乃至一念するをもて。大利无上の功德との給へり。經の大意これらの文にあきらかなるものなり。次に觀經には。定善散善をときて念佛をもて阿難に付屬し給ふ。汝好持是語。といへるはこれなり。第九の眞身觀に。光明徧照十方世界。念佛衆生。攝取不捨。といふ文あり。濟度衆生の願は平等にして差別ある事なけれども。無縁の衆生は利益をかうふる事あたはず。このゆへに彌陀善逝平等の慈悲にもよほされて。光明あまねく十方世界をてらして。一切衆生にことごとく縁をむすばしめんがために。光明無量の願をたて給へり。第十二の願これなり。又名號をもて因として衆生を引接し給ふ事。一切衆生にあまねくきかしめむがために。第十七の願に。十方世界の無量の諸佛。ことごとく咨嗟してわが名を稱せず。といはゞ正覺をとらじと誓給ひて。次に第十八の願に。乃至十念若不生者。不取正覺。とたて給へり。これによて釋迦如來この土にして

とき給ふがごとく。十方にも。そのく。恆河沙のほとけまし。ておなじくこれをしめし給へるなり。しかれば光明の縁は。あまねく十方世界をてらしてもらすことなく。又十方世界の無量の諸佛。みな名號を稱讚し給へば。きこえずといふところなし。我至成佛道。名聲超十方。究竟靡所聞。誓不成正覺。とちかひ給ひしはこのゆへなり。しかれば光明の縁と。名號の因と。和合せば。攝取不捨の益をかうふらんことうたがふべからず。このゆへに往生禮讚の序にいはく。諸佛所證平等是一。若以願行來收非無因緣。然彌陀世尊。本發深重誓願。以光明名號攝化十方。といへり。又この願ひさしく衆生を濟度せんがために。壽命無量の願をたて給へり。第十三の願これなり。惣じては光明無量の願は。横に一切衆生をひろく攝取せんがためなり。壽命無量の願は。豎に十方世界をひさしく利益せんがためなり。かくのごときの因縁和合すれば。攝取の光明の中に。又化佛菩薩まし。てこの人を常に攝護して。百重千重に圍繞し給ふに。信心いよ。増長し。衆苦こと。く消滅す。又臨終の時ほとけみづから來迎し給ふにもろ。の邪業繫よくさふるものなし。これは衆生いのちをはる時にのぞみて。百苦きたりせめて。身心やすき事なく。惡縁ほかにひき。妄念うちにもよほし

て境界自體當生の三種の愛心きをひこる。第六天の魔王この時にあたりて。威勢ををこしてもて。さまたげをなす。かくのごときの種々のさはりをのぞかんがために。かならず臨終の時にはみづから菩薩聖衆に圍繞せられて。その人のまへに現ぜんとちかひ給へり。第十九の願これ也。これにて臨終の時いたれば。ほとけ來迎し給ふ。行者これを見たてまつりて。心に歡喜をなして。禪定にいるがごとくして。たちまちに觀音の蓮臺に乗じて。安養の寶ちにいたる也。これらの益あるがゆへに。念佛衆生攝取不捨といふなり。又この經に具三心者必生彼國と。とけり。三心といは。一には至誠心。二には深心。三には迴向發願心なり。三心はまち。にわかれたりといへども。要をとり詮をえらんでこれをいへば。深心に。おさめたり。善導和尚釋しての給はく。至といは眞なり。誠といは實なり。一切衆生の身口意業に。修するところの解行。かならず眞實心の中になすべき事をあかさんとす。ほかに賢善精進の相を現じて。うちに虚假をいやく事をえざれといへり。その解行といは。罪惡生死の凡夫。彌陀の本願によて。十聲一聲決定して。むまると眞實に解て行ずるこれなり。ほかに本願を信ずる相を現じ。うちには疑心をいやく。これは不眞實の心なり。深心はふかく信

ずる心也。決定してふかく自身は現にこれ罪惡生死の凡夫なり。曠劫よりこのかたつねに流轉して出離の縁なしと信じ。決定してふかくこの阿彌陀如來。四十八願をもて衆生を攝取し給ふ事。うたがひなくもんばかりなければ。かの願力に乗じてさだめて往生する事をうと信ずべしといへり。はじめにまづ罪惡生死の凡夫。曠劫よりこのかた出離の縁ある事なしと信ぜよといへるは。これすなはち斷善闡提のごとくなるもの也。かゝる衆生の一念十念すれば。無始よりこのかたいまだいでざる生死の輪廻をいて。かの極樂世界の不退の國土にむまるといふによりて信心はおこるべきなり。をよそほとけの別願の不思議は。これ凡心のはかるところにあらず。唯佛と佛とのみよくしり給へり。阿彌陀佛の名號をとなふるによて。五逆十惡ことごとくくひまるといふ別願の不思議のちからまします。たれかこれをうたがふべき。善導の疏にいはいはく。あるひは人ありて。なんぢ衆生曠劫よりこのかた。をよび今生の身口意業に。一切の凡聖の身のうへにをいて。つぶさに十惡五逆四重謗法闡提破戒破見等のつみをつくりて。いまだのぞきつくす事あたはず。しかもこれらのつみは三界惡道に繫屬す。いかにぞ一生の修福念佛をもて。すなはちかの無漏無生の

國にいりて。ながく不退のくらゐを證悟する事をえんやといはく。いふべし。諸佛の教行は。かす塵沙にこえたり。冥識の機縁隨情ひとつにあらず。たとへば世間の人のまなこに見つべく信じつべきがごときは。明よく暗を破し。空よく有をふくむ。地よく載養し。水よく生潤し。火よく成壞するがごとし。かくのごときらの事ことごとく待對の法となづく。すなはちみづから見るべし。千差萬別なり。いかにいはんや佛法不思議のちから。あに種々の益なからんやといへり。極樂世界に水鳥樹林の微妙の法をさへづるは不思議なれども。これらはほとけの願力なればと信じて。なんぞたと第十八の乃至十念といふ願をのみうたがふべきや。戀じて佛説を信ぜば。此も佛説なり。かの花嚴の三無差別。般若の盡淨虛融。法華の諸法實相。涅槃の悉有佛性。たれか信ぜざらんや。かれも佛説なり。これも佛説也。いづれをか信じ。いづれをか信ぜざらんや。それ三字の名號はすくなしといへども。如來所有の内證外用の功德。万億恆沙の甚深の法門をこのうちにおさめたり。たれかこれをはかるべきや。疏の玄義分にこの名號を釋してはいはく。阿彌陀佛といは。これ天竺の正音。こゝには翻じて無量壽覺といふ。無量壽といは。これ法覺といは。これ人。人法ならべてあらはす。かるがゆ

へに阿彌陀佛といふ。人法といは所觀の境也。これにつゐて依報あり正報ありといへり。しかればはじめ彌陀如來。功德無漏の所證の法門より。觀音。勢至。普賢。文殊。地藏。龍樹。乃至かの土の菩薩聲聞等にいたるまで。そなへ給へるところの事理の觀行。定惠の功力。内證の智惠。外用の功德。みなことごとく三字の中におさまれり。されば極樂界にいづれの法門か。もれたるところあらん。しかるにこの三字の名號をば。諸宗をのくわが宗に釋しいれたり。眞言には阿字本不生の義。四十二字を出生せり。一切の法は阿字をはなれたる事なきがゆへに功德甚深の名號といへり。天台宗には空假中の三諦。正了緣の三義。法報應の三身。如來所有の功德。これをいてざるがゆへに功德莫大なりといへり。かくのごとく諸宗をのくわが存するところの法につゐて。阿彌陀の三字を釋せり。いまこの宗の意は。眞言の阿字本不生の義も。天台の三諦一理の法も。三論の八不中道の旨も。法相の五重唯識の意も。總じて森羅の万法ひろくこれを攝すとならふ。極樂世界にもれたる法門なきがゆへに。たゞしいま彌陀本願の意は。かくのごとくさとれと云にはあらず。たゞふかく信心をいたしてとなふるものをむかへんとなり。耆婆。扁鵲が万病をいやすくすりは。もろくの木。よろ

づの草をもて合藥せりといへども。病者これをさとりて。その藥木何分。その藥草何兩。和合せりとしらず。しかれども是を服するに万病ことごとくいゆるがごとし。たゞうらむらくはこのくすりを信ぜずして。わがやまひはきはめてをもし。いかゞこの藥にてはいゆる事あらん。とうたがひて服せずんば。耆婆が醫術も。扁鵲が秘方も。むなしくしてその益あるべからざるがごとく。彌陀の名號もかくのごとし。それ煩惱惡業のやまひきはめてをもし。いかゞこの名號をとなへてむまるゝことあらん。とうたがひてこれを信ぜずば。彌陀の誓願。釋尊の所説むなくして。そのしるしあるべからず。たゞあふぎて信ぜずべし。良藥をえて服せずして死することなかれ。崑崙の山にゆきて玉をとらずしてかへり。栴檀のはやしにいたりて枝をよぢずして。いなば後悔いかゞせん。みづからよく思量すべし。そもくわれら曠劫よりこのかた佛の出世にもあひけん。菩薩の化道にもあひけん。過去の諸佛も。現在の如來も。みなこれ宿世の父母也。多生の朋友なり。しかるにかれはすでに菩提を證し給へるに。われはなによて生死にはとゞまれるぞと。はづべし。はづべし。かなしむべし。かなしむべし。本師釋迦如來の衆生大罪のやまに。いり。邪見のはやしに。かくれて。三業放逸

に六情縱蕩ならん者をわが國土にとりきて。教化度脱せしめむとちかひ給ひたりしは。そもいかにしてかゝる衆生をば。度脱せしめむとちかひたまふぞとたづねれば。阿彌陀如來の因位無諍念王と申せし時。菩提心ををこし。衆生をして生死を過度せしめんとちかひ給ひて。すなはち國をもくらゐをもすて。攝取衆生の願ををこし給ひしに。釋迦如來は其時寶海梵志と申て。無諍念王の臣下なりしが。同じく菩提心ををこして。われかならず穢土にして。正覺をなりて。惡業の衆生を引導せんとちかひ給ひて。この願ををこし給へる也。曠劫よりこのかた諸佛出世して。縁にしたがひ機をはかりて。をのく衆生を化度し給ふ事。かず塵沙にすぎたり。あるひは大乗をとき。小乗をとき。あるひは實教をひろめ。權教をひろむ。有縁の機はみなこくとくその益をう。こゝに釋尊八相成道を五濁惡世にとなへて。放逸邪見の衆生の出離その期なきをあはれみて。これより西に極樂世界あり。佛まします阿彌陀となづけたてまつる。この佛は乃至十念若不生者不取正覺とちかひ給ひて。佛になり給へり。すみやかに念ぜよ。出離生死のみちおほしといへども。惡業煩惱の衆生の。とく生死をはなる事。この門にすぎたるはなしとをしへて。ゆめくうたがふ事な

かれ六方恆沙の諸佛も證誠し給ふなりとねんごろにをしへ給ひて。われもしひさしく穢土にあらば。邪見放逸の衆生。われをそしりわれをそむきて。かへりて惡道にあちなん。濁世にいてたる事は。本意ただこの事を衆生にきかしめんがためなりとて。阿難尊者に。なんぢよくこの事を。退代に流通せよとねんごろに約束しをきて。跋提河のほとり。沙羅林のもとにして。八十の春の天。二月十五の夜半に。頭北面西にして。滅度に入給ひき。その時に。日月ひかりをうしな。草木いろを變じ。龍神八部禽獸鳥類にいたるまで。天にあふぎてなき。地にふしてさけぶ。阿難目連等のもろくの。大弟子等。悲泣のなみだををさへて。あひ議して。いはく。釋尊の思になれたてまつりて。そこばくの春秋ををくりき。化縁こゝにつきて。黄金のはだへたちまちにへだたり給ひぬ。あるひはわれら世尊に問たてまつるに。答へ給へる事もあり。あるひは釋尊みづから告給ふ事もありき。濟度利生の方便いまはたれにむてかひか問たてまつるべき。すべからく如來の御ことばをしるしをきて。未來にもつたへ。御かたみともせんといひて。多羅葉をひろひて。ことく是をしるしをきし。三藏たちこれを譯して。唐土にひろめ。本朝へつたへたまふ。諸宗に學するところの。一代聖教これ

也。しかるに阿彌陀如來善導和尚となりて唐土に出てて。如來出現於五濁。隨宜方便化群萌。或說多聞而得度。或說小解證三明。或教福惠雙除障。或教禪念坐思量。種種法門皆解脫。無過念佛往西方。上盡一形。至十念。三念五念佛來迎。直爲彌陀弘誓重。致使凡夫念即生との給へり。釋尊出世本懷。ただこの事にありといふべし。自信教人信。難中轉更難。大悲傳普化。眞成報佛恩といへば。釋尊の恩を報ずるも。また唯この念佛にありといふべし。もし此たびひなくすぎなば。出離いづれの時をか期せんとする。すみやかに信心ををこして生灰を過度すべし。次に迴向發願心といは。人ごと具しつべき事なり。國土の快樂をきゝてたれかねがはざらんや。そもくかの國土に九品の差別あり。われらいづれの品をか期すべき。善導和尚の御意は極樂は是報土。彌陀は是報佛なり。されば未斷惑の凡夫は。すべてひまるべからずといへども。彌陀別願の不思議にて。罪惡生死の凡夫。一念十念してすなはちひまると釋し給へり。しかるを上古よりこのかたおほく下品といふとも足ぬべしといひて上品をねがはず。これは惡業のをもきををそれて心を上品にかけざる也。もしこれ惡業によらば。惣て往生すべからず。願力によてひまれれば。なんぞ上品にすゝまん事をかたしとせん。そ

れ彌陀淨土をまうけ給事は。願力の成就するゆへなり。しかればこれ念佛の衆生のひまるべきくになり。乃至十念若不生者不取正覺とたて給ひて。此願によて感得し給ふところなるゆへなり。今此觀經の九品の業をいは。下品は五逆十惡の罪人。臨終の時はじめて善知識のすゝめによて。あるひは十聲あるひは一聲。稱念してひまると。事をえたり。しかるにわれら罪業をもしといへども。五逆をばつくらず。行業をろそかなりといへども。一聲十聲にすぎたり。臨終よりさきに彌陀の誓願を聞得て。隨分に信心をいたす。されば下品まではくだるべからず。中品は小乘の持戒の行者。及世間の孝養父母仁義禮智信等の行人なり。この品には中々にひまれがたし。小乘の行人にもあらず。またもちたる戒もなければ。われらが分にあらず。上品は大乗の凡夫。菩提心等の行なり。菩提心は諸宗をのく。其意を同じからず。淨土宗の意は。淨土にひまれんとねがふを菩提心といふ。又念佛はすなはちこれ大乘の行なり。無上功德なり。しかれば上品往生は手をひくべからず。又本願に乃至十念とたて給ひて。臨終現前の願に。大衆に圍繞せられてその人のまへに現せんとたて給へり。中品は聲聞衆の來迎。下品は化佛の三尊あるひは金蓮花等の來迎なり。しかるを大衆に

廻繞せられて現ぜんとたて給へる本願の意趣は上品の來迎をまうけ給へり。なんどあながちにあひすまはんや。又善導和尚三万已上は上品上生の業との給へり。數遍によて上品にむまるべし。又三心につゐて九品あるべし。信心によて上品にむまるべしと見えたり。上品をねがふ事はわが身のためにはあらず。かのくにむまれをはりてかへりてとく衆生を化せんがためなり。これあにほとけの御意にかなはざらんや。次に阿彌陀經はまづ極樂の依正の功徳をとく。これ衆生の願樂の心をすゝめんがためなり。のちに往生の行をあかすに。少善根をもてはむまるゝ事をうべからず。阿彌陀佛の名號を執持して一日七日すれば。往生する事をうとあかせり。衆生これを信ぜざらん事ををそれて。六方にをのく。恆河沙の諸佛ましくて。大千に舌相をのべて證誠し給へり。善導釋していはく。この證によてむまるゝ事をえずば。六方如來ののべ給へる舌。ひとたび口よりいでてをはりて。ながくくちに還りいらすして。自然に壞爛せんとの給へり。しかれば是をうたがふはんものは。彌陀の本願をうたがふのみにあらず。釋尊の所説をうたがふなり。釋尊の所説をうたがふは。六方恆沙の諸佛の所説をうたがふなり。すなはち是大千にのべ給へる舌相を壞爛する也。

もし又是を信ぜば。たゞ彌陀の本願を信ずるのみにあらず。釋尊の所説を信ずるなり。釋尊の所説を信ずるは。六方恆沙の諸佛の所説を信ずる也。一切の諸佛を信ずるは。一切の法を信ずるになる。一切の法を信ずるは。一切の菩薩を信ずるになる。これすなはち一切の三寶を信ずるなり。この信ひろくして廣大の信心なり。善導和尚のいはく。爲斷凡夫疑見執。皆舒舌相覆三千。共證七日稱名號。又表釋迦言說眞。六方如來舒舌證。專稱名號至西方。到彼花開開妙法。十地願行自然彰。心心念佛莫生疑。六方如來證不虛。三業專心無雜亂。百寶蓮花應時見。文。

和語證錄に出づ。

七 無量壽經釋

無量壽經釋

正依善導。傍依諸師并述。愚懷。

將釋斯經略有五意。一者大意。二者立教開宗。三者淨教本末。四者釋名。五者入文解釋。一大意者釋迦世尊捨無勝淨土而出此穢土爲欲說淨土教勸誘衆生令得生淨土。彌陀如

來捨此穢土而出彼淨土為欲引導穢土衆生令得生淨土。是則諸佛攝取淨土出興穢土之本意也。善導和尚云釋迦斯方發遣彌陀即彼國來迎彼喚此遣等云云。此乃此經大意也。二立教開宗者亦分為二。一諸宗立教不同。二正立二教。一諸宗立教不同者法相三時三論二藏。天台四教五時華嚴五教十宗。真言二教十住心等云云。二正立二教者依禪禪師略立二教以判一代佛教。一聖道教。二淨土教。聖道教者若小乘若大乘若顯教若密教皆聖道之攝云云。二淨土教者小乘法中全不說淨土法門。大乘之中多說往生淨土法門。名之淨土教。今此經正是淨土教攝云云。次以橫截五惡趣文釋二教差別。道神淨影龍興曇鸞意同之。抑三乘四乘聖道正像既過至末法時但虛有教無有行證。故澆末之世求斷惑證理入聖得果之人是甚難得。然則濁惡衆生何以得離生死。然往生淨土法門雖未斷盡無明煩惱依彌陀願力生彼淨土。超出三界永離生死。求其事跡紀傳所載甚多。故知往生淨土法門是未斷惑而出過三界之法門也。末代出離生死除往生淨土之外更有是處。故欲速出五濁魔境超二苦際者必當歸淨土門。故道綽禪師釋此經橫截五惡趣文云若依此方修治斷除先斷見惑離三途因滅三途果。後斷修惑離入天因絕入天果。斯皆漸次斷除不名橫截。若得往生彌陀淨國娑婆五道一時頓捨。故名橫截。橫截五惡趣者截其果也。惡趣自然閉者閉其因也。

云云天台真言皆名頓教。然彼斷惑證理故猶是漸教也。明未斷惑凡夫直出過三界長夜者偏是此教。故以此教為頓中之頓也。三淨教本末者於往生教有根本有枝末。例如真言以毘盧遮那經而為根本。以餘雜部而為枝末。淨教亦爾。故以此經而為根本。以餘兼明往生淨土諸經而為枝末。又以斯經名正往生教。以餘諸經名徧往生教。又以此經名有功往生教。以餘諸經名無功往生教。又以斯經名具足往生教。以餘諸經名不具足往生教云云。四釋名者佛者乃是梵音。此翻為覺。三覺圓滿故以名佛。此指能說釋迦即舉通號以顯別體。說者口音陳唱。名句為體。無量壽者所說佛名。梵阿彌陀此譯云無量壽。經者梵修多羅。此翻名經。聖人言說能貫諸法。如經貫華。是乃就喻為名。經能貫華經能持緯。其用相似。故此翻名經。此經則說彼阿彌陀佛因願果證功德故名無量壽經。五入文解釋者此經一部兩卷分為三段。初自我聞如是至願樂欲聞是序分也。次自乃往過去久遠無量至下卷略說之耳。是正宗分也。後自其有得聞彼佛名號至靡不歡喜是流通也。初就序分有通有局。從我聞如是而下語通諸經。故名通序。亦曰證信序。從爾時世尊光顏巍巍而下文局。今經故名別序。亦曰發起序。次就正宗略有四段。一四十八願興意。二依願修行。三所得依正四往生行業。一四十八願興意者所謂四十八願者是法藏比丘所發之願也。凡就願有二。一總

願二別願也。一總願者四弘誓願也。一切菩薩通發此願趣向菩提無有異路。別願者諸佛菩薩各不同。且如釋迦五百藥師十二今阿彌陀四十八願。今此四十八願應一一對方諸佛隨宜釋之。經云乃往過去久遠無量無央數劫有佛出世名錠光如來。次有佛名光遠。至第五十三有佛名處世。其次有佛名世自在王如來。時有國王名離垢淨王。亦名無淨念王。一體異號。聞佛所說發無上道心。即棄金輪位行作沙門。辭方乘富求無上道。高才勇哲與世超異。號曰法藏。詣世自在王如來所。至於是世自在王佛即為廣說二百一十億諸佛刹土天人之善惡國土之麤妙。應其心願。悉現觀之。時彼比丘聞佛所說嚴淨國土皆悉親見超發無上殊勝之願。其心寂靜志無所著。一切世間無能及者。具足五劫思惟攝取莊嚴佛國清淨之行。阿難白佛彼佛國土壽量幾何。佛言其佛壽命四十二劫。時法藏比丘攝取二百一十億諸佛妙土清淨之行。已又大阿彌陀經云其佛即選擇二百一十億佛國土中諸天人民之善惡國土之好醜。為選擇心中所欲願。樓夷互羅佛。此云世自在佛。說經畢。曇摩訶此云法藏。便一其心。即得天眼徹視。悉自見二百一十億諸佛國土中諸天人民之善惡國土之好醜。即選擇心中所願。便結得是二十四願經。平等覺經亦復同之。此中選擇者即是取捨義也。謂於二百一十億諸佛淨土中捨入天之惡而取入天之善。捨國土之醜而取國土之好也。大阿彌陀經選擇

義如是。此經亦有選擇之義。謂攝取二百一十億諸佛妙土清淨之行是也。選擇與攝取其言雖異其意是同。是則捨不清淨行而取清淨行也。上文天人之善惡國土之麤妙其義亦然。準是今於四十八願一往各論選擇。攝取義者第一無三惡趣願者於所親見二百一十億土中或有有三惡趣之國土。或有無三惡趣之國土。乃選擇捨其有三惡趣。惡國土而取其無三惡趣善妙國土。故云選擇也。第二不更惡趣願者於彼諸佛土中或有雖國中無三惡道。其國人天壽終之後從其國土復更三惡趣之土。或有不更惡趣之土。乃選擇捨其更惡趣。惡國土而選擇取其不更惡趣善妙國土。故云選擇也。第三悉皆金色願者於彼諸佛土中或有一土中有黃白二類人天之國土。或有純黃金色之國土。乃選擇捨黃白二類。惡國土而選擇取黃金一色善妙國土。故云選擇也。第四無有好醜願者於彼諸佛土中或有人天形色好醜不同之國土。或有形色一類無有好醜之國土。乃選擇捨好醜不同。惡國土。選擇取無有好醜善妙國土。故云選擇也。乃至第十八念佛往生願者於彼諸佛土中或有以布施為往生行之土。或有以持戒為往生行之土。或有以忍辱為往生行之土。或有以精進為往生行之土。或有以禪定為往生行之土。或有以般若信第一義是也。為往生行之土。或有以菩提心為往生行之土。或有以六念為往生行之土。或有以持經為往生行之土。或有以持呪

爲往生行之士。或有以起立塔像飯食沙門及以孝養父母奉事師長等種種行各爲往生行之國土。或有專稱其國佛名爲往生行之士。如此但以一行配一佛土者是一往義也。再往論之其義不定。或有一佛土中以多行爲往生行之士。或有多佛土中通以一行爲往生行之士。如是往生之行種種不同不可具述也。今則選捨前布施持戒乃至孝養父母等諸行而選取專稱佛名故云選擇也。且約五願略論選擇其義如是。自餘諸願準此應知。問曰如餘諸願選捨麤惡而選取善妙其理可然。何故第十八願選捨一切諸行偏唯選取念佛一行爲往生本願乎。答曰聖意難測不能輒解。雖然今試以二義解之。一者勝劣義。二者難易義。初勝劣義者念佛是勝。餘行是劣。所以者何。名號者是功德之所歸也。然則彌陀一佛所有四智三身十力四無畏等一切內證功德及相好光明說法利生等一切外用功德皆悉攝在彼佛名號之中。故名號功德最爲勝也。餘行不然。各守一隅而已。是以爲劣。譬如世間屋舍其屋舍名宇中攝棟梁椽柱等一切之具。而棟梁等一一名宇中不能攝一切。應知佛名號功德勝餘一切功德也。故捨劣取勝以爲本願歟。次難易義者念佛易修。諸行難修。且約諸宗言之。昔時法藏比丘若以三密行爲往生願則如真言宗。無畏不空慧果法全等輩往生。自餘諸宗之人不可得生。若以見性成佛爲往生願則如佛心宗。慧可僧璨弘忍惠

能等輩往生。自餘諸宗之人不可得生。若以一乘實相爲往生願則如天台宗。天台章安妙樂道邃等輩往生。自餘諸宗之人不可得生。若以海印頓觀爲往生願則如華嚴宗。賢首清涼等輩往生。自餘諸宗之人不可得生。若以入中道爲往生願則如無相宗。嘉祥法朗等輩往生。自餘諸宗之人不可得生。若以方法唯識爲往生願則如有相宗。玄奘慈恩等輩往生。自餘諸宗之人不可得生。若以二百五十等戒爲往生願則如四分宗。南山東西之律師往生。自餘諸宗之人不可得生。然念佛往生願真言止觀行人共同修之。華嚴達磨門人修之無妨。有相無相行人四分五分律師勤修念佛何爲有妨。誠是易相續故往生有憑也。由是支那本邦諸宗高僧發願往生之人古來甚多不遑枚舉焉。然則真言等八宗行者皆共不漏往生慈悲願網也。若以布施建爲別願。戒日獨可得往生。一切貧窮之人不可得生。若以起塔建爲別願。育王一可得往生。一切困乏之人不可得生。若以稽古鑽仰建爲別願。防生光基之倫可得往生。淺識麤漫不可得生。若以多聞廣學建爲別願。生肇融叡之類可得往生。寡聞狹劣不可得生。若以棄家捨欲建爲別願。出家二衆可得往生。在家二衆不可得生。若以豪貴顯官建爲別願。一人三公可得往生。萬民庶黎不可得生。然今念佛往生本願不簡有智無智持戒破戒多聞小見不簡在家出家。一切有心之者易唱易生。譬如一月浮於